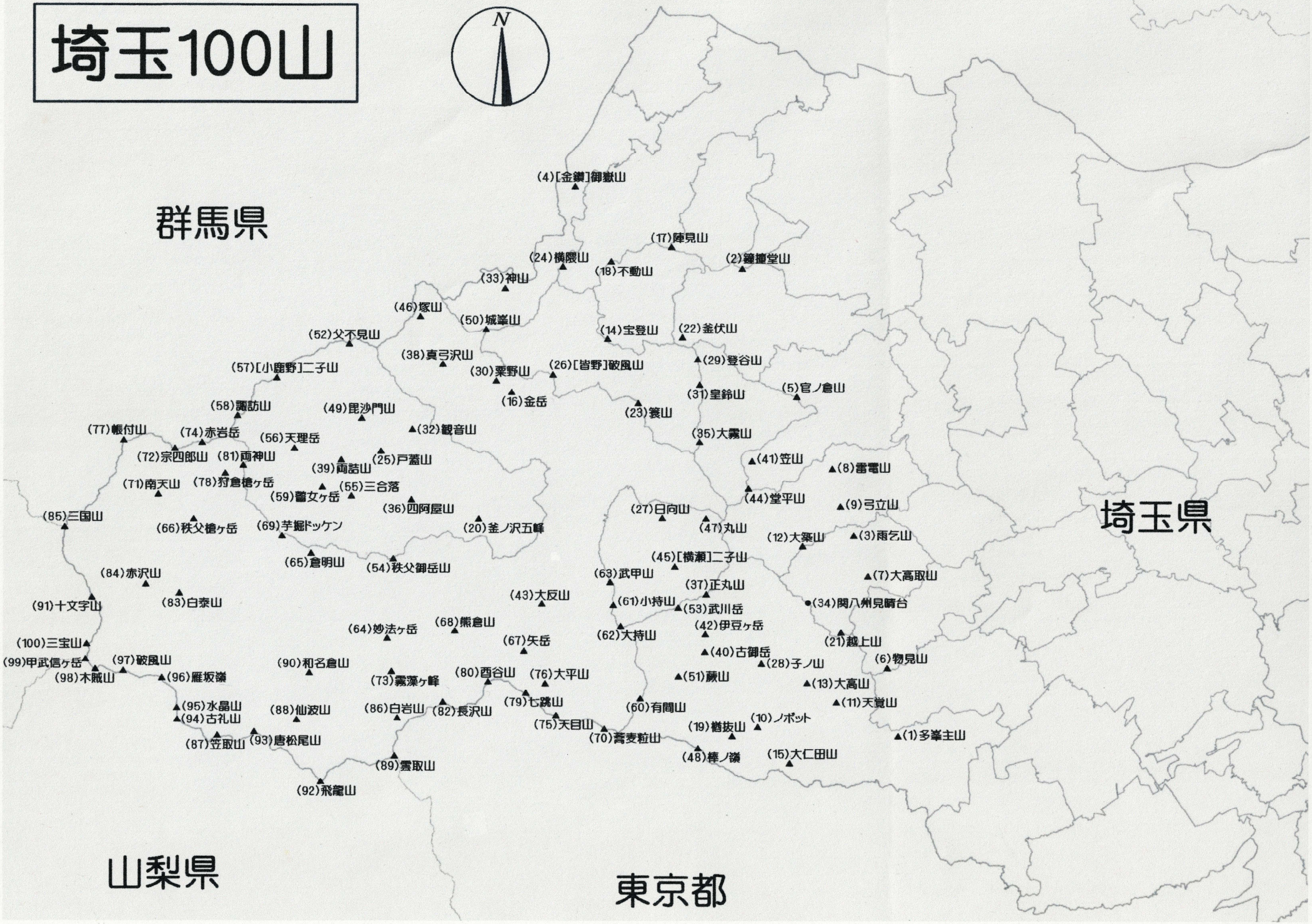
創立二十周年記念誌

みんなで歩いた 埼玉百山

新ハイキングクラブ浦和支部

埼玉100山



N
群馬県
埼玉県
山梨県
東京都
(4)[金鑽]御嶽山
(17)陣見山
(24)横隈山
(18)不動山
(2)鐘撞堂山
(33)神山
(46)塚山
(50)城峯山
(14)宝登山
(22)釜伏山
(52)父不見山
(38)真弓沢山
(29)登谷山
(57)[小鹿野]二子山
(30)粟野山
(26)[皆野]破風山
(5)官ノ倉山
(31)皇鈴山
(16)金岳
(58)諏訪山
(49)毘沙門山
(23)簑山
(77)帳付山
(74)赤岩岳
(56)天理岳
(32)観音山
(35)大霧山
(72)宗四郎山
(81)両神山
(25)戸蓋山
(41)笠山
(8)雷電山
(39)両詰山
(71)南天山
(78)狩倉槍ヶ岳
(55)三合落
(59)薔女ヶ岳
(44)堂平山
(9)弓立山
(36)四阿屋山
(27)日向山
(85)三国山
(66)秩父槍ヶ岳
(69)芋掘ドッケン
(20)釜ノ沢五峰
(47)丸山
(12)大築山
(3)雨乞山
(65)倉明山
(54)秩父御岳山
(45)[横瀬]二子山
(84)赤沢山
(63)武甲山
(7)大高取山
(37)正丸山
(43)大反山
(91)十文字山
(83)白泰山
(61)小持山
(34)関八州見晴台
(53)武川岳
(68)熊倉山
(64)妙法ヶ岳
(42)伊豆ヶ岳
(100)三宝山
(67)矢岳
(62)大持山
(21)越上山
(40)古御岳
(99)甲武信ヶ岳
(97)破風山
(90)和名倉山
(28)子ノ山
(6)物見山
(98)木賊山
(96)雁坂嶺
(73)霧藻ヶ峰
(80)西谷山
(76)大平山
(51)蕨山
(13)大高山
(95)水晶山
(94)古礼山
(88)仙波山
(86)白岩山
(82)長沢山
(79)七跳山
(60)有間山
(11)天覚山
(10)ノボット
(75)天目山
(19)楢抜山
(1)多峯主山
(87)笠取山
(93)唐松尾山
(70)蕎麦粒山
(48)棒ノ嶺
(15)大仁田山
(89)雲取山
(92)飛龍山

埼玉百山の編集について

新ハイキングクラブ浦和支部
支部長　益田光男

いつも年度初めには基本計画を立てるのですが、３年前は中期計画として３年計画も掲げました。その計画が埼玉百山の編集でした。

浦和支部はほとんどの会員が埼玉県人ですから県内で登ったことのない山はないと思っていたのですが、いざ、リストアップして見るとまだ登ったことにない山や、かなり前に登ったが最近は登ってない山があったりしました。そこで、リストアップした埼玉百山を３年間で新たに登って編集しようということにしたのです。そしていざ登ってみると、以前歩いた登山道が変わってしまっている山や、最近登らなくなったために途中で消えてヤブ漕ぎになっている登山道もありました。

浦和支部のほとんどの会員に参加してもらいました。そして登りながら現地の方々との触れ合いを持ち、その地域の話を聞かせてもらったり、温かいももてなしを受けたりしながらリストアップした山はすべてを登りました。

あえて１００名山としなかったのはガイドコースとしての編集ではなく紀行文として編集したこと、また、自然に対してランク付けはしない方がよいと考えたからです。

今年は浦和支部の創立二十周年になります。わたし達が登った埼玉百山を皆様方にご紹介するにはよい機会だと思っております。楽しみながらお読みいただきたいと思います。

おかげさまで今日まで大きな事故もなく登山活動ができたこと対し自然（山）に感謝したいと思っております。

【水野律子　スケッチ】

『みんなで歩いた 埼 玉 百 山』

目　次

◈埼玉百山の位置図（索引マップ）
◈埼玉百山の編集について　支部長　益田光男
◈浦和支部選定『埼玉百山』・紀行文筆者　一覧・・・1
◈組み合わせて歩いた山の紹介・・・・・・・・・・・4
◈浦和支部創立２０周年に寄せて　会長　鮫島員義・・155
◈編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157

①多峯主山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
②鐘撞堂山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
④金鑽・御嶽山・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
⑤官ノ倉山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
⑥物見山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
⑦大高取山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
⑧雷電山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
⑨弓立山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
⑪天覚山～⑬大高山・・・・・・・・・・・・・・・・21
⑫大築山～③雨乞山・・・・・・・・・・・・・・・・23
⑭宝登山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
⑮大仁田山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
⑯金岳～㉚粟野山・・・・・・・・・・・・・・・・・29
⑰陣見山～⑱不動山・・・・・・・・・・・・・・・・31
⑲楢抜山～⑩ノボット・・・・・・・・・・・・・・・33
⑳釜ノ沢五峰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
㉑越上山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
㉒釜伏山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

㉓簑山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
㉔横隈山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
㉕戸蓋山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
㉖皆野・破風山・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
㉘子ノ山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
㉛皇鈴山～㉙登谷山・・・・・・・・・・・・・・・・51
㉜観音山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
㉝神山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
㉞関八州見晴台・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
㉟大霧山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
㊱四阿屋山～㊺三合落・・・・・・・・・・・・・・・63
㊲正丸山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
㊳真弓沢山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
㊴両詰山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
㊶笠山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
㊷伊豆ヶ岳～㊵古御岳・・・・・・・・・・・・・・・73
㊹堂平山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
㊸武川岳～㊺二子山・・・・・・・・・・・・・・・77
㊻塚山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
㊼丸山～㉗日向山・・・・・・・・・・・・・・・・・81
㊽棒ノ嶺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
㊾毘沙門山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
㊿城峯山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
(52)父不見山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
(54)秩父御岳山・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
(56)天理岳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
(57)小鹿野・二子山・・・・・・・・・・・・・・・・95
(58)諏訪山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

59 瞽女ヶ岳……99
60 有間山～51 蕨山……101
61 小持山～62 大持山～63 武甲山……103
64 妙法ヶ岳……105
65 倉明山～69 芋掘ドッケン……107
66 秩父槍ヶ岳……109
68 熊倉山～80 酉谷山～67 矢岳～43 大反山……111
71 南天山……115
72 宗四郎山・77 帳付山……117
74 赤岩岳……119
75 天目山（三ッドッケ）……121
76 大平山～79 七跳山～70 蕎麦粒山……123
78 狩倉槍ヶ岳……127
81 両神山……129
82 長沢山（雲取山～長沢背稜）……133
85 三国山～91 十文字山～84 赤沢山～83 白泰山……135
73 霧藻ヶ峰～86 白岩山～89 雲取山～92 飛龍山……（紀行文 ②―1）139
88 仙波山～90 和名倉山……（紀行文 ②―2）141
93 唐松尾山～87 笠取山……143
94 古礼山～95 水晶山……145
98 木賊山～97 破風山～96 雁坂嶺……147
100 三宝山～99 甲武信ヶ岳……151

【水野律子　スケッチ】

埼玉百山（新ハイキングクラブ浦和支部選定）

山　　名（△三角点・標高・読み）	紀行文筆者	1/25,000 地形図
1. ☆**多峯主山**(△270.8m　とうのすやま)	池田	「飯能」
2. ☆**鐘撞堂山**(△330.2m　かねつきどうやま)	松田	「寄居」
3. ☆**雨乞山**(△340.3m　あまごいやま)	本島	「越生」
4. ☆**金鑽・御嶽山**(△343.4m　かなさな・みたけやま)	塩﨑	「藤岡」
5. ☆**官ノ倉山**(344m　かんのくらやま)	川俣	「安戸」
6. ☆**物見山**(△375.4m　ものみやま)	神山	「飯能」
7. ☆**大高取山**(△376.4m　おおたかとりやま)	力丸	「越生」
8. ☆**雷電山**(△418.2m　らいでんやま)	松本	「武蔵小川」
9. ☆**弓立山**(△426.9m　ゆみたてやま)	互	「越生」
10. ★**ノボット**(△435.8m)	本島(健)	「原市場」
11. ☆**天覚山**(△445.5m　てんかくさん)	池田	「飯能」
12. ☆**大築山**(466m　おおづくやま)	本島(健)	「正丸峠」
13. ☆**大高山**(493m　おおたかやま)	池田	「原市場」
14. ☆**宝登山**(△497.1m　ほどさん)	佐藤(新)	「鬼石」
15. ☆**大仁田山**(△505.7m　おおにたやま)	刈谷	「原市場」
16. ☆**金岳**(511m　かねたけ)	高田	「皆野」
17. ☆**陣見山**(△531m　じんみやま)	益田	「寄居」
18. ☆**不動山**(△549.2m　ふどうやま)	益田	「鬼石」
19. ☆**楢抜山**(△553.5m　ならぬきやま)	本島(健)	「原市場」
20. ★**釜ノ沢五峰**(565m　かまのさわごほう)	益田	「秩父、三峰」
21. ☆**越上山**(△566.5m　おがみやま)	本島(由)	「越生」
22. ☆**釜伏山**(582m　かまふせやま)	佐藤(新)	「寄居」
23. ☆**簑山**(△586.9m　みのやま)	益田	「皆野」
24. ☆**横隈山**(△593.6m　よこがいさん)	豊田	「鬼石」
25. ★**戸蓋山**(615m　とぶたやま)	高田	「長又」
26. ☆**皆野・破風山**(△626.5m　はっぷさん)	山崎	「皆野」
27. ☆**日向山**(633m　ひなたやま)	荻原	「正丸峠」
28. ★**子ノ山**(660m　ねのやま)	小澤(紀)	「原市場」
29. ☆**登谷山**(668m　とやさん)	浅田	「安戸」
30. ★**粟野山**(△675.3m　あわのやま)	高田	「皆野」
31. ☆**皇鈴山**(679m　みすずやま)	浅田	「安戸」
32. ☆**観音山**(△698m　かんのんやま)	浅田	「長又」
33. ☆**神山**(△732m　かみやま)	塩﨑	「鬼石」
34. ★**関八州見晴台**(760m　かんはっしゅうみはらしだい)	床次・浅田	「正丸峠」
35. ☆**大霧山**(△766.6m　おおぎりやま)	力丸	「安戸」
36. ☆**四阿屋山**(△771.6m　あずまやさん)	大和田	「三峰」
37. ☆**正丸山**(780m　しょうまるやま)	吉野	「正丸峠」
38. ★**真弓沢山**(790m　まゆみざわやま))	高田	「長又、万場」
39. ★**両詰山**(△790.7m　りょうづまりやま)	清水(博)	「長又」
40. ☆**古御岳**(820m　こみたけ)	小澤(紀)	「正丸峠」
41. ☆**笠山**(837m　かさやま)	益田	「安戸」
42. ☆**伊豆ヶ岳**(△850.9m　いずがたけ)	小澤(紀)	「正丸峠」
43. ☆**大反山**(△853.7m　おおそりやま)	大和田	「秩父」
44. ☆**堂平山**(△875.8m　どうだいらさん)	榎本・互	「安戸」
45. **横瀬・☆二子山**(△882.7m　ふたごやま)	益田	「正丸峠」
46. ☆**塚山**(△953.9m　つかやま)	倉重	「万場」

山　　名（△三角点・標高・読み）	紀行文筆者	1/25,000 地形図
47. ☆**丸山**(△960.3m　まるやま)	荻原	「正丸峠」
48. ☆**棒ノ嶺**(969m　ぼうのみね)※棒ノ折山	倉重	「原市場」
49. ☆**毘沙門山**(△996.8m　びしゃもんさん)※白石山	清水(博)	「長又」
50. ☆**城峯山**(△1037.7m　じょうみねさん)	髙橋・互	「鬼石」
51. ☆**蕨山**(1044m　わらびやま)	杉原	「原市場」
52. ☆**父不見山**(1047m　ててみずやま)	大和田	「万場」
53. ☆**武川岳**(1052m　たけかわだけ)	益田	「正丸峠」
54. ☆**秩父御岳山**(△1080.4m　ちちぶおんたけさん)	益田	「三峰」
55. ★**三合落**(△1115.1mさんごうつ)	大和田	「三峰」
56. ☆**天理岳**(1150m　てんりだけ)	田中	「両神山」
57. **小鹿野**・☆**二子山**(△1165.8m　ふたごやま)	山崎	「両神山」
58. ☆**諏訪山**(△1207.1m　すわやま)	互	「両神山」
59. ★**瞽女ヶ岳**(1208m　ごぜがたけ)	高田	「長又、三峰」
60. ☆**有間山**(△1213.5m　ありまやま)	杉原	「武蔵日原」
61. ☆**小持山**(1273m　こもちやま)	清水(順)	「秩父」
62. ☆**大持山**(△1294.1m　おおもちやま)	清水(順)	「秩父」
63. ☆**武甲山**(1304m　ぶこうさん)　※△1295.4	清水(順)	「秩父」
64. ☆**妙法ヶ岳**(1329m　みょうほうがたけ)	柳舘	「雲取山」
65. ★**倉明山**(△1333.4m　くらけやま)	柳舘	「三峰」
66. ☆**秩父槍ヶ岳**(1341m　ちちぶやりがたけ)	田中	「中津峡」
67. ☆**矢岳**(△1357.9m　やだけ)	大和田	「武蔵日原」
68. ☆**熊倉山**(△1426.5m　くまくらやま)	大和田	「三峰」
69. ☆**芋掘ドッケン**(△1464.0m　いもほりどっけん)	柳舘	「中津峡」
70. ☆**蕎麦粒山**(△1472.9m　そばつぶやま)	大和田	「武蔵日原」
71. ☆**南天山**(1483m　なんてんさん)	萩原	「両神山」
72. ★**宗四郎山**(1510m　そうしろうやま)	萩原	「両神山」
73. ☆**霧藻ヶ峰**(△1523.1m　きりもがみね)	浅田	「雲取山」
74. ☆**赤岩岳**(1570m　あかいわだけ)	佐藤(新)	「両神山」
75. ☆**天目山**(△1576m　てんもくざん※三ツドッケ)	大和田、力丸	「武蔵日原」
76. ☆**大平山**(△1603m　おおひらやま)	大和田	「武蔵日原」
77. ☆**帳付山**(1619m　ちょうづけやま)	萩原	「両神山」
78. ★**狩倉槍ヶ岳**(1640m　かりくらやりがたけ)	大瀧	「両神山」
79. ☆**七跳山**(1651m　ななはねやま)	大和田	「武蔵日原」
80. ☆**酉谷山**(△1718.3m　とりだにやま)	大和田	「武蔵日原」
81. ☆**両神山**(△1723.0m　りょうかみさん)	大和田	「両神山」
82. ☆**長沢山**(1738m　ながさわやま)	箕輪	「雲取山」
83. ☆**白泰山**(△1793.9m　はくたいさん)	大瀧	「中津峡」
84. ☆**赤沢山**(△1818.9m　あかざわやま)	大瀧	「中津峡」
85. ☆**三国山**(1834m　みくにやま)	大瀧	「居倉」

山　　名（△三角点・標高・読み）	紀行文筆者	1/25,000 地形図
86.☆**白岩山**(△1921.2m　しらいわやま)	浅田	「雲取山」
87.☆**笠取山**(1953m　かさとりやま)	松田	「雁坂峠」
88.★**仙波山**(△2003.1m　せんばやま)	森田	「雲取山」
89.☆**雲取山**(△2017.1m　くもとりやま)	浅田	「雲取山」
90.☆**和名倉山**(△2036m　わなくらやま)※白石山	森田	「雲取山」
91.☆**十文字山**(△2071.9m　じゅうもんじやま)	大瀧	「居倉」
92.☆**飛龍山**(2077m　ひりゅうさん)　※△2069.1m	浅田	「雲取山」
93.☆**唐松尾山**(△2109.2m　からまつおやま)	松田	「雁坂峠」
94.☆**古礼山**(△2112.1m　これいさん)	床次	「雁坂峠」
95.☆**水晶山**(2158m　すいしょうやま)	床次	「雁坂峠」
96.☆**雁坂嶺**(△2289.2m　かりさかれい)	加藤・内田	「雁坂峠」
97.☆**破風山**(△2317.7m　はふさん)	加藤・内田	「雁坂峠」
98.☆**木賊山**(△2468.6m　とくさやま)	加藤・内田	「金峰山」
99.☆**甲武信ヶ岳**(2475m　こぶしがたけ)	益田・大和田	「金峰山」
100.☆**三宝山**(△2483.3m　さんぽうざん)	益田・大和田	「金峰山」

備　　考

☆印は日本山名事典(三省堂)による表記、 ★・・その他

- No01　多峯主山(とうのすやま)は現地の山名板も国土地理院の地形図にもこの表記。ただし古い日本山名辞典では多峰主山と表記
- No48 棒ノ嶺(ぼうのみね※棒ノ折山) 現地の山名板は棒ノ嶺。国土地理院の地形図では棒ノ嶺(棒ノ折山)。
- No63 武甲山と No92 飛龍山は三角点はあるが、山頂より少し低い所に位置する
- No88 東仙波と西仙波の総称

【水野律子　スケッチ】

【水野律子　スケッチ】

―組み合わせて歩いた山の紹介―

＊11 天覚山(445.5m)～13 大高山(493m)
＊12 大築山(466m)～3 雨乞山(340.3m)
＊16 金岳(511m)～30 粟野山(675.3m)
＊17 陣見山(531m)～18 不動山(549.2m)
＊19 楢抜山(553.5m)～10 ノボット(435.8m)
＊31 皇鈴山(679m)～29 登谷山(668m)
＊36 四阿屋山(771.6m)～55 三合落(1115.1m)
＊42 伊豆ヶ岳(850.9m)～40 古御岳(820m)
＊53 武川岳(1052m)～45 二子山(882.7m)
＊47 丸山(960.3m)～27 日向山(633m)
＊60 有間山(1213.5m)～51 蕨山(1044m)
＊61 小持山(1273m)～62 大持山(1294.1m)～63 武甲山(1295.4m)
＊65 倉明山(1333.4m)～69 芋掘ドッケン(1464m)
＊68 熊倉山(1426.5m)～80 酉谷山(1718.3m)～67 矢岳(1357.9m)～43 大反山(853.7m)
＊72 宗四郎山(1510m)・77 帳付山(1619m)
＊76 大平山(1603m)～79 七跳山(1651m)～70 蕎麦粒山(1472.9m)
＊85 三国山(1834m)～91 十文字山(2071.9m)～
～84 赤沢山(1818.9m)～83 白泰山(1793.9m)
＊**その１**　73 霧藻ヶ峰(1523.1m)～86 白岩山(1921.2m)～
～89 雲取山(2017.1m)～92 飛龍山(2069,1m)
～**その２**　88 仙波山(2003.1m)～90 和名倉山(2036m)
＊93 唐松尾山(2109.2m)～87 笠取山(1953m)
＊94 古礼山(2112.1m)～95 水晶山(2158m)
＊98 木賊山(2468.6m)～97 破風山(2317.7m)～96 雁坂嶺(2289.2m)
＊100 三宝山(2483.3m)～99 甲武信ヶ岳(2475m)

No001

多峯主山（とうのすやま）

（天覧山～多峰主山～カマド山）

標高
△270.8m
N355205
E1391753

2012,01,15
日帰り
地　図
1/25,000
「飯能」

飯能市に鎮座する「多峰主山」、標高が僅かなため、飯能市民はもとより、近郊の人々にとっては格好のハイキング対象だ。山歩きにおいては強者ぞろいの我が浦和支部の山行では、多峰主山一座だけでは勿論物足りず、隣に峰を並べる天覧山などと組み合わせた縦走となる。天覧山から武甲山までを歩くシリーズ山行が企画され、そのパート1として天覧山・多峰主山を含めた山歩きが実施された。西武鉄道飯能駅をスタートし、飯能市街を抜け、山裾にデンと構えた禅寺「能仁寺」に到達。ここで休憩を兼ねて山歩きの身支度をする。禅寺らしい立派な寺構えもさることながら、隅々まで手入れされた広大な庭園に、静寂の中での座禅の様が忍ばれる。清々しさを胸に抱きながら背後の山を見上げる。境内を右手に抜けて、天覧山登山口に出る。県民憩いの場を思わせる整備された山道をハイカーと挨拶を交わしながら登る。そんなのどかな山歩きを楽しんでいると、忽然と懸崖が現れる。その岩棚のあちこちに、様々な表情をした十六羅漢像が座している。

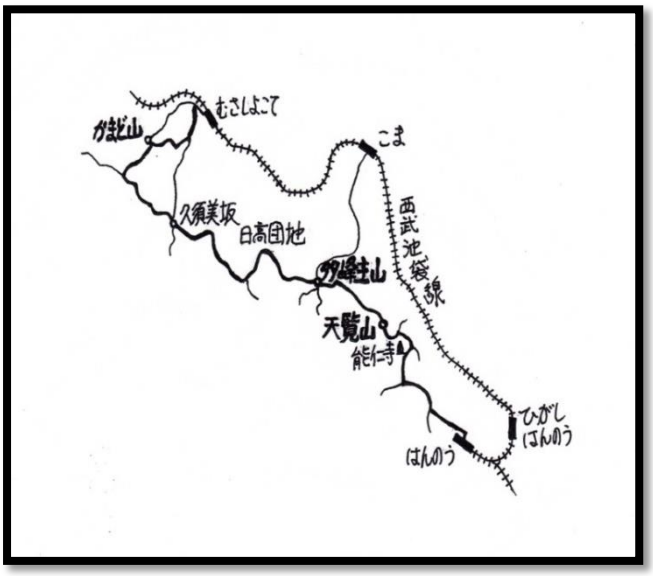
【天覧山山頂】

る。暫し歩みを留め、その一つ一つに見入り心を寄せる。ここには不釣り合いなほどの急な岩を登り切って、展覧山の頂に立つ。富士山や奥多摩の山々、そして飯能市街を一望にする。早くも一座達成だ。しばしの山座同定の後、冬枯れの木立の中を、厚く積もった落ち葉を蹴散らしながら下る。湿地に張った氷を無心に割る幼な子の姿が微笑ましい。埼玉県の固有種であり、県指定天然記念物の飯能笹を解説する標識に注目が集まる。還暦を思わせる真っ赤なチャンチャンコを纏ったコリーと散歩する翁など、親しみを覚えながらハイキング気分をあじわっているうちに、多峰主山（２７１ｍ）の頂に到達。山名が読みずらいとの印象が強いこと、この辺りの最高峰でもあることからか、冬場の人気の高い山だ。最高峰登頂で、この日の山歩きの大半を消化したような気分になる。頂上からの眺め、それは山の中というよりも、住宅街だ。ちょっと下ると、延々と広がる戸建分譲団地の中へ。山歩きの最中には、不似合いな住宅街歩きがしばらく続く。これを通り抜け、先の山塊に取りついて、公園の広場で漸く昼食に。冬の季節にとっては有り難い日当たりの芝生広場でのんびりと一時を過ごす。残すはかまど山一座。しかし、ここからが甘くはなかった。小さなアップダウンの繰返しが延々と何処までもどこまでも。低山の物足りなさをここで一気に取り戻すかのように歩く歩く。そして急登の末に漸くカマド山に到達。その頂からは、真下とも思われる眼下に電車の線路が見えてほっとする。及び腰になり、滑りながらも急降下の果てに山里に。たわわに実を付けた柚子の木

や、蠟梅の花が咲く里を通り抜けて、本日の山行を完歩。正月に蓄えた脂肪が、少しは燃焼したことを期待して。

（池田信一　記）

【多峰主山　山頂】



参　加　者

◎清水順子、松田昭子、藤田喜久子、和田厚子、
荻原章子、川俣秀子、鹿野紀彦、野澤六治、野澤珙子、
神尾ますみ、山本富枝、安才冨美子、吉野喜八郎、
石塚嘉子、今福孝代、榎本千代子、浜田茂子、互　茂子、
島　博子、浅田良一、益田光男、高橋八重子、豊田孝道、
高木幸代、池田信一　　計 25 名

コースタイム

西武･飯能駅－35 分 ―能仁寺―55 分―天覧山―40 分―
―多峰主山―55 分―永田台展望広場―80 分―
―かまど山―45 分―武蔵横手駅

No002

鐘撞堂山

（かねつきどうやま）

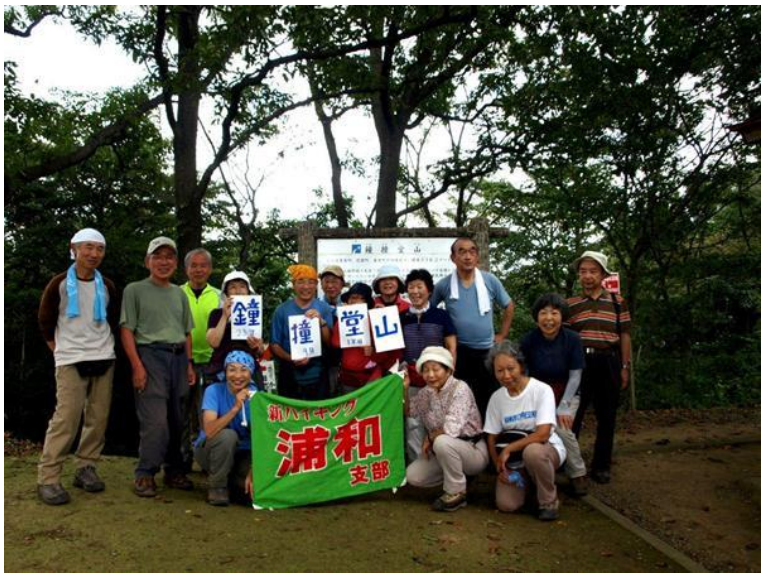
標高
△330.2m
N360804
E1391050

2011,09,18
日帰り
地　図
1/25,000
「寄居」

連日３０度を越す日が続くなか、今日も予報は猛暑日。家ではショートパンツにノースリーブで過ごしているのだが（我が家は田舎にあるので、昼間は自然の風を入れ、クーラーはほとんど使わないので）まさかそれは通らないだろう。

長いパンツに、厚ぼったい靴下、登山靴。背中にザックを背負って出発。近場なので、出発時間もいつもに比べて遅い。今ひとつ気合が入らない感じでいたが、上尾から高崎線に乗って皆さんの顔を見たら、いっぺんに元気が出た。秩父鉄道の桜沢という小さな駅で下車。「トイレは階段登って左ですよ。」と、すかさずリーダーの声。「さすが！」と感動した。

八幡山に向かう。途中の八幡神社は、立派な神楽殿がある落ち着いた佇まいの社だった。山行の安全を祈願して、わきの山道から急に登り始める。八幡山の小さなピークに着くと、潅木の間から寄居の方がわずかに見えた。出発して３０分もしないのに、「ここでちょっと休んで」とのお言葉。「早く着いても開いてないし」？？？　以下、しばしば小休止あり。道はいくつかの小ピークを上り下りして、階段状の登りを詰めると、ついに鐘撞堂山頂へ。大きな東屋があり、ちょっとした広場になっている。幸い他に人がいないので、東屋の下に屋根があるので、いくらかは涼しいだろう。「暑かった！」荷物を下ろすと、みんな背中がびっしょり。風があまりない。南側は寄居の町が広がり、陣見山など外秩父の山々。荒川沿いの鉢形城を守るための見張りの山だったのだそうだ。ここに敵の襲来を知らせる鐘撞堂があった。見張り役がいつも数人詰めていた。大河ドラマにでてくるような華やかな場面ではないが、戦の世の緊張感が伝わってくる。昼食を食べ始めるとまもなく４０名もの団体が上がって来て、たちまちあたり一面占領されてしまった。佐野市の歩こう会。「平均年齢はあちらの方がちょっと高いね」との感想が。とにかく暑いので、食欲が今ひとつ。食べ終わって立ち上がると、座っていたベンチに大きなシミが。「人によって汗をかく所が違うんですよ」と、隣の男性に言われ、恥ずかしかった。「スカイツリーが見える。」と、はしゃいでいる人たちもいる。下る道は沢に沿って続き、簡易歩道となる。ホトトギス、ミズヒキ、ハンショウヅル、ヒガンバナ、ノギクなど、花を見つけ、歓声を上げる。円良田湖（つぶらだこ）の東の端に出る。ヘラ鮒釣りの人たちが色とりどりのパラソルを連ねている。草深い道を登って、羅漢山に。明るい山頂には釈迦像や菩薩



像が。草原と桜の木が茂って展望はないが、のどかな所だ。ここから少林寺までのジグザクの下りの道に沿って五百羅漢像が列に並んでいる。穏やかな表情のものが多いが、一つ一つ皆違って個性的。大笑いしているもの、突っ伏して泣いているものや、プイと空をにらんでいるもの、実に面白い。どんな人が作ったのだろう。麓の少林寺から波久礼駅まで歩く。ここがその日一番のきついコースであった。夏の日の午後2時、全く日陰のない車道を行く30分。とにかく「暑い」の一言に尽きる一日だった。一人ではとても行かれないコースだが、皆でとなると行ってしまう。たいしたものだと思った。

（松田昭子　記）

参　加　者

◎野澤六治　野澤珙子

刈谷恵三　水野律子、大滝　悟

鹿野紀彦、本島　健、広瀬栄子

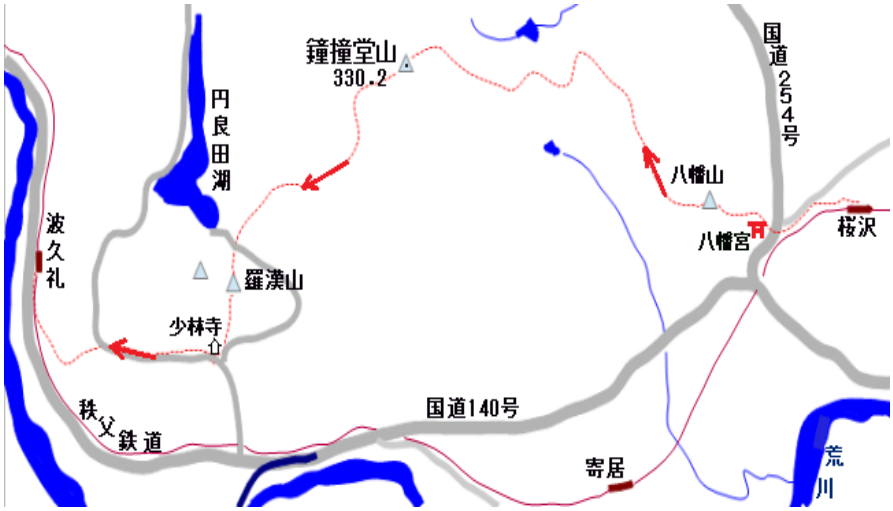
本島由利子、今福孝代

互　茂子、山崎　忠、石田　徹

広川ふじ子、松田昭子、計 15 名

コースタイム

熊谷＝桜沢-45 分－八幡山-80 分-鐘撞堂山-45 分-円良田湖-30 分－羅漢山－25 分－少林寺-45 分-波久礼駅=熊谷



No004

金鑽・御嶽山

（かなさな・みたけやま）

標高
△343.4m
N361043
E1390408

2013,01,20
日帰り
地　図
1/25,000
「藤岡」

御嶽山（御室ヶ嶽）は埼玉県児玉郡神川町にある武蔵二ノ宮・金鑽神社のご神体である。由緒ある金鑽神社は日本武尊が東征の際に創建したと伝えられる。拝殿の奥にある御室ヶ嶽一帯をご神体として祀っているため、本殿がなく、拝殿のみの構造で、こうした古い祭祀形態をとどめている神社は全国でも珍しく、長野県の諏訪大社と奈良県の大神神社との３社だけとも言われている。また、金鑽神社一帯に広がる寺社林は典型的なシラカシ林となっている。

国道４６２から鳥居をくぐって金鑽神社参道へ入り、もう一つの鳥居を少し過ぎた左側に駐車場がありここから歩き始めた。駐車場から金鑽神社の拝殿へ向かう途中にトイレあり、その反対側、高台の上に国重文の多宝塔がある。境内にある多宝塔は国指定重要文化財で、天文３年（１５３４年）に、武蔵七党で名高い安保弾正全隆が子孫の多幸を祈るため建立した。拝殿に向かって左へ進むと、鏡岩方面から登るコースと蓮池方面から登るコースに分かれる。我々は鏡岩方面コースをとる。程なく国指定特別天然記念物鏡岩に到着、鏡岩は断層が生じる際に摩擦によって磨かれ、岩肌が鏡のようになっている。ここでしばしの休憩と各自腕を振るっての記念撮影。

鏡岩からさらに登っていくと展望台と山頂の間の鞍部に出る。山頂は樹木に覆われあまり展望はきかないがそこから少し離れた所に展望台がある。頂上を踏んだ後、展望台へと向かいそこで３６０度の展望を満喫し、大休止といつもの記念撮影を終えた。帰路は鞍部まで戻り、そ

こから蓮池方面の方へのコースをとり元の金鑽神社に到着した。コース中、多少の凍結したところと積雪があったが歩きやすい2時間ほどの山旅でした。

（塩崎孝壽　記）

参　加　者

◎広川ふじ子、大瀧正巳、
青木道子、石黒由美子、
榎原忠雄、荻原章子、
小澤紀行、斉藤悦子、
佐藤　新、塩﨑孝壽、
鹿野紀彦、首藤恒子、
鈴木市子、松田昭子、
森田憲子、和田淳子
神尾ますみ　計17名

コースタイム

金鑽神社－45分－御嶽山
―65分−金鑽神社。

参考資料

金鑽神社

金鑽神社は拝殿のみで、背後にある御室ヶ嶽を御神体として祀る（旧官幣社で本殿が無いのは、ここと奈良県の大神神社、長野県の諏訪大社だけ）。武蔵国二ノ宮（武蔵国一の宮はさいたま市大宮区の氷川神社）。「延喜式」神名帳にも「金佐奈神社」と記された古社で、日本武尊が東国遠征の折に、伊勢神宮で倭姫命より与えられた草薙剣とともに携えてきた火打金を御霊代として御室ヶ嶽山中に奉納、天照皇太神・素戔嗚尊を祀ったのが創始と伝えられる。

No005

官ノ倉山

（かんのくらやま）

標高
344m
N360336
E1391324

2011,11,10
日帰り
地　図
1/25,000
「安戸」

駅を出ると、たわわに実っている柿があちこちに、この時期ならではの光景。国道２５４号を横切ると石彫の六地蔵がある安照寺を横目に、のどかな里山歩きである。日、月、星の天体を祀る三光神社前には、「外秩父七峰縦走」の道標があり、左に歩いて行くと登山口の天王池に着く。不気味な池に鯉が泳いでいて、手をたたくと餌でも欲しいのか寄ってくる。ジグザグの山道を登ると官ノ倉峠に。紅葉の中に一段と美しい黄金色の木に目が奪われ、心が癒される。

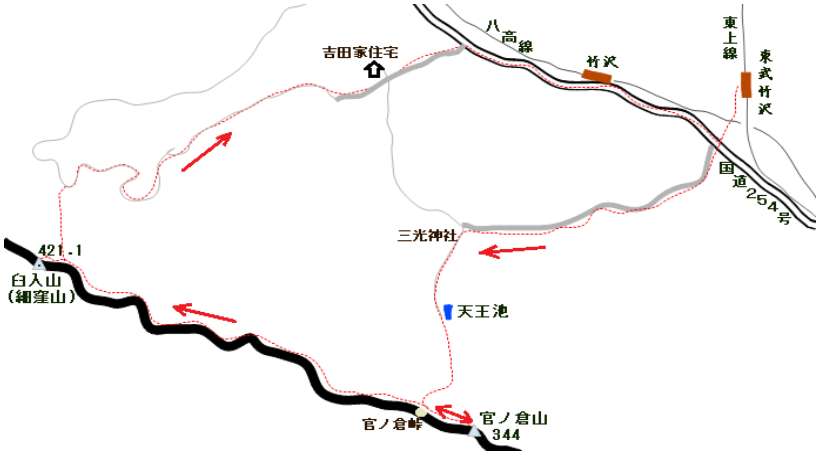
傾斜がきつい露岩の山道を登り切ると官ノ倉山頂である。見晴しも良く笠山、堂平山、大霧山が目の前に。はるか遠くには日光連山、赤城、榛名と期待したが残念ながら展望は良くない。前方に見える石尊山に登り小川町に下る人や、山頂から急坂を下ると安土集落方面に。先ほど登って来た峠に戻り直進すると杉と檜に覆われた山道は踏まれていて歩きやすく、見晴らしがないせいか枝打ちしてある木々が気持よく感じられる。いくつものピークを越え竹林を抜けると、やがて三等三角点のある臼入山に着く。別名「細窪山」とも呼ぶ。目立たないひっそりとした山ではあるが、開けている場所からは、秩父高原牧場，皇鈴山が良く見える。

下山は、来た道をしばらく戻り、白いリボンだけを頼りに左に急降下開始。踏み跡もなく、倒木あり、岩あり、頭上の木々に気をつけながら、枯れた沢沿いを離れず一途に木呂子林道へ下る。長い林道を道なりに歩いていると人家が。

【重要文化財　吉田家住宅】

左折して少し行くと左手高台に国の重要文化財の吉田家が見える。享保６年に建築された入母屋造りで茅葺屋根を持つ江戸時代の典型的な民家で土間には竈や厩もあり子孫の方が管理しているとか。囲炉裏を囲んでお茶の接待をうける。リーダーの細心の気配りとメンバーに恵まれて奥深い山行を楽しんだ秋の一日でした。

（川俣秀子　記）



参　加　者

◎佐藤　新、力丸忠夫、益田光男、
浅田良一、井上武久、川俣秀子
計６名

コースタイム

東武竹沢―35 分―天王池―30 分―
―官ノ倉峠―10 分―官ノ倉山―30 分―
―臼入山―30 分―木呂子林道―40 分―
―吉田家住宅―60 分―東武竹沢

No006

物見山（ものみやま）

標高
△375.4m
N355414
E1391740

2011,10,10
日帰り
地　図
1/25,000
「飯能」

日高市のシンボルである日和田山は、西武池袋線の高麗（こま）駅を下車する。日和田山から物見山への登山は、低山ながら、素晴らしい展望、のどかな里山村落、急峻な岩場などがあり、意外と変化に富む入門登山用のコースとして知られている。駅近くの高麗（こま）神社や巾着田（きんちゃくだ）は、奈良時代、大陸の高句麗の人がこの地に移住し大陸の先進文化をもたらしたものである。本日は総勢７名、高麗駅から９時半頃出発し、ゆっくりペースで北向き地蔵、五条の滝経由で、武蔵横手駅までを６時間くらいの行程で歩く。天気に恵まれ（１０月）、秋らしい里山の風景と木々や花々がとても美しかった。特にいろいろな色のコスモスの花があちらこちらに咲いていた。ルートは、高麗駅を出て右に進み、すぐ右折してガード下をくぐり住宅地を通り抜けて（高麗駅を出て左に進み、踏切を渡っても行ける）、「台」の高札場跡を右折。国道を右折し、鹿台橋を渡り、信号を左折するとしばらく道標に導かれて、日和田山の登山口に着く。すぐの登山道は、左側と右側の２コースあるが（本日は右側の、より整備されたコースを歩く）、両方ともしばらく歩くと同じ鳥居に着く。その先は２コースに分かれ、左側は「男坂」で岩場の急峻な登り、右側は「女坂」で階段が整備されている登山道である。本日はこちらの「女坂」を通って景色の眺めがいい金刀比羅神社へ向かう。金刀比羅神社の台地で少し休憩してから、裏側から回って日和田山の頂上を目指す。日和田山の頂上には、江戸時代に死者の供養のために建てられたという塔がある。ここでも少し休憩してから、西へ下りしばらく歩き、巨大な電波塔の鉄塔がある高指山を目指す。高指山からは車道を少し歩くと、のどかな東屋と茶店が見えてくる。ここでも少し休憩。遠くの稜線が素晴らしい。本当にのどかな風景である。物見山へは、林道から横切って右側の道を登ってしばらく歩くと、木々で見晴らしはさえぎられているが、休憩場所としては手ごろな頂上に１１時半頃着く。ここでたっぷりの昼食休憩時間を取ることにする。物見山山頂には、結構な人数の登山者が休憩していた。午後１時少し前に、北向き地蔵方面に向けて出発。途中、「古瀬名下降点」で分かれ道があり、左側の道を通ると、奥武蔵らしい山里の古瀬名集落の畑の横を通り、近道で五条の滝方面へ行けるルートがある。本日は、そのままっすぐの道を、「北向き地蔵」方面へ向かう。「北向き地蔵」に着いてここで少し休憩。ここから東へゆるやかな道を下ると鎌北湖、ＪＲ八高線毛呂駅や

東武越生線東毛呂駅方面への長いハイキングコースがある。本日は反対の方向から、林道と登山道をからませながら、五条の滝方面を目指す。五条の滝は林道から左にそれて少し下ると見えてくる。たっぷりのマイナスイオンに打たれて、川沿いの道をしばらく歩くと最終目的地の武蔵横手駅に着く。

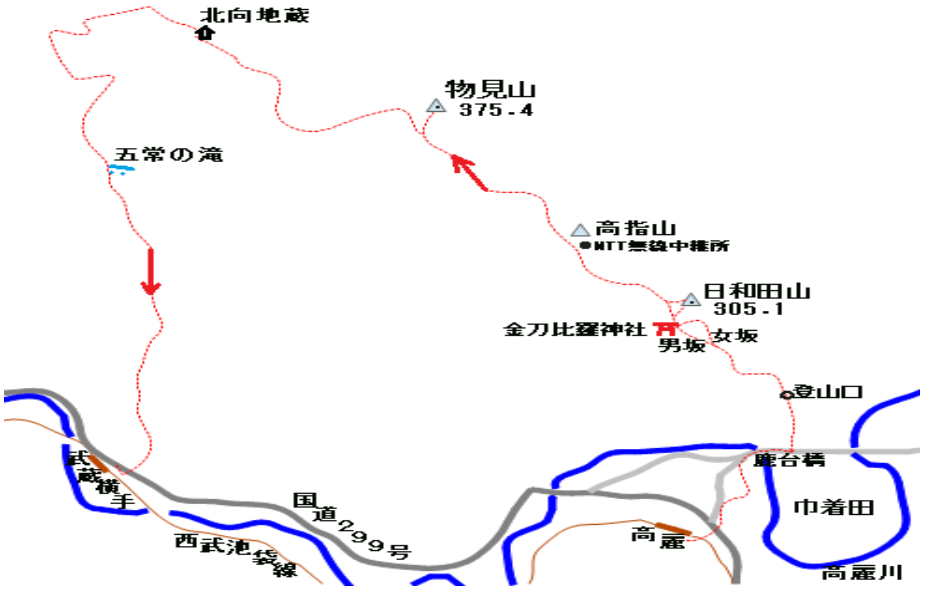
（神山　晃　記）

参　加　者

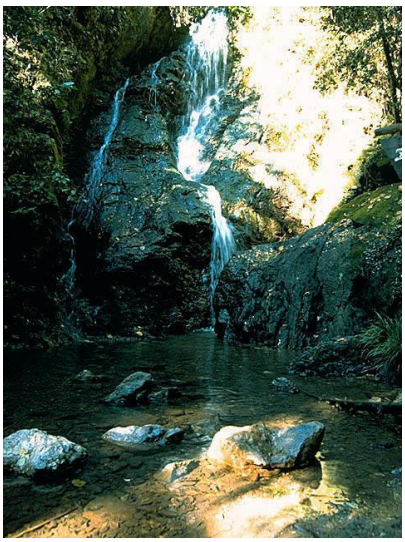
◎神山　晃、水野律子、菅江とき子、
松本文雄、広瀬栄子、
鈴木市子、石田　徹、
計７名

コースタイム

高麗駅―20 分―日和田山登山口―
―金毘羅神社―40 分―日和田山―
―ＮＴＴ中継塔―20 分―物見山北向
き地蔵―40－五常の滝―45 分―
―武蔵横手駅



【五常の滝】



No007

大高取山（おおたかとりやま）

標高
△376.4m
N355728
E1391630

2013,04,25
日帰り
地　図
1/25,000
「越生」

今回は埼玉１００山候補の大高取山登山が目的であったが、登山口近くにある五大尊つつじ公園のつつじの咲く時期を設定し花見と抱き合わせでお花見登山として計画した。

五大尊つつじ公園は越生駅から徒歩で２０分程のところにあり、４月下旬から５月にかけてつつじまつりが開催されている。立派な越生町役場庁舎の前を通り公園に近づくにつれて道路端に祭りののぼりが見えてくる。入園料（自然環境保全協力金）２００円を払って入園する。五大尊境内の樹齢３００年以上といわれるつつじの古木の見事な花を眺めながら階段を登り本堂をお参りしたあと、隣接するつつじ公園に進む。ここは山の斜面に１０数種類、約１０．０００株が植えられているといわれ、色とりどりの花がバランスよく植えてあり十分楽しませてくれる。これなら２００円は安いものだとの声も聞こえる。（もっとも昔は無料だったが。）見事に咲き誇ったつつじを楽しみながら公園の斜面を登り詰めると西高取山へのやや朽ちかけた道標がある登山口にでる。杉林に囲まれた展望もないやや急な道をひたすら登っていくとやがて明るく開けた西高取山山頂に出る。ここは東側が開けていて、関東平野が一望出来、池袋、新宿副都心のビル群、西武ドームや目を凝らして見るとスカイツリーも見える。

大高取山へは一旦下り、登り斜面にかかると木イチゴの花が一面に咲いていて実りの時期に再度来てみたいと思う程である。桂木観音方面や今回の下りコース幕岩方面の分岐がある大きく開けた大高取分岐に出るとここから山頂は間もない。

山頂には大高取山三角点の標識と三等三角点があるだけで展望も良くないので記念写真を撮っただけで分岐に戻りここで昼食。下り始めて間もなく幕岩展望台に到着。ここには展望台からの鳥瞰図があり西高取山と同様に関東平野が一望できる。暫し展望を楽しんだあと、近くなのでだいこうじ跡展望台へ足を延ばしてみたが、伐採されていない立ち木が何本かあり、幕岩の展望台の方が良かった。幕岩から来た道を虚空蔵尊方面の道標がある分岐まで戻り、林道と思われるような広い山道を下り、更に沢沿いの道を進むと林道に合流、桜の時期が過ぎた虚空蔵尊さくら公園に出ると、虚空蔵尊は直ぐ右手に見えてくる。

虚空蔵尊の本堂へは長い階段を登って行かなければならず、疲れた体に結構こたえる。

本堂の周辺も数は少ないが色々なつつじが植えてあり、ここもいずれ入場料を取るのかなと冗談もでる程で、なかなかのものであった。虚空蔵尊から越生駅まではのどかな田園風景の道をのんびりと

歩き無事到着した。

参　考

幕岩展望台の直ぐ下に虚空蔵尊方面の下りコースがあるが、橋が崩落しており通行不可になっているので注意。なお、その先に同様の下りコースがあるので問題はない。

（Ｈ２５．４．２５現在）

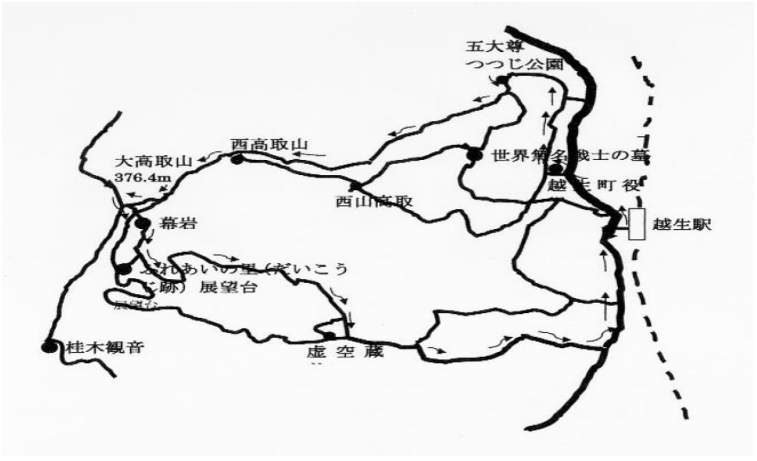
（力丸忠夫　記）

参　加　者

◎力丸忠夫、阿部晴美、豊田孝道、高橋八重子、
鈴木市子、桶川和子、榎原忠雄、今福孝代、西片　昇、
早川正雄、刈谷恵三、道江伸江、小澤紀行
計 13 名

コースタイム

越生駅―15 分―五大尊（つつじ公園を見ながら登山開始）
―60 分―西高取山―30 分―大高取分岐―10 分―山頂―
―5 分―大高取分岐―10 分―幕岩―10 分―
―だいこうじ跡展望台―35 分―虚空蔵尊―
―45 分―越生駅



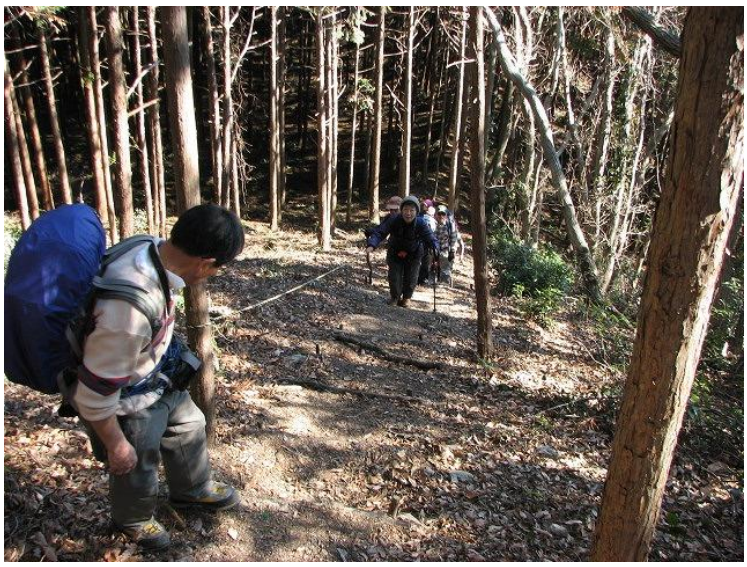
No008

雷電山

（らいでんやま）

標高
△418.2m
N360101
E1391500

2013,02,10
日帰り
地　図
1/25,000
「武蔵小川」

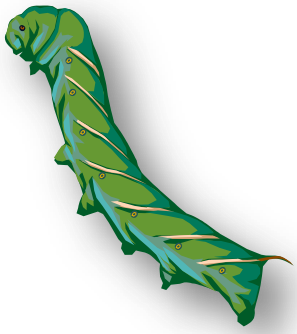


八高線小川駅に降り立つと、冷たい風が吹いた。前日と打って変って、風もなく抜けるような青空。右手に官ノ倉山がくっきり。本日のコース入口、日影でバスを降り、なだらかなハイキングコースへ。心地よい天気のせいか頻りと軽快な楽しいダジャレが飛び交い足取りも軽やか。途中オオイヌノフグリの可愛い花を愛で、朴の落ち葉が皆裏返しになっているのを不思議がりながら雷電山を目指す。

雷電山と堂山（２５０ｍ）へ登る分岐点から雷電山への道はやや急こう配。リーダーの「平坦なコースです」という事前説明がありましたが「平坦じゃないヨー」とささやかな一言も。たどり着いた雷電山山頂からの眺望は木々に囲まれ悪い。木立に囲まれた小さな祠が鎮座している。異なる標高掲示に？　分岐点に降り、陽当たりの良い場所にて昼食。堂山を経て帰路の下り道を歩いている途中、どなたかが繭玉を見つけたのをきっかけに、明

日（２月１１日（月））から始まる恒例の浦和支部第１３回「文化展」の展示物に華を添えようと皆で童心に返り躍起となって繭玉探す。川俣リーダーの指導のもと、春の入口の爽やかなハイキングを楽しむことができた。

（松本文男　記）



参　加　者

◎川俣秀子、浅田良一、小澤紀行、
藤田喜久子、荻原章子、本島　健、
本島由利子、鈴木市子、山崎　忠、
野沢六治、今福孝代、鹿野紀彦、
松本文男、水野律子　　計 14 名

コースタイム

大宮＝川越＝小川＝日陰－15 分－日陰集
落上-30 分－雷電山－
40 分－堂山－30 分－
-せせらぎバスセンター＝
＝武蔵嵐山＝川越＝大宮

【山繭】

No009

弓立山（ゆみたてやま）

標高
△426.9m
N355942
E1391517

2011,03,03
日帰り
地　図
1/25,000
「越生」

弓立山と云う山名は、源頼朝が四方かためのの矢を放ったのがその由来だと、都幾川町の広報誌に書かれているが、それと意識しなければ、どこにでもある、ゆるやかな山容を見せる里山のひとつだ。

春。梅のかおりを期待して、終着を越生の梅林と定めて、都幾川町の第二庁舎バス停から歩きはじめる。この年の春の歩みは遅いが、杉の花粉は盛んに舞いあがり、見るだけでくしゃみが出そう、と、参加の会員から声が上がる。県道を、目指す山を見ながら進み「桃の木バス停」から、角に立つお地蔵さまと賑やかな道標に従って里道へと左折する。田畑のふちには初々しい蕗の薹が顔をのぞかせている。八幡神社前のY字路を右にとり、やがて幼稚園の広々した園舎があらわれる。この園庭のフェンス沿いが登山口だ。

（ちなみに、私事で恐縮だが、孫の一人がここに通園しており、弓立山は園の裏山！なので、時折りのお散歩コースだとのこと。それも園の方針で裸足に草履で登るのだそうな…。）ちょっと荒れ気味の暗い木立の中を右に小尾根にとりつく。

息がはずみだす頃、目の前に大岩が現れる。男鹿岩だ。東斜面が開かれ都幾川の町並が眼下にひろがり、ワイワイ言いながら交替で岩の上に立つと、高くなりつつある東京スカイツリーも遠望できた。

そこからひと息で山頂だ。木立にかこまれて山頂からの展望はない。少し開けた登山道脇で車座になり、ゆっくりとお弁当を楽しむ。頂上直下はパラグライダーの基地になっており、何機かが、のどかな春の田園の上を飛翔していた。

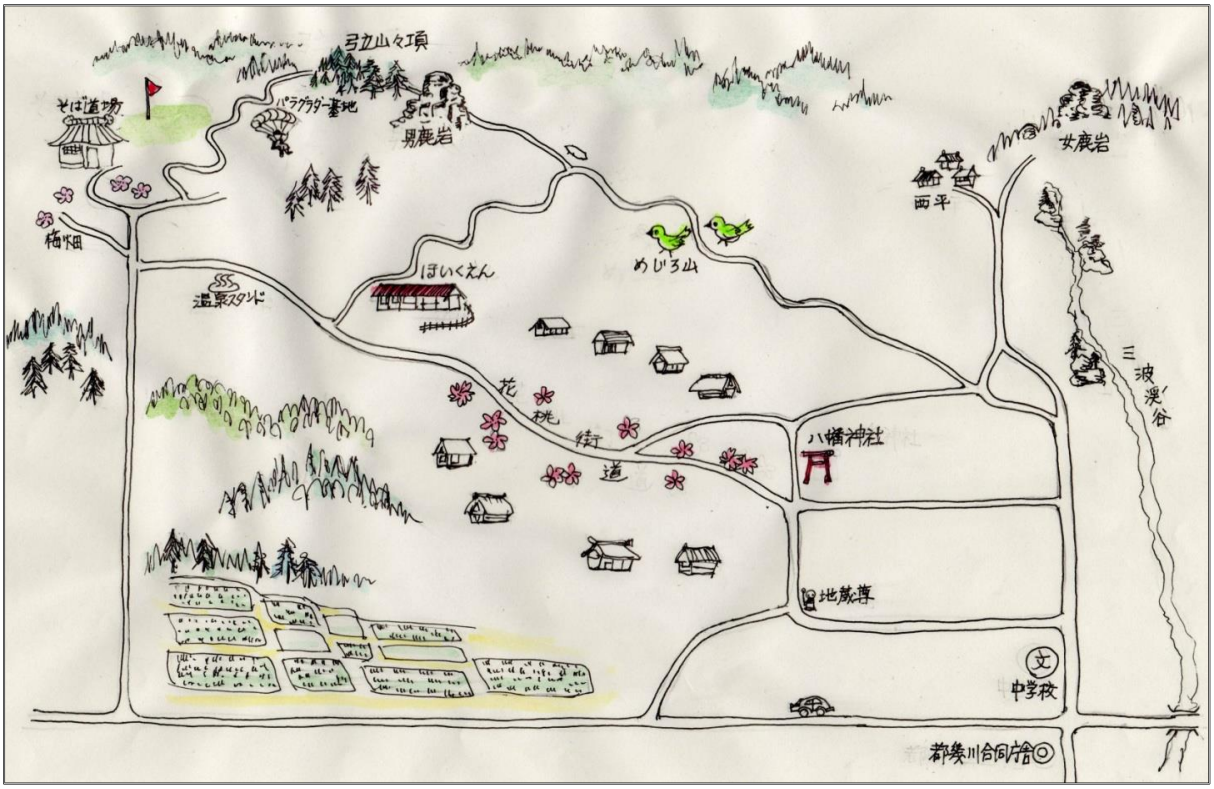
下山は越生へ向かっての穏やかな山里の道を行く。農家の庭先には蝋梅が香り、みのった柚がたくさん実を落としている。福寿草やたんぽぽの黄色、ホトケノザ、ムラサキハナナの紫、まさに、山里は春。道端の観音像を左手にみて、「越生梅林」の道標に沿った小道を行くと竹林の中の八幡神社につく。境内の木陰で一休み。木々の間には黒アゲハが何頭も舞っていた。少し遠くの坂下に、大附そば道場が見えてくる。もちろん、寄り道歓迎ハイキングなので、みなでお邪魔する。蕎麦打ち体験まではむりなことだが、おみやげ購入体験？は、しっかりとこなす。

やがて道は緩やかに越生の里へ入る。道端の野仏にカメラを向けたり、ほころびだした紅梅をめでたりしながら、梅林近くの「梅園小バス停」から帰路についた。ほのぼのとした早春散策に心満たされた一日だった。

「後日の情報」

今年２０１３年の５月５日のニュースで、この弓岳山で山火事があったと知りびっくり。東斜面で昼頃から火災が発生し翌日に鎮火。７日には西斜面で再出火したが、大事には至らなかったとのこと。弓立山に親しんだ身としてはホッとしたことだった。

（互　茂子　記）



参　加　者

◎互　茂子、川俣秀子、佐藤　新、早川正雄、浅田良一、近藤武利
池田信一、荻原章子、鈴木市子清水順子、安才冨美子　計 11 名

コースタイム

南浦和＝越生（バス）＝都幾川役場第二庁舎―20 分―幼稚園登山―
―30 分―男鹿岩―20 分―弓立山山頂―120 分―越生梅林―
―10 分―梅園小バス停＝越生

No011
No013

（かまど山～天覚山～大高山）

天覚山～大高山

（てんかくさん～おおたかやま）

天覚山
△445.5m
N355312
E1391457
2013,05,12
日帰り
1/25,000
「飯能」

大高山
493m
N355354
E1391359
1/25,000
「原市場」

天覚山から武甲山までを六回に分けて歩く企画の第二回目。初回はかまど山経由で武蔵横手駅へ下りているため、今回は武蔵横手駅からスタート。いよいよ三月、歩き始めてすぐ路傍にフキノトウを発見。皆の歩みが暫し止まる。そして体が登山モードに入る前に、かまど山までの急登が始まり、気温が低いにも拘わらず汗が噴き出す。かまど山以後は平坦かと思いきや、アップダウンが連続。冬枯れの中、気を引く植物などは無く、鬱蒼とした針葉樹林が続くため、かなり地味なコースだ。唯一変化をもたらしてくれるのは、次々と現れるアップダウンであり、これに興味が集中する。道標はほとんどなく、分岐ごとに神経を使う。東峠から沢沿いの道になって少しばかり気分転換となったが、直ぐに急登続きに。急坂を登り切って漸く天覚山頂上に立つ。

広くはない山頂のベンチで一休み。山々の間に霞がかかり、奥行を際立たせた奥多摩の展望を楽しむ。天覚山からひと下りすると、雑木林も混じり、景観が変わる。しかしアップダウンは果てることはない。やっとの思いで到達した今回の最高峰の大高山山頂は、木々に遮られて眺望はいまいち。ここからは漸く下りのみとの期待が膨らむ。しかしその後もアップダウンからは解放されず、遂にロングコースのあいだじゅう、アップダウンに悩まされることに。山中では会う人も殆ど居らず標識の無い分岐が幾つかあり、迷いやすいコースとの印象を抱く。しかし、常に磁石を胸に、地図読みを得意とするリーダー、この迷コースを難なくリードする。吾野駅にゴールし、苦行のアップダウンから解放されて、漸くホッとする。

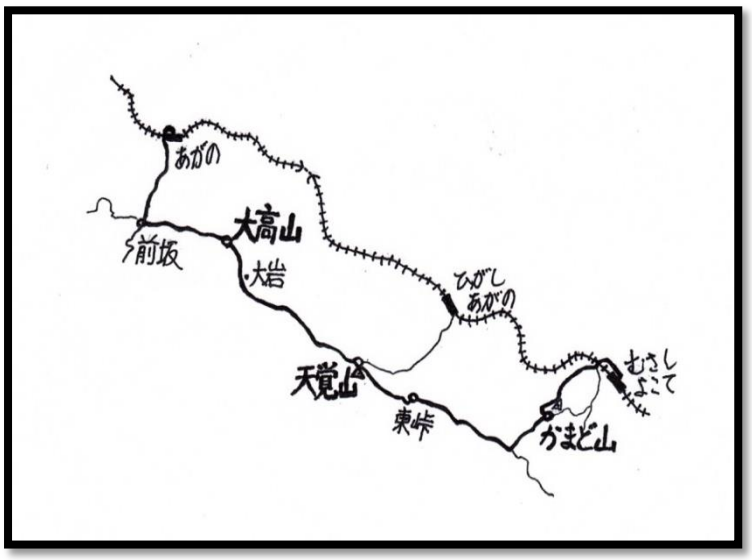
この日の山行は、標高差のわりにロングコースで且つアップダウンが多いため、ハードなコースとの印象が残った。天覚山へは平成二十二年年二月十四日に本部合同山行で登っており、その時は、これとは異なる体験であったため、その時の記録を以下に引用する。

『久々の好天、しかし集合地の東吾野は前夜の降雪でうっすらと雪化粧。本部合同山行であり、本部・支部参加者それぞれ20名の計40名の大所帯。里山歩きにもかかわらず天覚山に向けては急登。長蛇の列が渋滞ぎみにゆっくりと登る。向かいの山に整然と植えられた杉や檜が、雪を冠って陽光に輝き、目を楽しませてくれる。天覚山から先は尾根歩きかと思いきや急降下。滑りやすいうえに、樹上の雪が解けて、本降りの雨のように落ちてくる。しかし、青空ゆえに気分は爽快。水滴を避けるため、唯一頭上が木に覆われていない鉄塔脇のわずかな敷地で、ゆ

つくりと昼食。その後、一旦林道まで下り、登り返してカマド山に。樹上の雪も解け終わり、フィトンチットを浴びてリフレッシュしながら武蔵横手駅に無事到着。久々のひだまり山行を堪能した。』

（池田信一　記）

【大高山山頂】



参　加　者

◎清水順子、松田昭子、倉重裕一、小澤紀行、小澤三枝子、荻原章子、高橋八重子、豊田孝道、本島　健、本島由利子、鹿野紀彦、浅田良一、野澤珙子、池田信一、互　茂子　高木幸代、安才冨美子、吉野喜八郎、石塚嘉子、今福孝代、榎本千代子、和田厚子、島　博子　　計 23 名

コースタイム

武蔵横手―50 分―かまど山―110 分―天覚山―
―70 分―大岩―25 分―大高山―50 分―
―前坂―50 分―吾野駅

No012
No003

大築山～雨乞山

（おおづくやま～あまごいやま）

大築山
466m
N355828
E1391350
2013,12,08
日帰り
1/25,000
「正丸峠」

雨乞山
△340.3m
N355852
E1391526
1/25,000
「越生」

大築山は、越生町と都幾川町の境界上にそびえる静かな山で、地元ではオオツキ山と読まれ、別名（城山）とも呼び、ロマンを秘めた歴史と伝説の山であります。

ＪＲ越生駅から、黒山行きのバスで２０分、麦原バス停で下車、バス通りを渡り麦原集落へ向かう、人も車も通りの少ない舗装された道を歩く、あじさい山公園手前に、住吉神社が現れると、大築山登山口である、暫く舗装道路を歩いた足に、良く踏まれた登山道はやさしく感じる。この辺りは、檜の樹林がどこまでも続く、三叉路を右に行くと左側の木に、大築山への案内板が取りつけてあり、そこのヤブっぽい急坂な尾根を登り、左へ緩やかに登れば大築山山頂だ、東西に長い平場で、展望は雑木に遮られ、少し下がった展望台からが良い。山頂には山名板も三角点もないが、伝説の山らしく、掲示板に次のように書かれてある。「この城跡は標高４６６ｍあり、周囲の斜面には郭や、それを結ぶ通路があり、防備のための空掘りなどが残っており、中世

【大築山直下の急坂を登る】

の山城としては県でも、有数の規模と遺構を誇るものである。大築城は、小田原北条氏の家臣、松山城主上田朝直が、山一七五坊を有し関東屈指の寺院、慈光寺を攻略するに際し、築上したものと思われ、北方５ｋｍに望む慈光寺を、焼き討ちしたものと考えられる」「平成六年三月、都幾川村教育委員会」、とある。展望を楽しんで下山にかかる、今きたヤブっぽい急坂の尾根を見て、緩やかに小築山へ向かう、鞍部から少し登り返せば、樹林に囲まれた小築山へ着いた、展望はないが、丸太を組んだベンチがあり、休憩をとるのによい。「大楠へ至る」の案内板に従い、解放的で気持ちの良いアップダウンを歩

【埼玉県内一位の大楠】

く。地形図にある３３２ｍ地点の分岐を越え、石仏群を見て送電線を過ぎると六万部塚だ。塚上には六万部供養塔の石碑があり、「平安時代十万部の経典を携えて、東国を行脚中の高僧が、この地に塚を築いて六万部のお経を納めた。残りの四万部は、秩父の栃谷の里に納め、これが四万部寺になった」との由来が刻まれている。そこは展望が良くじっくり三座同定が楽しめる。下りは「山入り・大楠」を目指し緩やかな下り坂となる、下りきった所が山入りで、大楠へは２～３分だ。日本有数の巨木、山入りの大楠は幹回り１５ｍ余、廻りを柵で保護されている。来た道を降りて雨乞山へ向かう、静かな山入りの集落から大附へと延びる舗装された道路を歩く。やがて右手に雨乞山が現れ近道しようと、わずかに踏み跡と思える登山道らしき箇所があり、意を決し入る。のっけから急な登りだ。雑木やヤブを掴みながら進む。相変わらず山道は不鮮明だが、更に高度を上げるとパット山頂が開け勇躍登頂する。小広い山頂は雑木に覆われて展望はいまいちだ。中央に四等三角点の石標が頭を出している。山の名から、その昔村人は、日照りが続く時、雨を降らせるため山頂で火を燃やし、笛・太鼓を鳴らして神意を慰め雨を乞う神仏へ祈りの儀式が、行われていたものと考えられる。下りは道標通りに、しっかり踏まれた巾広い道を降りれば、そこが登山口で、山入集落からくる舗装道路に出た。大附の三叉路を右に折れ、奥武蔵ゴルフ場を左に見て歩けば、越生梅林入口バス停は近い。

（本島　健　記）

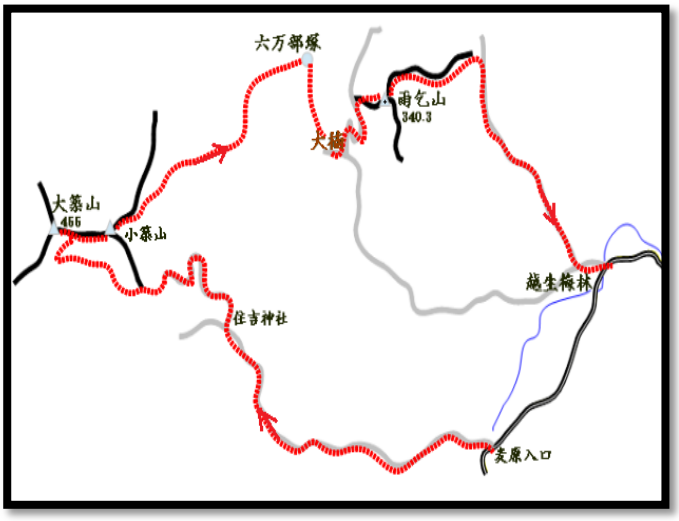
【雨乞山　山頂】

参加者

◎本島　健、山崎　忠、豊田孝道、高橋八重子、今福孝代、長島静江、安才冨美子、和田厚子、斎藤悦子、池田信一　　計10名

コースタイム

越生＝(バス)=麦原入口−110分−−大築山−20分−小築山−35分−−石仏−20分−60分−六万部塚−−40分−大楠−30分−雨乞山−−60分−梅林入口＝（バス）=越生



No014

宝登山（ほどさん）

標高
△497.1m
N360535
E1390530

2009,12,17
日帰り
地　図
1/25,000
「鬼石」

長瀞の石畳（国指定天然記念物）の西に隣接する山です。関東のテレビで、ロウバイの花がいち早く放映されることでも知られている。

麓の宝登山神社は、秩父神社、三峰神社とならび秩父三社と称され、火災盗難除けとして信仰されている。

山名は、日本武尊が登頂した時に猛火に襲われ、これを従者の巨犬が消し止め、宝登は火止（ほと）であることからついたとされている。秩父鉄道野上駅をスタートし、長瀞アルプスの別称がある峰をたどり、宝登山を経て長瀞駅にゴールするコースを歩きました。

野上駅の宮沢賢治歌碑の前で体操をしていると晴れてきました。道標に従い、万福寺の手前を曲がって山道に入っていきます。５０㍍程爪先上りの道を登り、尾根の上に出るとなだらかになりホットしました。風もなく、落ち葉の雑木に日が射している。道標「天狗山分岐」を左に進み、御岳山（３５３㍍）を通り２・５万図に３４２㍍の標高点のある天狗山に着く。木造の社と社務所があり、地元の人々の信仰が厚いようです。樹木の間から宝登山が見える。

先ほどの分岐まで戻る。南西の方向に平坦な道を進むと、左に氷池への下山路を分け、野上峠に着いて休憩する。

可愛らしい名の小鳥峠を過ぎて林道に出る。右に進むと「毒きのこ注意」「熊出没」などの看板のある賑やかな登り口になる。等高線１５本を、木段などで一気に登る。桜が咲き、三角点のある、落ち葉の頂上でのんびりしました。今日の仲間は、おにぎり派が多く、パンは少数派でした。やはり、山は展望より、花より、昼食が一番です。奥の院、咲き始めたロウバイを見て、レストランの横から下山しました。ジグザグの林道をショートカットする登山道になると、森の造成中で一部分かりにくかった。

長瀞で石畳を見学し、お土産を購入し、小学生の遠足のような楽しい一日を過ごしました。

（佐藤　新記）

【宮沢賢治の歌碑】

盆地にも今日は別れの本野上

駅にひかれるとうきびの穂よ

『長瀞の石畳』

幅数十m、長さ５００mの日本でも有数の岩石段丘です。薄くはがれやすい面（片理面）にそってはがれて、平らな畳のように見えることから名づけられました。ここの岩石は、砂・泥・火山灰などが地中深くで数千から1万気圧のものすごい圧力と２００℃～３００℃の温度でつくりだされた変成岩で、「黒色片岩」という名称です。荒川の対岸には高さ５０mにおよぶ崖が見えます。これは中国の揚子江にある赤壁にちなんで「秩父赤壁」とよばれています。

岩畳の上にドリルであけたような大小の丸い穴がみつかります。「おう穴」「ポットホール」などとよばれています。岩畳を浸食した昔の荒川が、くぼみにはまった小石を回転させて削ったもので、自然の不思議を感じます。

《埼玉県立自然の博物館》が北長瀞駅の近くにあります。見学料金２００円で駐車代とおもえば安いものです。岩石だけでなく、武甲山の石灰岩地域に自生する希少植物なども展示されています。

＊参考「埼玉の自然をたずねて」
堀口万吉監修　築地書館

『宝登山』

宝登山という山名は、頂上に祀られている宝登山神社からきている。

日本武尊が東征の折に、この山に登ろうとすると猛火に遭遇し行く手を阻まれる。その時に大犬が現れて道案内をし、火を消し止め無事に登ることができた。そこで「火止山」から宝登山になったという説がある。山頂の奥の院は火災除、盗難除、諸難除の守護神として参拝される。宝の山に登るという縁起のよさから登山者が多い。宝登山には沢山の蠟梅の木が植えられており、関東地方のテレビニュースで、毎春きまって蠟梅の咲き始めが放映されている。

参　加　者

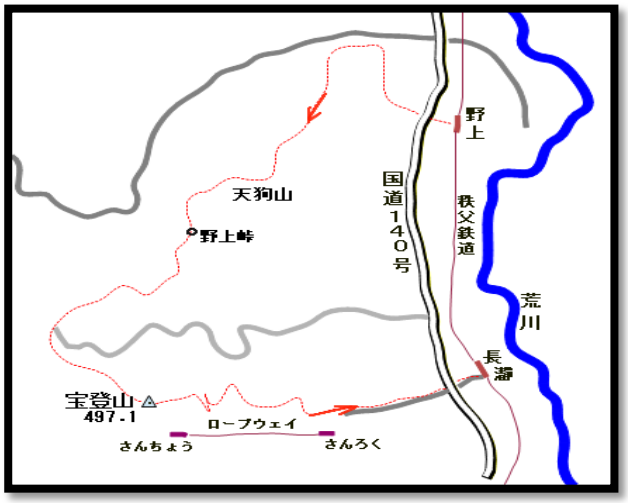
◎力丸忠夫、清水順子、互　茂子、榎本千代子、黒田尚信、川俣秀子、池田信一、倉重裕一、浜田茂子、森田憲子、早川正雄、佐藤　新

計 12 名

コースタイム

秩父鉄道野上駅―45 分－天狗山分岐――20 分－天狗山―30 分－分岐―20 分―野上峠－25 分―林道登り口－30 分―宝登山－40 分―参道－20 分―

―秩父鉄道長瀞駅



【宝登山の蠟梅】

No015

大仁田山（おおにたやま）

標高
△505.7m
N355052
E1391259

2012,04,12
日帰り
地　図
1/25,000
「原市場」

桜は満開、前日の雨も上がり絶好の山行日和となる。飯能駅より名栗行きのバスに乗車、「自由の森学園」に通学する学生さんで途中まで満員となる。「自由の森学園」は自然の中で新しい教育を行っている学校とのこと。唐竹橋バス停で下車、唐竹の空地で軽くストレッチをして車道を進む、住宅の角に大仁田山登山口の標識が出ている。この標識に導かれて、小さな流れの沢にそった杉林の中の登山道を登る。五年前に登った時、地図に四十八曲とあったのでつづら折りの急坂が続くものと思い、ひたすら気を引きしめて登ったが、そんな難所もなく、やや平坦な尾根道に出たのでホットしたことが想い出された。杉木立の中の峠道の両側に杉丸太の椅子が並べてある。右手に急な木の階段が見える。愛宕山登山口の案内板が有ったがそのまま進む。細田集落の見える四十八峠の地蔵堂に着く。このお地蔵さんは寛政五年三月造立（１７９３年）の銘が有る江戸時代の石佛で堂宇は平成二十年に改築され「いぼとり地蔵」として信仰されている様だ。みんなで掃除して山行の安全を祈り休憩。

堂脇の山道を進み墓所前の分岐を左手に下ると展望の良い公園の様な野原に出る。リーダーより私有地なので静かに進むよう注意される。傾斜面の家庭菜園の様な畑はタイルや電気柵に防護されて居り、畑の方に聞くとこの辺は猪や鹿ではなくハクビシンによる被害に困っているとのこと、またスカイツリーを眺めることが出来る場所だそうだ。最後の登りをさらに進むと南東に視界の開けた大仁田山の山頂に到着、三角点の隣に新しい石柱が建っている。「平成ニ四年三月吉日南高麗町づくり委員会建立、北緯三五度五０分五二秒、東経一三九度一二分五三秒」と位置まで表記されている。南高麗村は昭和八年三月飯能市に合併

された村とのこと、地域の町づくり運動の人達に建立されたことを知った。昼食休憩の後に下山、赤布のつく登山道をひたすら下る。やがて大きな岩を眺めれば上赤沢の橋の所に着く。この前の時はこの橋が工事中だったことを想い出す。上赤沢のバス停で乗車、車窓より桜を眺めながら楽しかった山行を話し合いながらくつろぐ中に飯能駅に無事到着し解散。

（刈谷恵三　記）

参　加　者

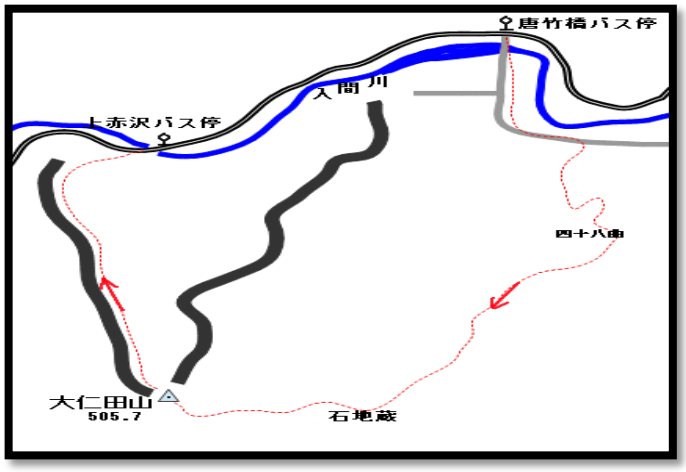
◎佐藤　新、浅田良一、
刈谷恵三、広瀬栄子、互　茂子、
倉重裕一、島　博子、早川正雄、
神尾ますみ、池田信一、
加藤憲司　　計 11 名

コースタイム

唐竹バス停―４０分―登山口―
―４５分―石地蔵―１０分―
―大仁田山―３５分―
―上赤沢バス停

（細田の　いぼとり地蔵）

寛政五年（一七九三）に土地の念仏講によって作られたとのこと。



No016
No030

金岳～粟野山

（かねたけ～あわのやま）

金岳
511m
N360336
E1390116
2013,03,20
日帰り

粟野山
△675.3m
N360358
E1390045
地図
1/25,000
「皆野」

旧・吉田町（現・秩父市吉田地区）は最後の百姓一揆と言われる「秩父事件」の中心となった地域で、関連する史跡が多く残されている。特に、金岳、粟野山がある阿熊地区、石間地区では、ほとんどの家が事件にかかわり、秩父困民党の幹部を多く輩出している。今回は、まさにその舞台を巡ることになるので、秩父事件の予備知識があると、一層、感慨深い山行となるであろう。登山の適期は秋から春の間で、夏は不向きである。

金岳は地域の象徴となっている山で、５つの岩峰の総称である。江戸時代中期に編纂された「新編武蔵風土記稿」にも金嶽山と記され、古くから神事が行われていた。金岳は当て字で、本来は神岳と記すのが正しいと推察される。

粟野山は地形図に名が記されていないものの、山中の粟野集落で秩父事件の一斉蜂起が決定された「粟野山会議」が行われた地として有名である。

今回は、阿熊地区の室久保集落から粟野集落への峠道を行き、途中の尾根をたどり金岳と粟野山を往復した。登山口付近の路肩に駐車できない事も無いが、なるべく阿熊川沿いの観光駐車場を利用したい。そこにはトイレも整備されている。

【金岳の稜線】

当コースの峠道は道標が整備されているが、少々荒れ気味。また、峠道から金岳、粟野山への登路は、地形が複雑で、道標も登山道もないので、地図読みの熟練、またはＧＰＳの携帯が必要である。岩場も多く、初心者のみでは危険である。

登山口は室久保集落にあるが、道標があるので安心である。最初のうちは民家の庭先や畑の中をたどる。やがて竹林を抜け、植林の中を金岳と粟野山の鞍部（第１の峠）を目指して登る。峠には粟野（廃村）と室久保の方向を示す道標がある。

ここから尾根筋をたどり、金岳を往復する。踏み跡らしきものはあるが、道はないと思ったほうが良い。尾根を南に行くと、すぐに直立する岸壁に突き当たる。この岸壁上が最高峰の五峰（５５１ｍ）であるが、ここからは登れないので左側から巻く。すると土の尾根にたどり着くので、これを登り五峰に登頂する。

五峰を下るとほどなく、四峰の岩壁に突き当たる。クライマーなら登れないことは無いが、岩が脆いので、無理をしないで左から巻いたほうが無難である。ただし、巻くルートもよくない。やや下った後、四峰と三峰の鞍部をめがけて登るが、スラブ状の岩を通過しなければならない。鞍部から四峰に登ることができる。

三峰の手前には大ピナクルがあり、

【粟野山の山頂】

これを右（粟野側）に少しへつると、かつて神事が行なわれていた大洞穴を望むテラスがある。三峰はピナクルの左側の基部を巻いた後、岩稜を直登する。岩に慣れていないと、てこずるかも知れない。

三峰はすっきりした鋭い岩峰で金岳の山頂とされており、大展望が得られる。５１１ｍの標高点がある二峰より、かなり高い。ちなみに一峰は室久保から望むと二峰の肩のように見え、ピークと言う感じはしない。今日は二峰と一峰は割愛し、往路を峠道まで戻る。峠道に戻り粟野側に進むと、いったん谷に下りた後、粟野集落を望む第２の峠にたどり着く。ここから北側に尾根を忠実にたどれば粟野山だ。この尾根は概ね自然林で構成され、好ましい雰囲気だが、すでに伐採事業が始まっていた。粟野山（６７５・３ｍ）の登りは最後が急登になっており、ひと頑張り必要である。山頂は植林に囲まれ、展望は無い。三角点と小さな山名板がある。

下りは金岳との鞍部（第１の峠）を目指す。尾根を忠実に降れば、迷う心配は無いが、途中にある岩場は左から巻く。鞍部からは往路を室久保に戻る。

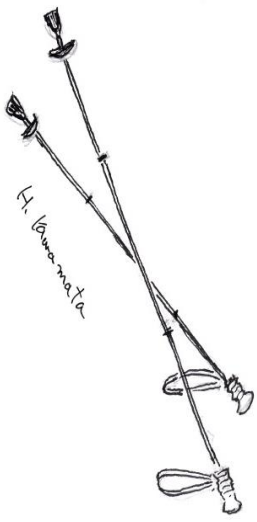
（高田　良一　記）

参　加　者

◎高田良一小澤紀行、
黒田拓司、杉原三千代、
高田良一、西片　昇、
萩原　昇、広川ふじ子、
箕輪ゆり子　　計８名

コースタイム

大宮＝室久保―30 分―
―第１の峠―90 分―
―金岳(三峰)―60 分―
―第２の峠―60 分―粟野山
――60 分―室久保＝大宮



No017
No018

陣見山～不動山

（じんみやま～ふどうやま）

陣見山
△531m
N360844
E1390812
2013,03,17
日帰り
地　図
1/25,000
「寄居」

不動山
△549.2m
N360816
E1390544
地図
1/25,000
「鬼石」

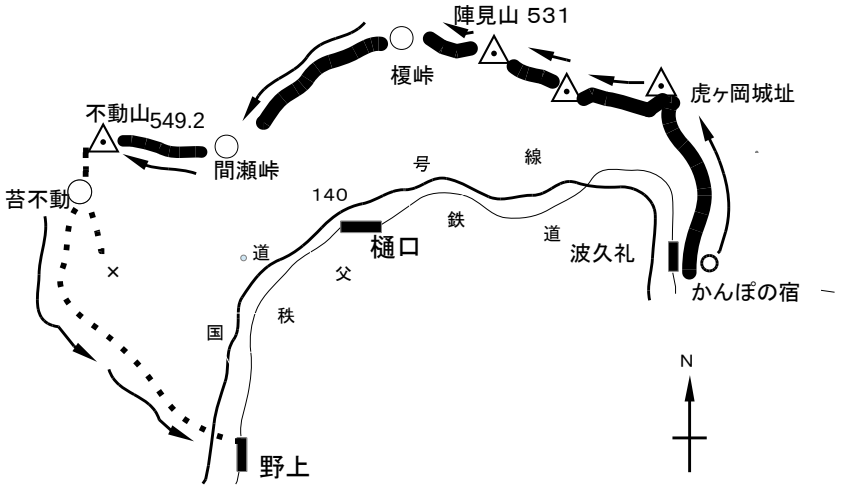
師走の二十四日、「かんぽの宿寄居」に駐車の許可を得て駐車場から出発。すぐ下の登山口から建物の裏手をほんの少し歩き、まっすぐ行くと円良田湖ですが、左折して陣見山方面に向かいます。すると左側がコナラ、右側が桜と杉の樹林帯の中になり、左下から国道１４０号線を通る車の音が聞こえてきました。落ち葉を踏みしめての緩やかな登りは脚全体に心地よさを感じました。アップダウンを３～４回繰り返し、長い急な階段を登り詰めると虎ノ岡城跡で、展望はあまりありませんが広い広場に立派な東屋が建っており休憩に最適な場所でした。３月下旬にはこの手前のコルから円良田湖方面へ５分下るとカタクリの群生を見ることができ、大きな花びらに驚きます。虎ヶ岡城址から左の階段を下りると快適な尾根を歩きが続きました。そのあと、急坂を少し注意して下ると大槻峠で、ここには馬頭観音様が祀ってあって、右下３０ｍに車道が見えました。大槻峠からは岩のゴツゴツした道を１０分ほど登ると３６８・４ｍ地点で陶器でできた珍しい三角点を見ることができました。この三角点は周囲をコンクリートで囲んであって、上部中心に丸い陶器を埋め込んで、「三角点・国土地理院」と刻んでありました。ここからの登りは今日一番の急登で冬なのに大汗をかきました。

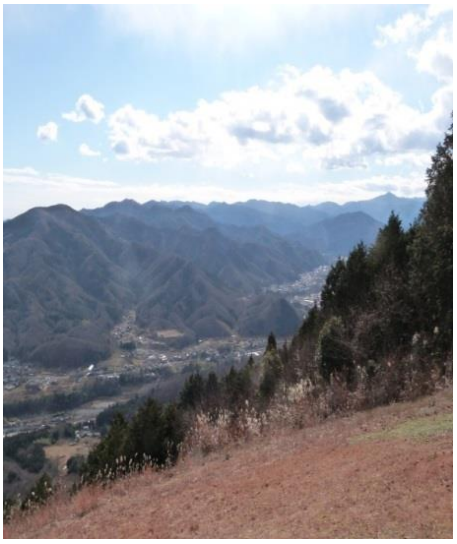
陣見山には二等三角点があり、テレビ埼玉の中継局になっていますが、全く展望がありません。昼食の後、ここから、西へ向かい岩谷洞を経て児玉町への道を右に見てしばらく行くと榎峠に着きました。ここは４差路になっていて、西側の一番左を行くと樋口駅方面で、真ん中の車道を進み、２０ｍ先から左折して、長い水平道を進むと急に周りが明るくなって雨乞山に着きました。

雨乞山はパラグライダーの発進場になっており、今日一番の展望地で、南面が大きく開けていて、長瀞の街並みや荒川、その向こうに奥多摩の山々が見えました。ここからほんの少し西に進み青色などの布の目印を見て右折し、登山道に入り、やや下ると間瀬峠でした。車道を横切り急登すると不動山に着きました。頂上は展望がありません。少し先の南面がよく

見える平坦地で昼食。青空でしたが木枯らしが吹いて粉雪が舞う寒い食事でした。ここから少し歩くと車道に出ました。苔不動へは車道から分かれて左に入ります。苔不動まではトラロープが張ってあり、苔不動から先はあまり歩かれていない登山道を下りました。赤テープの目印が谷の左側にもついていますが途中で行き止まりになりました。ちょっと戻って、右側のヤブ道を強引に下りました。登山者の歩いた気配はほとんどないが赤テープを頼りに、ヤブをかき分け小枝をバリバリ踏んで下りました。すると、すこし登山道らしくなり、長瀞射撃場の金網のフェンスを右にしながら歩くようになりました。やがて大黒天が祀ってある場所に出ました。ここからは明瞭な登山道となり、車道に出て野上駅着きました。秩父鉄道で波久礼駅まで戻り「かんぽの宿寄居」の駐車場へ無事到着しました。

（益田光男　記）





参　加　者

◎益田光男、箕輪ゆり子、萩原　昇

計 3 名

コースタイム

かんぽの宿登山口―50 分―
―虎ヶ丘城址―20 分―大槻峠―
―10 分―368.4m 三角点―30 分―
―陣見山―35 分―榎峠―50 分―
―雨乞山―10 分―間瀬峠―25 分――
不動山―55 分―秩父鉄道野上駅

No019
No010

楢抜山～ノボット

（ならぬきやま～のぼっと）

楢抜山
△553.5m
N355215
E1391149

ノボット
△435.8m
N355229
E1391316

2012,10,14
日帰り
地図
1/25,000
「原市場」

楢抜山・周助山（ノボット）は、名栗川の北側に位置する奥武蔵の山稜で、名郷近辺の名の知られた山と違い、山のガイドブックや、山岳地図などにも記載されていない。展望も花も期待できない地味な山で、訪れるハイカーも少ない。しかし標高５００ｍ前後の地味な低山でも、ヤブの雰囲気があり、大・小のコブが４０余りある、また踏み跡が薄く、非常に迷いやすい手ごわい山だが、それなりに魅かれる要素を持つ山であります。飯能駅から名郷行きバスで３０分、赤沢バス停で下車、電話ボックスのある角を北へ入り、右に折れ、突き当りの民家の手前の細い道を生け垣に沿って入ると、赤い鳥居のある素盞嗚神社に着く。本殿の左脇を行くと再び鳥居が現れ、奥に秋葉神社とあるその脇を下り鞍部を登り返すと尾根道へ出る。かつて東京電力の職員が送電線の管理に出入りしていたが、例の福島原発事故から、入山が中止されていることのようで、予想以上に荒れている。踏み跡は薄く、木の枝は散乱、しかも道標らしきものも全くない。わずかに残る赤テープと、上空の送電線が頼りになり、コンパスとにらめっこを余儀なくされる山歩きです。そろそろここら辺りからアップダウンを繰り返すことになる。この山特有の荒砂状のコブは厄介なことで、ズルズルとこけて前へ進まない、そのうちのピークらしい所が加久良山といわれるが、尾根上の小突起に過ぎない。更にいくつかのコブを越えると、石灰岩の積み重なった岩峰が現れる。慎重に登りクリア、そこからの急登を一気に登りきると、楢抜山山頂へ出るが、残念ながら樹林に囲まれ展望はない。

中央部に三等三角点の石標が置かれてある。立木に「楢抜山」と書かれた小さな板が結ばれている。楢抜山からは、岩石交りの急下降となり、雑木を掴みながら慎重に降りる。分岐に出てホッとするが、ここは間違いやすい所で、赤テープに目がくらみそうになるが、仁田山峠方面を確認のこと。亀裂の入った大岩を見て、滑りやすい急坂を慎重に降りると、仁田山峠の林道へ出る。林道を約２０ｍ進んだ所を左折、登山道は二分したりしているので、コンパスで確認する。　標高差にして約１５０ｍ登った地点に４７号鉄塔があるここも展望はない。さすがにこの辺りは特産である「西山杉」の植林帯。どこを向いても杉・杉・杉・だ。鉄塔からはそのままピークを進む、「鉄塔４８号に至る」の案内を東からまわるが、幾度越えても現れるコブには難儀しなが

ら歩くところだ。パット開けると仁田山峠からきた林道へ降りる。林道を少し下ったところのカーブミラーに小さく、≪周助山≫と書かれた矢印があるが、よく入口を確認しなとわからない。そこをドーンと下りたところは平坦で歩きやすい檜の植林帯だ。やがて緩やかな登りを登りきると、周助山山頂へ出る。まだ新しい立派な看板に、周助山（ノボット）と太く書かれてある。そこも檜の樹林に囲まれて薄暗く展望はない。三等三角点がポツンと頭を出している。下りは赤抗に沿って南南東へ緩やかに降りて鞍部へ鞍部から原市場をめざす。次のコブを左に巻いて薄い踏み跡の尾根を行く。この辺も迷うところだ。

東南東方向にある薄い踏み跡をたどり、急坂をジグザグに降りれば墓地の横に出て、天神峠から来る道路に出る。原市場中学校校庭に沿って広い道路へ出て、右へ曲がると原市場中学校前バス停だ。

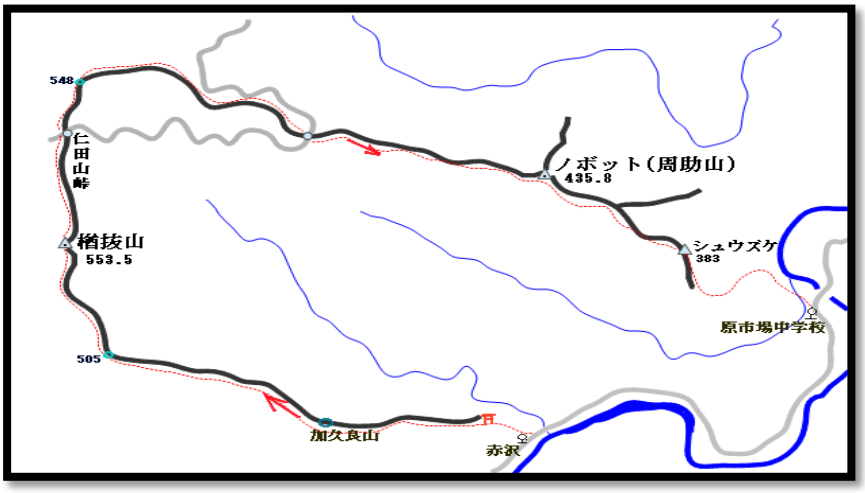
（本島　健　記）

参　加　者

◎本島　健、山崎　忠、益田光男
鹿野紀彦、榎原忠雄、石田　徹、
石井正夫、熊谷裕子
計　8名

コースタイム

飯能駅＝30分＝赤沢－15分－神社－30分－
-加久良山－30分－505mのコブ－40分－
-楢抜山－45分－分岐-25分－仁田山峠－
-30分-47鉄塔-50分-周助山[ノボット]-
—70分-原市場中学校バス停＝40分＝飯能駅



No020

釜ノ沢五峰（かまのさわごほう）

標高
565m
N355925
E1390006

2013,11,02
日帰り
地　図
1/25,000
「秩父・三峰」

西武秩父駅からタクシーで長若山荘まで向かい、案内板に従い沢沿いに登山道に入りました。朽ちかけた木橋を２本一人ずつ慎重に渡り、谷から離れジグザグに杉林の中を登ると大きな岩を越えるあたりから尾根になり、まもなく一ノ峰に着きました。北側に展望がありました。私の腕時計は４３５ｍを示していていました。ここで最初の記念撮影。一ノ峰からまっすぐ進むと二ノ峰ですが途中、右にトラバースすると四ノ峰へ直行できます。この頂上からは南の展望がよく正面に兎岩、遠くに熊倉山が望めました。二ノ峰からの下りは１０ｍほどのクサリ場で慎重に時間をかけて降りる。ここから登り返すと三ノ峰でした。三ノ峰も展望がいい。この山頂の先は切れ落ちた崖になっているので少し戻って先に進む。ロープが張られた下りで三ノ峰直下を巻くように登山道がつけられていた。この先の下りは再び１０ｍほどのクサリ場だった。紅葉には少し早かったが岩場のこのあたりは少し楽しむことができました。再び登り返すと四ノ峰でした。頂上からの展望はない。四ノ峰を過ぎ、「金精神社・文殊峠」の表示に従ってこれを進む。五ノ峯はなぜか一ノ峰から四ノ峰のような峰の文字を使っていない。五の峯から少し行くと展望地で両神山、小鹿野二子山や西上州の山々が望めました。５６５ｍのピークと思われる地点で左に進路を変えて進むと安雲幹線鉄塔（３０３号）に出る。さらに進むと布沢峠に着きました。ここを左に下ると林道に出て長若山荘に戻ることができますが、ここは直進して文殊峠方面に行く。このあたり、展望はありませんがが歩きやすい気持ちのいい登山道でした。途中、右上に大きなモミの巨木が現れる。Ｓさんが巨木の根元まで登り記念写真を撮ったが巨木に比べ体が小さく見え、身長の何十倍もある木の大きさにびっくりである。ほどなく中の沢分岐でさらに５分で金精神社に着く。文殊峠の天体観測所のあるところか

らの展望は格別で秩父、西上州の山々をほぼ３６０度見渡すことができました。近くに屋根つきの休憩所があり昼食。

帰りは中ノ沢分岐まで戻り竜神山へ向かいました。竜神山には金属の鋲がはめ込まれた四等三角点がありました。ゴツゴツした岩の登山道を慎重に登り下りして鉄塔の先で賽の洞窟を過ぎ、さらに行くと登山道の両サイドがクサリで守られた大きな兎岩の上に出ました。ここから武甲山が近くに見ることができるはずが霧のため見えず残念でした。兎岩からジグザグに下ると林道に出て左に２０分歩

くと長若山荘に無事到着。

この登山道は長若山荘のご主人が整備されたもので「この登山コースは私設です・・・・・」と立て看板がありました。登山者はマナーを遵守して永く利用させていただきたいものだと思いました。

（益田光男　記）

《参考資料》

金精神社

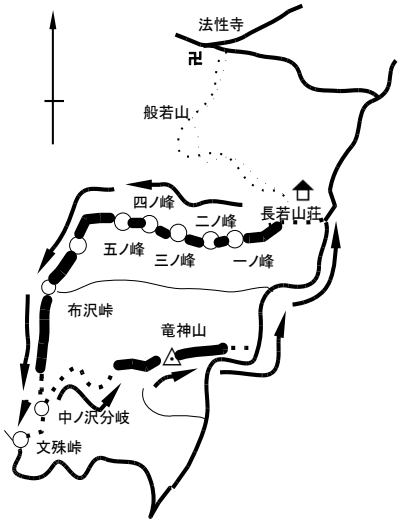
奥日光の金精峠にある金精神社の分室で、お祭りは毎年１０月第３日曜日か第４日曜日に秩父大神社のお神楽が奉納されるなど盛大に行われます。

天体観測所

４基の天体望遠鏡が設置されており、スターウォチングするには長若山荘に予約することが必要です。

法性寺

長若山荘から登山道をほんの少し歩き右折すると１時間３０分で般若山法性寺に行き着くことができます。秩父３２番札所で通称お船観音と呼ばれています。



参　加　者

小林善行・浅田良一・黒田拓司
清水　博・杉原三千代・互茂子
小澤紀行・益田光男　　８名

コースタイム

長若山荘―25 分―一ノ峰―10 分―二ノ峰―10 分―三ノ峰―15 分―四ノ峰―10 分―五ノ峯―25 分―モミの巨木―5 分―中ノ沢分岐―5 分－金精神社（文殊峠）―5 分―中ノ沢分岐――10 分―竜神山―15 分―賽の洞窟―15 分―兎岩―20 分―林道―20 分―長若山荘

No021

越上山（おがみやま）

標高
△566.5m
N355531
E1391516

2012,02,16
日帰り
地　図
1/25,000
「越生」

吾野駅から顔振峠・越上山・ユガテ坂・東吾野駅へと歩きます。このコースは、飯能市と越生町を分ける稜線上に位置し、歴史を尋ね、眺望を楽しむ山で多くのハイカーが訪れる。他に、今は周囲がすっかり観光化されていてマイカー族も多く見かける。西武線吾野駅舎脇の石段から歩く、古民家の連なる街道は昔を偲ばせてくれる。この辺りは、ホタルの生息地で、《ホタルの里》の案内板が目につく。その清流に沿って歩くと、反対側の小高い畑には、梅の古木がふぞろいに並んでいる。奥手には桜の古木が陣取り、開花期にはそれらの風情が味わえそうだ。暫く車道歩きとなりますが、やがて顔振峠の案内板が現れ、そこを右に折れると、登山道入口とあり、緩やかな上りに入る。この一帯は特産の杉・桧の植林帯が続き、下草はきれいに刈り払われ、枝打ちされた杉・桧の樹林は天へ伸びている。山道も石交りになると、低山だが結構なコブが次から次へと現れるので、休憩・水分補給をまめにとって頂きたいところです。明るい日向の集落が見えて、展望の良い所に出ると、そこには地蔵堂があり、その先には、魔利支天のお堂が建っている。笑楽門と言われる門の両側に「宝即是色」「自然人生」と書かれてありますが凡人には意味不詳である。やがて岩の露出した急坂を一気に登りきると顔振峠へ出ます。顔振峠は、鎌倉時代弁慶以下義経主徒が、奥州へ落ちる途中、立ち寄った際に、その絶景に何度も顔を振返りしことが、その名の由来だそうです。正面には武甲山・蕎麦山・三頭山が見えます。茶屋の横から杉の根が張った山道を、５分程登ると小広い展望台があり、ここから赤城山・榛名山などの上州の山が見えます。さて、この辺で昼食をとるのもどうかしら。春でしたら茶屋へ予約して、揚げたてのフキノトウのてんぷらとか、味噌おでんに舌つづみを打つことができます。しっかり腹ごしらえをして越上山へ向かうとしょう。峠から杉林を巻くように歩くと、秋の大祭には獅子舞が奉納さる諏訪神社へ出る、木の根の張った道を暫く行くと右手に、「ここからスカイツリーが見えます」の立看板が現れます。今は富士山よりも、スカイツリーの方が展望スポットになるのですねェー。やがて、ごつごつした岩っぽい道を登ると、本日の最高点越上山（５６６ｍ）へ。越上山は「拝み山」・「御神山」が転じて付いたといわれ、樹林に遮られて展望はなく、三角点がポツンと頭を出しています。帰路は十二曲り・エビガ坂と心地よい　アップダウンを繰り返し、更にひと越えしますと、待ち遠しかったユガテの

集落へ出ます。そこには、のどかな山村風景が広がっています。地名のルーツは漢字で「湯ヶ天」と書き、その昔、湯が天まで吹き上がる程、豊富に出たことから名づけたものと言われています。傍らには季節の地元産物を並べた無人売り場がありますから、土産を買い込むのも良いでしょう。昔を偲ぶ古道で、「飛脚道」の案内板を見て、杉・桧のイオンをいっぱい吸いながら、下山道口にある「福徳寺」(武蔵野三十三観音堂の三十番目にあたる、重要文化財に指定されているお寺)へ歩きます。虎秀川沿いを下り、高麗川の橋を渡れば東吾野駅もうすぐです。

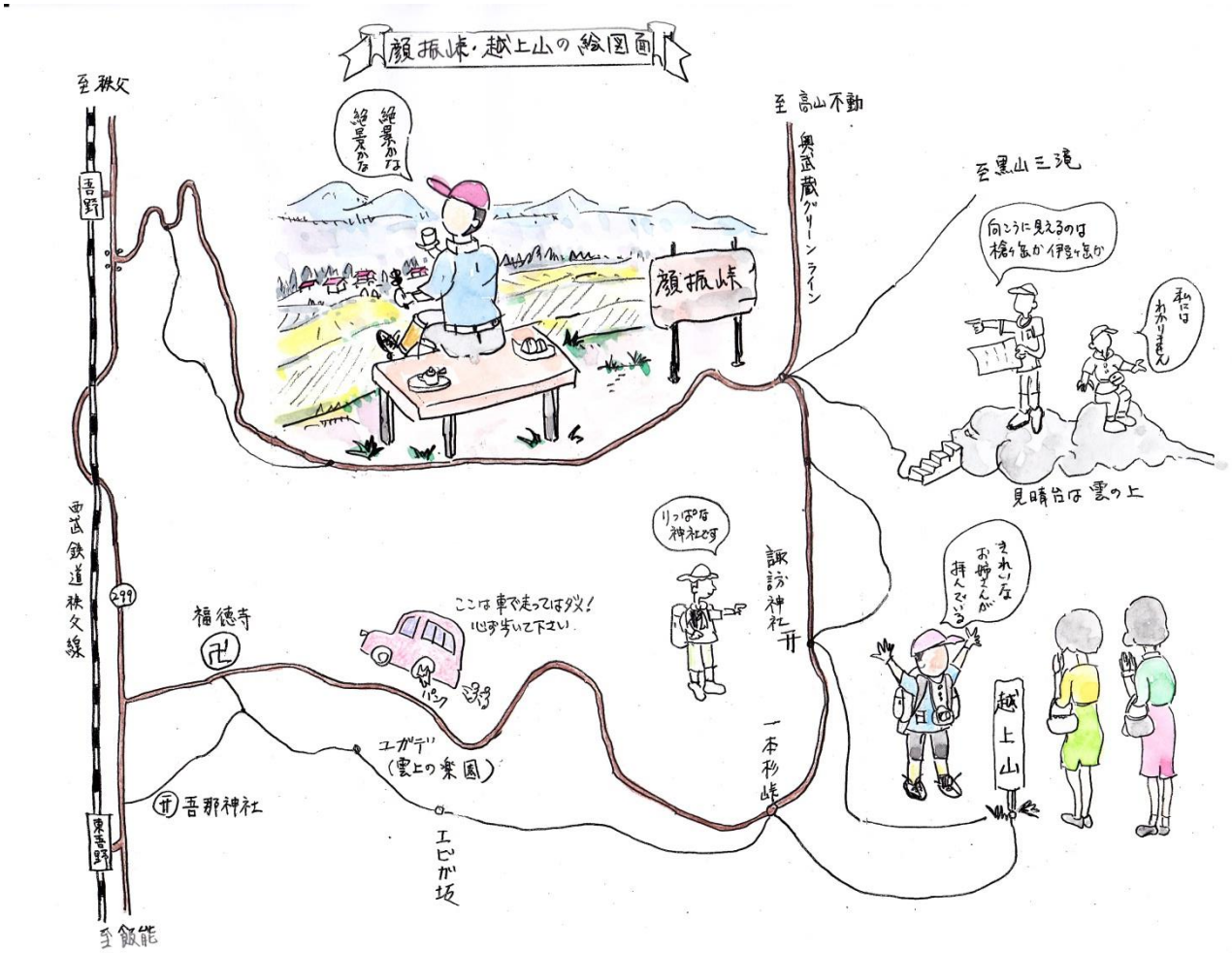
(本島　由利子　記)

参　加　者

◎倉重裕一、本島　健、本島由利子
和田厚子、小沢紀行、互　茂子、
安才冨美子、藤田喜久子、広瀬栄子、
高橋八重子、豊田孝道、早川正雄
力丸忠夫、菅江とき子、榎本千代子
池田信一、森田憲子　　計17　名

コースタイム

西武吾野駅―50分－地蔵堂―20分－
―顔振峠―10分－見晴台―10分－
-峠の茶屋―20分―諏訪神社－10分-
－越上山一20分―本杉峠－20分―
-十二曲り－30分-エビガ坂－10分―
ユガテ－50分―東吾野駅



No022

釜伏山（かまふせやま）

標高
582m
N360533
E1390837

2011,06,19
日帰り
地　図
1/25,000
「寄居」

寄居町と皆野町の町境にある。外秩父七峰縦走ハイキングコース最後の登谷山の隣に位置する。

秩父鉄道の波久礼駅を出発し、日本水（やまとみず）取水場を通り頂上に登り、寄居駅まで歩くコースを選んだ。

会報「こもれび」にIさんの次のような山行報告が掲載されている。

前日の雨で足元が滑りやすくなっていることを考慮し、登る山は釜伏山にしぼり、ルートも舗装道路歩きを多くする旨、波久礼駅出発時にリーダーから発表される。時折薄日が射す程度の曇り空で暑さに悩まされることなく爽やか気分でハイキング。鳥の囀りに双眼鏡を覗き、飛び交う蝶にカメラを構え、路傍の花々を愛で奥入瀬渓谷を思わせるような清らかな流れに見惚れながらのんびりと歩む。名水百選の日本水取水場では、車で汲みに来ている方々に混じって名水に舌鼓を打つ。目的地の釜伏山のアタックだけは、濡れたゴロゴロ岩の急登となり、山行であることを充分に認識させられた。

釜伏峠の東屋で昼食を済ませた後は外秩父七峰縦走ハイキングのルートを辿る。

触れるだけで落ちてしまうほどに甘く黄色に熟しきったキイチゴが次々と現れ歩みが滞ることしばしば。久々の初夏のハイキングに充分満足して寄居駅にゴールした。

（佐藤　新記）

※コラム　秩父の名水

・日本水は、日本武尊が東征の折に喉の渇きを覚えて剣を抜いて大岩に突きさしたところ清水が湧きだした。あまりの冷たさに、たった一杯しか飲めなかったので一杯水ともいう。昭和六十年に環境庁（今は省）が選定した名水百選である。源泉は頂上に近い百畳敷岩だが、崖崩れ

の危険があり現在は立入禁止になっている。

【釜伏山は平成２０年６月に環境省が新たに「平成の名水百選」を制定した。その中に秩父の二ケ所が入っている。重複しないので名水ニ百選ともいえる。

毘沙門水（小鹿野町藤倉地内）と武甲山伏流水（秩父市の秩父神社周辺など）で、山の帰りに寄ってみたいものだ。】

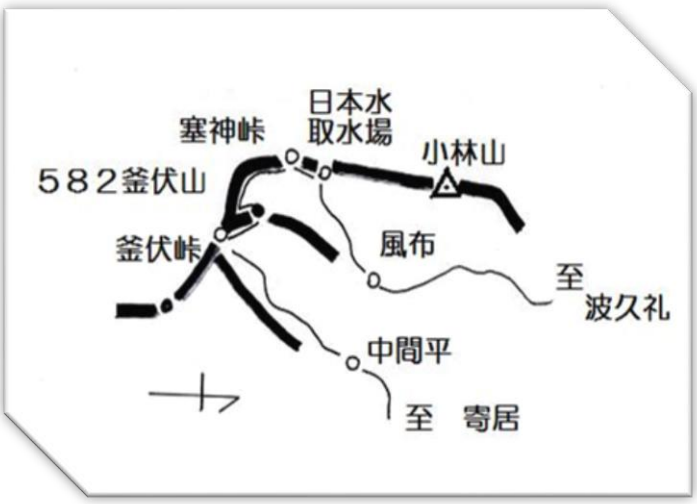
※コラム　蛇紋岩について

釜伏山は蛇紋岩からできている。周囲の岩石に比べて硬い岩石なので浸食されずに残されて、釜を伏せたような山容である。緑の地に曲線の模様があって、蛇の皮の紋様を連想させるので名前がついた。装飾として利用されるが、似せてつくった人工石材が建築物の床や壁によく使われている。

火山の深い場所でできて、超塩基性岩と呼ばれる珍しい種類の岩石である。また超苦鉄質という鉄やマグネシウムの多い成分からできているために植生にも強い影響を与える岩石でもある。

北海道の夕張岳と北上山地の早池峰山が蛇紋岩の山として有名だ。特有の地形と固有の高山植物があって、名山として多くの人に登られている。

上長瀞駅の近くにある県立の「自然の博物館」には、蛇紋岩が展示されていて固有な植物についての説明があります。釜伏山は低い山ですが、岩石と山容そして植生と、他の山とは違った個性を秘めた山で、隠れ名山といったところでしょうか。



参　加　者

◎佐藤　新、広瀬栄子、川俣秀子、刈谷恵三、榎原忠雄、野沢六治、野沢珙子、菅江とき子、髙橋八重子、豊田孝道、吉野喜八郎、水野律子、本島健、本島由利子、佐藤初子、池田信一　　計 16 名

コースタイム

秩父鉄道波久礼駅－120 分－
－日本水取水場－70 分―釜伏山頂－
－30 分－釜伏峠－120 分－鉢形城公園
－40 分－東武寄居駅

No023

簑山

（みのやま）

標高
△586.9m
N360328
E1390646

2013,05,19
日帰り

地　図
1/25,000
「皆野」

簑山はたくさんの花が咲くことから「美の山」という名でも知られており、長瀞町、皆野町、秩父市にまたがる標高５８６．９ｍの独立峰です。

今回はヤマツツジの花を見ようと５月中旬、参加者９名の山行でした。和銅黒谷駅前の国道１４０号線を左に５分行くと和銅遺跡への大きな看板を見ることができます。ここを右折して緩い登りの車道を歩くと二つ目の標識から和銅遺跡を見に行くことにしました。左に行くと簑山への山道です。ここを右折して和銅遺跡を見学。

奈良時代、この地に自然銅が採掘され朝廷に献上した。これを祝って元号を和銅元年（７０８年）と改元したと説明がありました。この和銅は純度が非常に高く精錬を要しなかったとのこと。その後「和同開珎」が鋳造された。戦国時代にはこのあたりからの銅の産出が盛んに行われ、日本全国に送り出されたとのことで、秩父に多大な財力をもたらしたとのことです。車道まで戻って、直進し、山道に入りました。ここには「山頂まで１．３Ｋｍ」と書いた標識がありました。車道を一つ横切り、二つ目の車道を左に行くと絶好の展望地でしたが、今日は霞がかかっており左に武甲山が確認できただけだった。４月の単独行では中央に秩父の山々、右に両神山などが遠望でき絶景でした。ここから１００ｍ先を右折して舗装された車道を登りましたがすぐ砂利道になり、もう少し行くと右折して山道となりました。Ｕ字型にえぐられた道でしたが広く歩きやすい。ジグザグに竹や中木の中を登って行く。枯葉が丁度いい具合に積もっていて急登ですが楽な歩きでした。最後は丸太で仕切られた階段を登り詰め、山頂に着きました。

簑山山頂は数組のハイカーがベンチなどで休憩したり、食事をしたりして楽しんでいました。ここは国民休養地に指定された埼玉県で管理している県立美の山公園とのことです。展望台からは３６０度の展望で、寄居方面は近くの陣見山、釜伏山、登谷山、皇鈴山などが確認できましたが、秩父方面の山々は霞んでいて多くを見ることができませんでした。３５００株あるといわれているヤマツツジは、早く咲いてしまったようで多くを見ることができませんでした。ベンチでゆっくり昼食。

帰りは親鼻駅へ向かって下りました。ツツジ園地は満開が過ぎたツツジのトンネルをくぐることになり、ちょっと残念でした。

（益田光男　記）

簑山に咲く花

3月　ホトケノザ、ダンコウバイ、キブシ、マンサク、マメザクラ

4月　コブシ、モクレン、キジムシロ、タチツボ、モミジイチゴ、ベニシダレザクラ、ミツバツツジ、ヒトリシズカ、エイザンスミレ、フデリンドウ、シバザクラ、シャガ

5月　バイカウツギ、アマドコロ、ホタルカズラ

6月　ノアザミ、ホタルブクロ、シモツケソウ、ウツボグサ

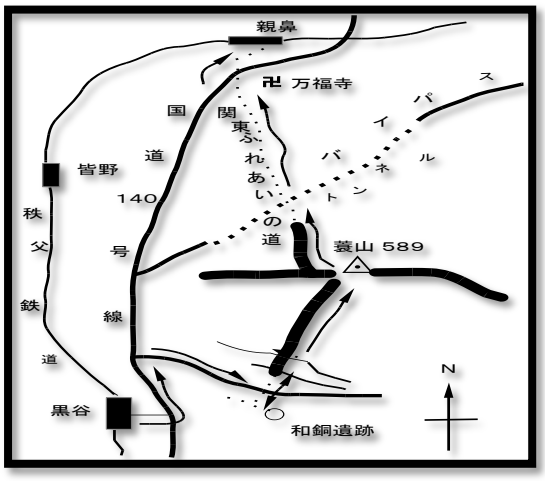
7月　キキョウ、ヤマユリ、ナツズイセン

8月　ウバユリ、キツネノカミソリ、ツリガネニンジン

9月　マンジュシャゲ

2月　ロウバイ

（「美の山公園四季の花々」を参考）



参　加　者

益田光男、西片　昇、水野律子、
川俣秀子、大槻千代子、
松岡茂夫、小林善行、大村登美子、
榎本千代子　　計９名

コースタイム

秩父鉄道・和銅黒谷駅―２０分―
―和銅遺跡――70 分―簑　山―
―75 分―秩父鉄道親鼻駅

No024

横隈山（よこがいさん）

標高
△593.6m
N360800
E1390337
2013,03,07
日帰り
地　図
1/25,000
「鬼石」

横隈山（よこがいさん）とは、なかなか読めないものです。本庄市児玉と神川町を分けるところにある山で、埼玉県の最北にありすぐ隣は群馬県になります。

登山口までの交通機関の便は良くなくマイカー利用が便利になりますが今回は駅から徒歩で山頂を目指しました。

野上の駅前には清潔なトイレがあり登山者には大変助かります。そしてこの駅前広場には宮沢賢治の立派な碑が建てられ、賢治がこの地を訪れた足跡を記してあります。駅からはしばらく車道を歩き、途中萬福寺で長瀞アルプスへの道を分けなおも車道をゆきます。やがて、長瀞高原ビレッジの跡地辺りから山道に入り出牛峠（じゅうしとうげ）に着きます。

この峠は、明治のころ秩父困民党が東京に攻め上がるときに越えた峠でその後の戦いで敗れ生き残った農民たちが再び秩父に戻るときにも通った歴史のある峠道です。今は完全舗装の林道になり当時の面影を偲ぶものは何もありません。

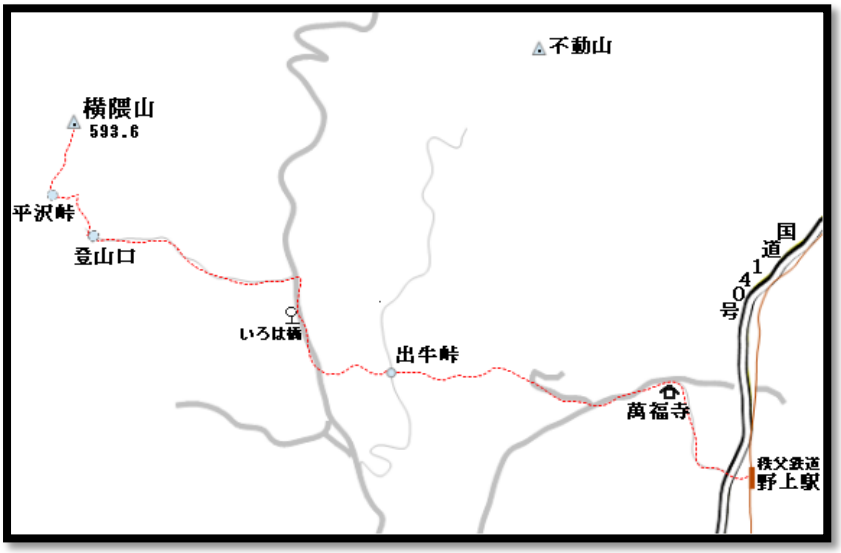
峠を下ると再びダンプカーの行き交う車道に出ます。ゴルフ場入り口を分けるとようやく登山道の入り口に着きます。ここまでなんと2時間もかかりました。

登山道は植林と自然林の間を縫うように進み、展望は良くありません。途中平沢峠という峠らしくない峠に着くと、住居野峠（すもうのとうげ）方面への道を分け北に向かいます。急登を行くと林道がすぐ左側に出てきて少々がっかりしますが、間もなくこの日一番の展望の良い場所に出ます。ここは西側が開け群馬側の鬼石の街並みや東・西御荷鉾山を見る事が出来ましたが、気温が上がり春霞のため遠望はほとんどききませんでした。

ここから山頂までは約5分、すぐに到着です。山頂で昼食・休憩、集合写真を撮影の後帰路に着きました。

山頂からは今日登った道を忠実にたどり駅に向かいます。

（豊田孝道　記）



参　加　者

◎清水順子　浅田良一　髙橋八重子
藤田喜久子　斎藤悦子　荻原章子
桶川和子　豊田孝道　内田克己
本島　健　榎原忠雄　鈴木　武
力丸忠夫、池田信一、　吉野喜八郎、
大室光江　　計 16 名

コースタイム

熊谷＝野上－65 分－出牛峠－30 分－
―いろは橋－1 時間 10 分－登山口－
－60 分－山頂－往路を戻る－秩父野上駅

No025

戸蓋山（とぶたやま）

標高
615m
N360141
E1385556

2014,01,25
日帰り
地　図
1/25,000
「長又」

両神山から派出する長大な尾根のひとつに天武将尾根（天理尾根）がある。天理岳～楢尾沢峠～両詰山～戸蓋峠～戸蓋山～高突山～権五郎峠（五合落峠）～大明神山と続く山稜は１０ｋｍを優に越え、小鹿野市街地に迫っている。はたしてこの山稜全部を天武将尾根と呼んでいいものやら。とにかく楢尾沢峠から先の山稜は高度を落とし、山容も穏やかになり、里山的な魅力に富んだ山となる。

今回はその山稜の中から、変化に富み、手ごろなハイキングの対象となる戸蓋峠～戸蓋山～高突山（たかつきやま）を縦走した。稜線上に道はないが、藪もなく、快適に歩くことができる。危険な箇所は少ないが、道標の類は皆無なので、地図読みの熟練、またはＧＰＳの携帯が必要である。登山の適期は晩秋から早春にかけての間で、夏は不向きである。

戸蓋峠道は、志賀坂峠とともに西上州と秩父を結ぶ交易路を形成していた歴史的な街道の一部で「新編武蔵風土記稿」にも飛二峠と記されている。この道は、さらに十石峠を介し、信州・佐久地方に続いており、戦国期には、武田勢がこのルートから数度にわたり攻め込んできた記録が残っている。また、戸蓋峠が秩父地方の防御線となっていたことが窺え、戸蓋峠を見下ろす戸蓋山に、大規模な要塞が築かれていた。このことから、城郭関係の資料では要害山と記されているが、加明地集落で要害山といってもまったく通じない。地元では戸蓋峠の脇にあるので、戸蓋山と呼ばれている。一方の高突山も、「新編武蔵風土記稿」に記されているが、山容からすると、この名は不適切に思える。恐らく、鷹が住み付いている山という意味の鷹附山が語源であろう。

加明地から戸蓋峠へは、県道から集落の中の舗装された町道に入り、集落の最後の家の脇の広場状の空き地から、谷に入る山道を行く。峠道はやがて谷から離れ、植林の中をスイッチバックで高度を上げる。細いが歩きやすい道で、程なく戸蓋峠に到着する。峠には頭が落ちた地蔵尊が2体ある。峠から戸蓋山までは急登となるが、自然林に囲まれた快適な登りである。やがて山頂直下の痩せ尾根に行きあたる。最も狭いところは一人が通過するのがやっとの幅しかない、両側が切れ落ちたナイフリッジになっている。立ち木がなければ、恐怖を感じるようなところである。軍団の進入を防ぐため、人工的に削られた可能性がある。

戸蓋山（６１５ｍ）の山頂は細長い平坦地になっており、山の神が祭られている。また、段状にいくつかの平坦地が連なっており、石段と思しき遺構もある。

戸蓋山からの下りも急傾斜であるが、その先は、比較的緩やかな起伏の山稜となり、三角点峰（５６６・７ｍ）、５５９ｍ峰も難なく通過する。この稜線は全体的に雑木林の区間が多く、冬枯れの季節なら明るいが、展望は期待できない。

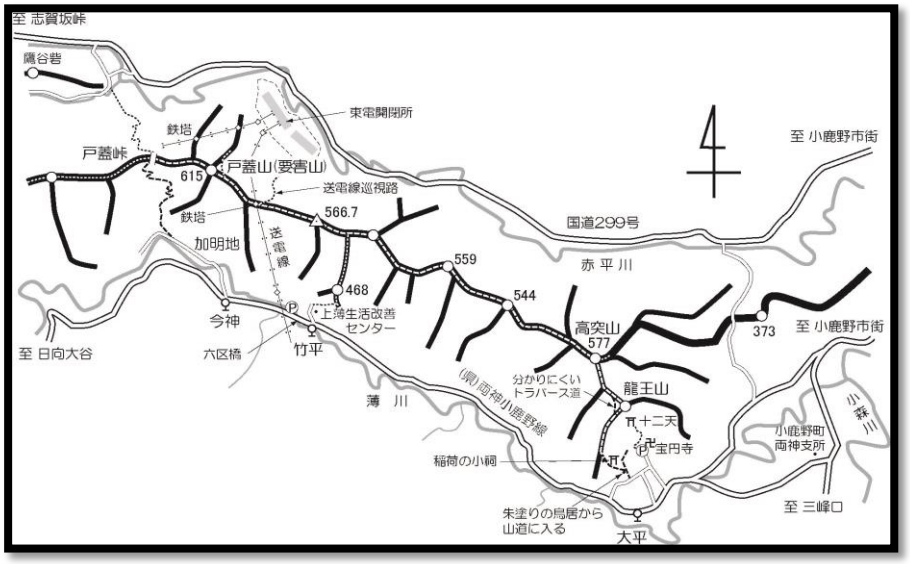
同じようなアップダウンを繰り返し、やや飽きてきた頃、最後の登りとなる高突山（５７７ｍ）にさしかかる。この山の山頂は植林地になっており、展望もない。目的地としては少し残念である。その代わり、くだりに使用する龍王山に至る尾根は、照葉樹の大木が林立し、何とも言えない素晴らしい雰囲気をかもし出している。ただし、急傾斜の滑りやすい痩せ尾根なので、注意を要する。龍王山の山頂には「八大龍王」の石碑がある。

下りは、龍王山南西尾根がよいが、山頂から直接、尾根を下るルートは急傾斜

で、浮石も多いので避けたい。分かりづらいのだが、いったん高突山との鞍部に戻り、山腹をトラバースし、龍王山南西尾根に乗る踏み跡がある。尾根に乗ると傾斜も緩くなり、山道も明瞭になる。やがて稲荷社を経て、赤い鳥居がある登り口（大平集落）にたどり着く。

（高田良一　記）

【戸蓋山山頂】



参　加　者

◎高田良一、柳舘紀人、吉野喜八郎、阿部米子、杉原三千代、箕輪ゆり子、山内恵美子　　計７名

コースタイム

大宮＝加明地―40 分―戸蓋峠――20 分―戸蓋山―70 分―高突山―20 分―龍王山―40 分＝大宮

No026

破風山（皆野・はっぷさん）

標高
△626.5m
N360422
E1390319

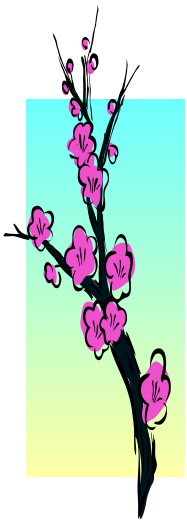
2011,01,16
日帰り
地　図
1/25,000
「皆野」

皆野町から3分程歩いた所に町営のバス乗り場がある。西立沢行きのバスに乗り秩父華厳の滝で下車、今回はここからのスタートとした。

早速近くの滝へ落差２０ｍ程であるが半分凍った滝と氷柱も見られまあまあの迫力である。滝の上部まで歩道を回り込んで行ってみる。大きな石段やいくつかの碑が立っていて一見する価値あり。見学のあと車道下りで秩父札所３４番の水潜寺へ、坂東３３ヶ寺、西国３３ヶ所を合わせて百観音の納め札所である。胎内くぐりの岩穴は危険の為立ち入り禁止となっていた。本来とは逆コースとなるが、ここから山登りの巡礼道に入る。

しばらく雨も降っていないので道も快適と思われたが所々で染み出した水が凍っていて何度かヒヤリとさせられた。ほどなく今回コースの起点である札立峠に出る。気温の低さに加え風も強くなって来ていた。峠から西方面に行く。岩場やロープの有る登りを慎重に進めて如金峰（のっきんぽう）へ、このピークからは武甲山・雲取山・両神山それに城峰山が木々の間から見える展望である。

札立峠まで一度戻って目的の破風山へ、狭いが三等三角点のある山頂である。笠山、堂平山を含め奥武蔵の山々や秩父市街地と素晴らしい展望でしたが寒さと風の強さにそく切上げ東方面に下る。

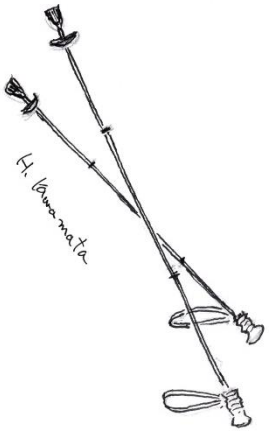


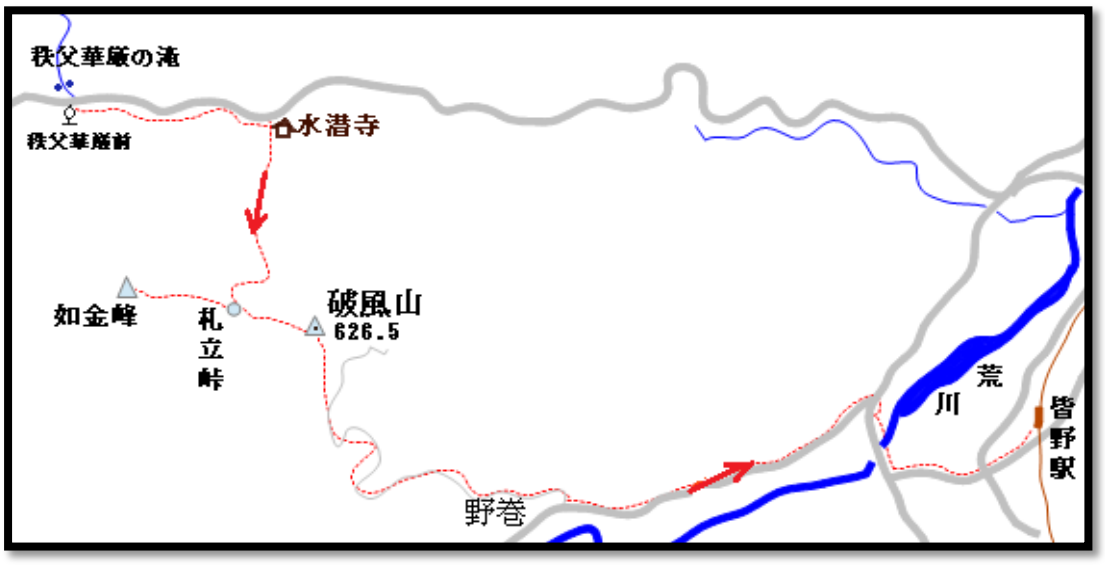
５分程の所に広いあずま屋がある。風を防いでの昼食タイムとした。温かい物を身体にいれる間にも今度はパラパラと

雪が、誰かがマイナス２度だ！と言っていた。雪がすぐに上がったのを機に下山開始する。途中には柚子園あり民家の庭先には紅梅の花が、春はもう近い！野巻地区に降りてからは長い車道歩きで皆野駅に着く。

（山崎　忠　記）

【頂上は目の前に】





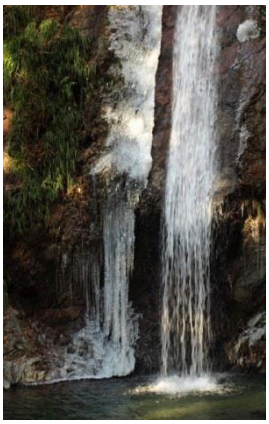
参　加　者

◎山崎　忠、村松登茂恵、川俣秀子、本島　健、
本島由利子、互　茂子、大和田良一、野澤六治、
野澤珙子、広川ふじ子、早川正雄、山本富枝、
神尾ますみ、浜田茂子、石田　徹、
熊谷裕子　　計 16 名

コースタイム

熊谷=皆野（バス）=秩父華厳の滝―60 分―
―水潜寺―45 分―札立峠―10 分―
―如金峰・鞍掛山―20 分―札立峠―30 分―破風山―
―30―柚子園―20 分―野巻地区―40 分―
―秩父鉄道・皆野駅

【秩父華厳の滝】



No028

子ノ山（ねのやま）

標高
660m
N355425
E1391107

2014,03,06
日帰り
地　図
1/25,000
「原市場」

子ノ権現の正式名称は、大麟山雲洞院天龍寺という。開創は延喜１１年（９１１年）というから名実共に古刹である。

足腰を鍛える神仏を祭ると言われているので、私達、山屋にとっては、有り難い山上の寺院である。これを象徴するかの様に、鉄製の大草鞋と夫婦下駄が境内のど真ん中に設置されている。寺宝は十一面観音像と聞くが、山屋にとってはこの仏像よりも、大草鞋や大下駄の方が効能が有りそうに思えるから不思議である。

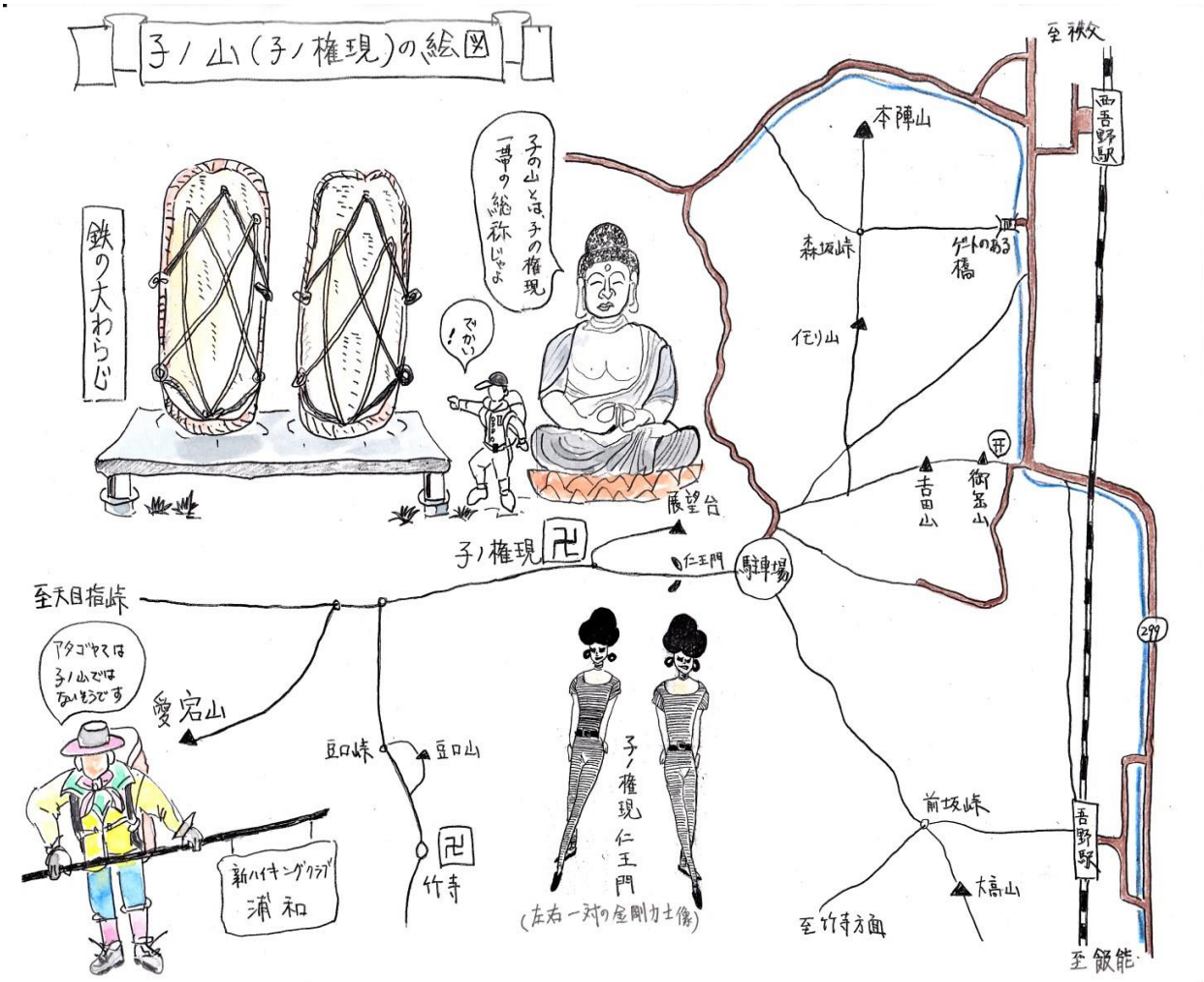
私達が子ノ権現を訪れたのは、まだ春浅い３月の初旬であった。西吾野駅から森坂峠とイモリ山を経由して、子ノ権現に参拝をした。このルートは、ほとんど歩かれておらず、メインルートに合流するまで、他の登山者に会う事はなく、まだ冬の冷気が残る小路には、私達の足音が小気味よく響いていた。そして巨大仁王像（左右二体）の出迎えを受け、境内に入ると、江戸時代から葺き続けているという茅葺きの本堂が現れた。見事な社殿は昔人の技術の高さを認識する。そして私達は、境内の美しさに喜びを感じながら、すぐのところにある展望台に登って行った。ここの案内板によると、ここからスカイツリーが見えるという。思えば時代も変わったものである。少し前までは、新宿副都心、それ以前は池袋サンシャインビル等が目的物なっていて、その展望の良さを競っていたのである。私達の本日の登山目的は「子ノ山」というピークを探して確認する事だったので、この展望台が、当該ピークだと思ったのであったが、ここには「子ノ山」を示す道標は無かった。境内と思われる敷地の中で、ここが一番高いところの様に思えたのである。それならば子ノ権現から伊豆ヶ岳への縦走路を天目指峠に向かって少

し行ったところに小高いピークがあるので、そこへ行ってみる事になった。しかし、その小高い岩のピークには愛宕山との表示があって祠が祀られてはいたが、ここも子ノ山ではなかった。境内にある展望台も、この愛宕山も、子ノ山ではないのであれば、子ノ権現周辺には、これら以上に高い凸張りは無いので、寺に訪ねてみる事になった。「子ノ山という名称の山は有りません。境内を含めたこのあたり一帯の総称が子ノ山なのです。」なるほど、八ヶ岳や霧島山等と同様に山域全体を示す山名だったのである。今回の山行で謎が解けた私達は、推理小説の謎を解いた読後感の様な清々しい気分で子ノ山を後にしたのである。途中浅見茶屋に立ち寄って名物のうどんと甘味ものを食べて吾野駅から浦和に戻ったのである。

（小澤紀行　記）

参　加　者
◎小澤紀行、
田中比佐子
桶川和子、
小澤三枝子
計４名

コースタイム
西吾野駅―20 分－
―森坂峠-20 分―
―イモリ山-60 分－
―子ノ山-20 分―
―浅見茶屋-60 分―
―吾野駅



No031
No029

皇鈴山～登谷山

（みすずやま～とやさん）

皇鈴山
679m
N360424
E1390927
2013,04,18
日帰り
地　図
登谷山
668m
N360457
E1390922
地図
1/25,000
「安戸」

皇鈴山・登谷山は、東武鉄道が毎年４月に開催する「外秩父七峰縦走ハイキング大会」の中に含まれており、多くの人が参加する。昭和六十一年から行われており、既に二十七年の歴史を持つ。

私も一度参加した事があるが、私の実力ではその日の内にゴール出来ず、二年がかりで完歩した。距離４２㌔といっても七峰のアップダウンは相当な実力を要求される。二年目に皇鈴山・登谷山を歩いたが新緑の素晴らしさが印象に残っていた。今年４月中旬仲間１０名と再び歩いた。俳句に造詣深いＨ氏の作品も使わせてもらい、このコースを紹介しよう。

小川町駅からバスで打出まで行き二本木峠、愛宕山を通り皇鈴山、登谷山に登り釜伏山、日本の里経由で秩父鉄道波久礼駅まで歩くルートである。打出バス停に下りた日は天気が良く、周りの山々は萌木色に染まり、終わり近い山桜、その他多くの花が咲き、鳥が囀る。春だ！

「奥武蔵どっちを見ても山笑う　　暇有」
「春なれや名もなき山の薄霞　　芭蕉」

【槻川を渡り二本木峠に向かう】

このルートは車道が走っており、車道を横切ってはまた山道に入る、そんな事を何回か繰り返すと二本木峠に出る。

峠から山つつじの群落の間を登ると愛宕山だ。が、まだ蕾だった。満開まで後一週間位だろうか。

「風筋や縺（もつ）れしまった錨草　飯島晴子」

一旦下り、車道を横断して雑木林の間を登り返せば皇鈴山の広場に着く。あずまやがあり秩父の方の山々がみえ、昼食を取るには気持良いところである。

「一人静花のさびしさ見せもせず　　河野南畦」

皇鈴山からガレ場の縁をフェンス沿いに

下り、登り返せば登谷山である。頂上には電波施設があり、北東面の展望が開け寄居の街が見える。その背後に日光方面の山、榛名山、赤城山などが見えるのだが、春霞みでその姿は確認できない。しかし登谷山の頂上は荒れていた。表示板取付けの基礎はあるが表示板はない。車道に近く誰かが持ち去ったのだろう。嘆かわしいことだ。釜伏峠で右前方の釜山神社の参道に入る。その日偶然にも「お神楽・石戸開の舞」が奉納されていた。カメラマンと僅かな観客のみ、我々も暫く鑑賞した。折角のお神楽、土・日の人が出易い時にやればお神楽を踊る人もやりがいがあるのにと思ったのだが、後で調べてみると、毎年4月17～19日が例大祭と決まっている。お祭りは曜日は関係ないのだ。秩父の夜祭りも12月3・4日で毎年同じ日に行われる。

「鈴鳴らすときに揃ひて神楽舞　鷹羽狩行」

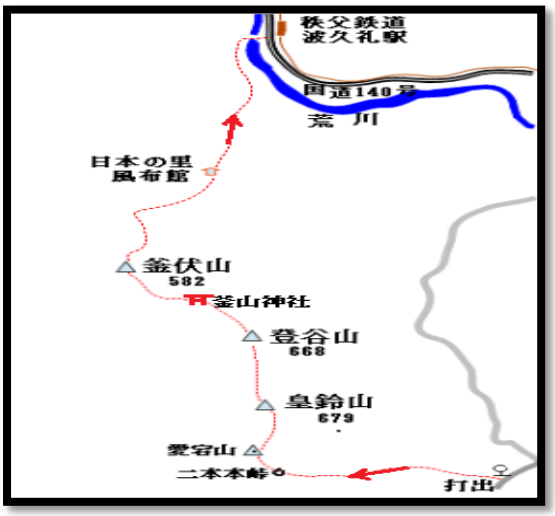
釜山神社の裏を登ると直ぐに釜伏山の頂上に着く。ここから風布（ふっぷ）への下りがきつかった。鎖やロープがある岩稜を急降下することになる。現在日本水（やまとみず）水源への道は立ち入り禁止になっており、この下りは長い。慎重に下る。皇鈴山・登谷山がメインディシュなのだが、デザートの方にお株を取られたような感じだ。山としては釜伏山の方が面白いのだが、平易な歩きを期待して参加した人には厳しかっただろう。

「ゆとりなく路険の芽吹き目に入らず　暇有」

風布に下りてしまうと緊張から解放される。日本の里をすぎ、風布川沿いの「風の道」を通り、車道をもくもくと歩くと荒川に架かる寄居橋が出てくる。橋を渡ると波久礼駅である。

風薫り脚も軽やか風の道　暇有」

（浅田良一　記）



参　加　者

浅田良一、力丸忠雄、
桶川和子、小林善行、
松岡茂夫、大槻千代子、
西方　昇、新井淳司、
森田憲子、早川正雄　計10名

コースタイム

打出-70分－二本木峠－30分－皇鈴山-25分－登谷山-30分-釜伏山-40分－風布館-20分－波久礼駅

No032

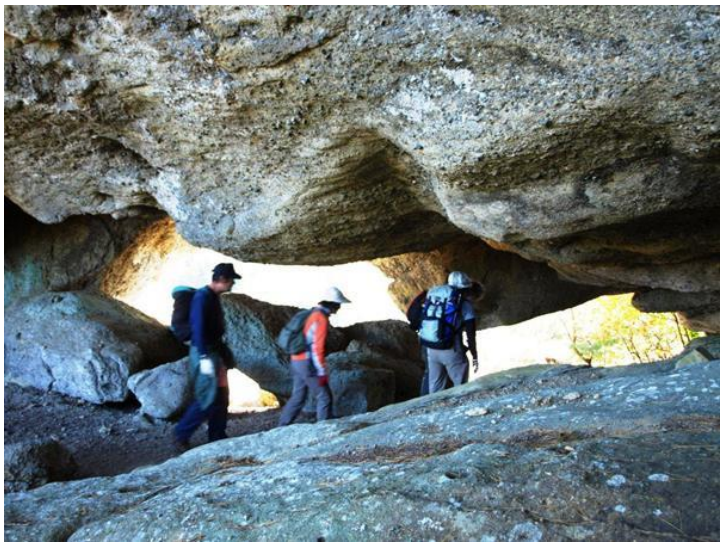
観音山（かんのんやま）

標高
△698m
N360238
E1385724

2011,11,26
日帰り
地　図
1/25,000
「長又」

観音山の山腹には札所三十一番観音院があり、ここには何回か来た事がある。この周辺は秋の紅葉が素晴らしく、スケッチハイクできたことがあるし、この辺りを良く知っているO氏の取って置きの秘場「幻の石門」を巡った後観音山に登った事もある。「幻の石門」は秘密の場所だから余り詳しく書けないが、少し触れよう。観音山だけ書くよりずっとと奥行き深い、楽しい山行記録になる。但し、ルートがあるわけでなく、危険な所もあるので知らない人は近づかないで欲しい。我々もO氏のガイドで行くことが出来たのである。

小鹿野町の静かな山の中にあるO氏の山荘に前日泊り、酒を飲みながら楽しい語らいの時間を過ごした翌日、ゆっくり車でスタートする。観音院の駐車場に車を止め観音山とは反対側の山に向かって歩き出す。道はない、O氏の後を追うだけである。砂地の急登で滑り易く中々前に進まない。喘ぎながら稜線に辿り着くと、直ぐに急降下する。沢筋に下りるのだが人によってはロープが必要になる。沢筋を少し下り再び登りに入る。これまた傾斜が厳しい。登り切り暫く歩くと石門に辿り着く。かなり大きなドームでそこから紅葉に包まれた観音山を見ることが出来る。



【観音山】

【幻の石門】

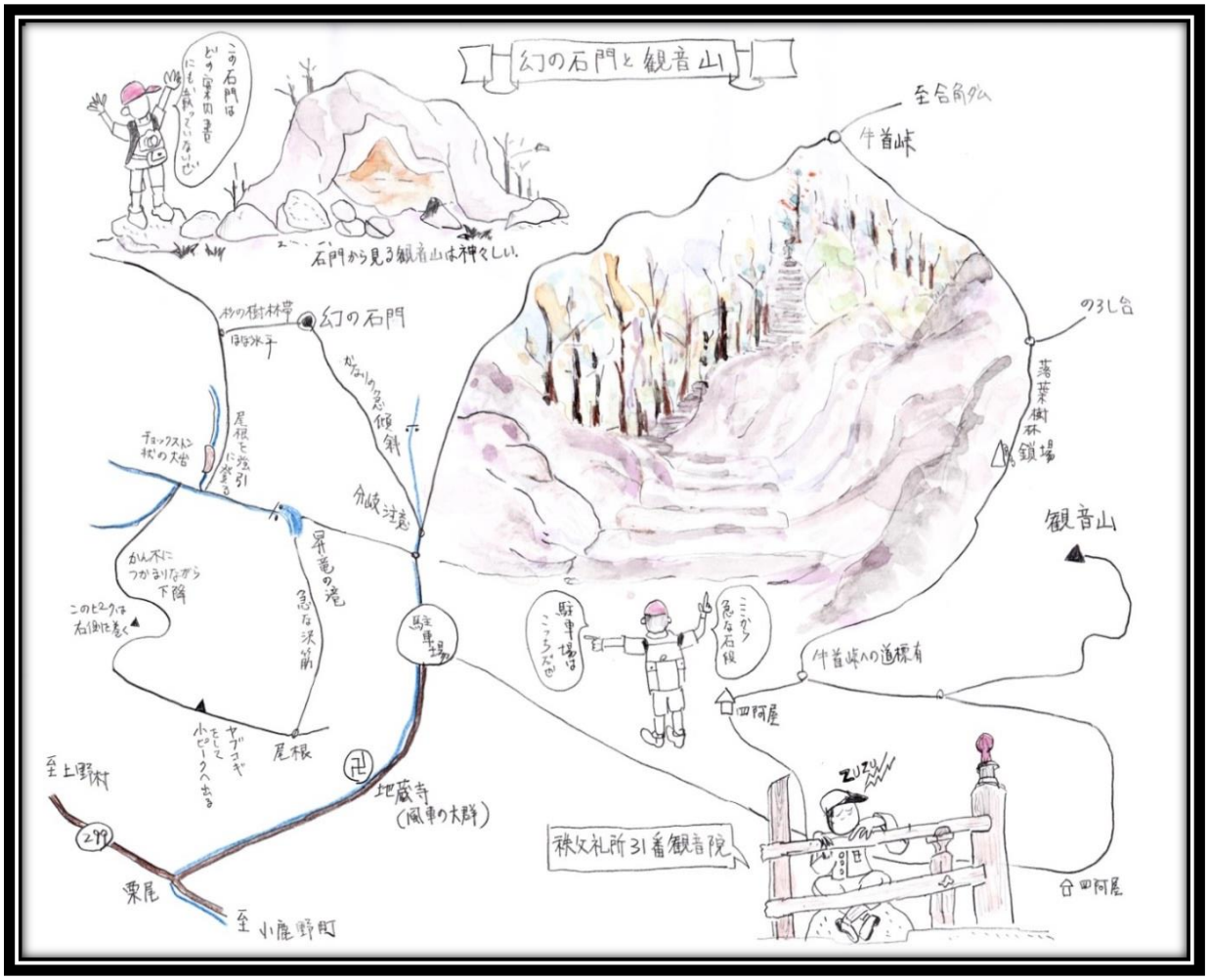
「幻の石門」を後に下ると、観音院から牛首峠につながる道に出る。何時も暗くて、じっとりと湿った木立のなかを登っていくと、急に展望が開け、明るい色彩に満たされる。ここが牛首峠である。ここを左に下りて行くと吉田川沿いのバス道に出る。牛首峠から下の方に目をやると、民家と共に西秩父桃湖が見える。牛首峠の直ぐ脇で初心者のために、O氏の指導で懸垂下降練習をしたことがある。我々は右にルートを取る。紅葉した葉が

太陽の光に透けて見え美しい。間もなく日尾城跡に出るが、城跡の面影はない。小さな鎖場を登り観音院の方に歩くと、観音山に登るルートが見えてくる。階段が続いており、一気に頂上に登る。紅葉で鮮やかに化粧された山の中に「幻の石門」が見える。その右手の方に目を移していくと新たな石門を発見、O氏は新たな挑戦に目を輝かせていた。元の道に戻り観音院に下りる。観音院へは一般的には左廻りで下りるのだが、右回りのルートもある。やや急で滑り易い所もあるが、「かぶり岩下の石仏群」を近くで目にすることが出来る。観音院で手を合わせた後、石段を下れば駐車場である。

（浅田良一　記）

参　加　者
◎小澤紀行、互　茂子、
広川ふじ子、清水順子、
森田憲子、浅田良一
計 6 名

コースタイム
礼所 31 番観音寺駐車場
―道なき道？―60 分―
―幻の石門―30 分―
―牛首峠―40 分―
―観音山―30 分―
―礼所 31 番観音寺駐車場



No033

神　山（かみやま）

標高
△732m
N360717
E1390056

2013,01,20
日帰り
地　図
1/25,000
「鬼石」

神山は児玉郡神川町にある山で、山頂に城峯神社①奥の院がある。

北麓は神流湖②で、東山腹の城峯神社はフユザクラ③・ツツジの名所。城峯公園④の駐車場から歩き始める。間もなく城峯神社に到着。神社の境内あたりからところどころ道路が凍っている。アイゼンを付けるには土や石が多すぎる。結局登山靴のまま滑らないように慎重に歩く。高度が増すにしたがいだんだん積雪が増えてきたが新雪のため足元はしっかりしていてアイゼン不要。尾根筋に出ると今日は風がことのほか寒い。それでも全員元気に頂上を目指す。頂上近くで道は直登に近い登山道と緩やかなのぼりの林道の二手に分かれる。ここで急な登山道を登る健脚組と林道をゆく軟弱隊の二班に分かれて行動、程なく両隊は神山頂上で無事合流した。山頂付近は樹木に覆われあまり展望はよくないが梢越しに神流湖とその周辺を望むことができた。山頂にある城峯神社奥の院でいつもの登頂証拠記念写真を撮り、少し下った広場で昼食・大休止。山頂でアイゼン装着の訓練後下山開始。新雪であったがアイゼンはよく利き快適に下ることができた。日だまりハイクとほんの少しの雪山気分を味わった楽しいハイキングは無事終了した。

【参　考　資　料】

① 城峯神社
日本武尊が東征の折、山頂に大山祇命を祀ったのが始まりと伝えられている。明治維新まで、柚木氏邸内に社殿が設けられていたが、明治５年入間県のとき、現在の位置に遷宮され郷社に列せられた。大和武尊が弓矢を収めた由来により矢納の地名となる。
大山祇神：大山を司る神、山の神の総元締の山神、金運の神
ご利益：金運招福、災難厄除け、商売繁盛　他
参拝形式　二拝二拍一拝

② 神流湖：
下久保ダムにより神流川をせき止めたことにより出来た人造湖でる。首都圏の水がめである神流湖は、群馬県と埼玉県の県境にあり、釣りを楽しむ人々や湖面散策などの人々で賑わう場であると同時に、下流受益者との上下流交流会等のふれあいの場でもある。昭和４４年から管理開始された下久保ダムは全国でも珍しいＬ字型のダムであり、堤頂長の長さは６０

５mとコンクリートダムでは全国一を誇る。また、神流湖周辺は豊かな自然に恵まれ、四季折々の自然を楽しめるハイキングコースとしても人気がある

③ フユザクラ（別名：コバザクラ）

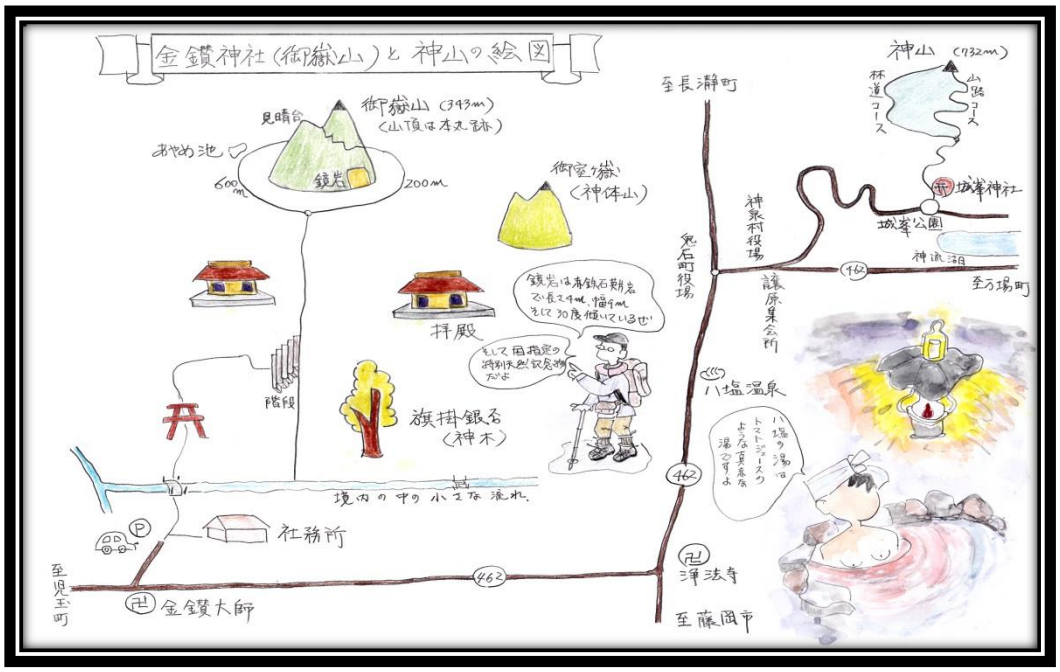
紅葉の時期に見頃を迎える「冬桜」。冬桜は別名「十月桜」とも呼ばれ、晩秋から初冬にかけて開花する珍しい桜である。冬に咲く桜には、「冬桜」「十月桜」「寒桜」「寒緋桜（カンヒザクラ）」の種類がある。「冬桜」は一重の白い花を、「十月桜」は八重に淡いピンクの花を十一月下旬から十二月にかけて咲かせ、春にもまた咲く。「寒桜」や「寒緋桜」は暖かい地方（沖縄）で、早春（一～二月）に一回咲くだけである。城峯公園の冬桜は、「十月桜」の改良種で、八重咲きの匂いのある可憐な桜である。

花言葉は冷静、優美、純潔、精神美

④ 城峯公園

埼玉と群馬の県境に位置する埼玉県児玉郡神川町大字矢納にある。下久保ダム建設により誕生した神流湖を見下ろす公園として昭和四八年に旧神泉村が建設。建設時に植えられたのが、埼玉県が生み出した冬桜で、秩父にある「天覧桜」から苗をとり改良したもの。春にも咲く二度桜である。冬桜は群馬県藤岡市鬼石、愛知県豊田市小原町にも咲き、この三カ所が「日本三大冬桜」となっている。冬桜の開花期間中には、夜間のライトアップも行われ、幻想的な雰囲気の中で夜桜見物が楽しめる。

（塩崎孝壽　記）



参　加　者

◎広川ふじ子、○大瀧正己、青木道子、石黒由美子、榎原忠雄、荻原章子、小澤紀行、斉藤悦子、佐藤　新、塩崎孝壽、鹿野紀彦、首藤恒子、鈴木市子、松田昭子、森田憲子、和田厚子、神尾ますみ　　計 17 名

コースタイム

本庄児玉 IC＝30 分＝金鑽神社―45 分－御嶽山－70 分――金鑽神社―25 分―城峯公園―5 分―城峯神社―50 分－―神山―50 分―城峯公園Ｐ13:40＝本庄児玉 IC

No034

関八州見晴台

（かんはっしゅうみはらしだい）

標高
760m
N355647
E1391319

2014,01,13
日帰り
地　図
1/25,000
「正丸峠」

関八州見晴台（高山不動奥の院コース）

奥武蔵に位置する高山不動は、一説によれば、関東三大不動の一つとも数えられ、四季を通じてハイキングや学校の遠足の場として好適地である。その高山不動尊の奥の院付近が現在は関八州見晴台として格好の景勝地となっている。

さて２０１４年の正月も明け、最初の３連休の最終日は，寒さは厳しいが好天に恵まれた。南浦和駅集合組、途中乗車組とで合計１３名、予定通りに西吾野駅に着く。他のハイカーもちらほら。駅前から一旦下り、川沿いに登山口に進む。この駅から高山不動までの３コースのうち萩の平経由のコースを取る。橋を渡ると住宅地で、しばし急坂。しばらく植林帯を進むと萩ノ茶屋跡に着く。かつては地元のおばあちゃんが接待してくれた思い出あり。一休みしていると、何組かのハイカーも到着。ゆるい坂道を進むとまずパノラマコース、次に不動滝コースと合流する。大銀杏の広場に出るとぱっと視界が開け、奥多摩の山々が真近に。１２０の階段を一気に登ると、不動尊の本堂。

太い木材を使った堅牢な造り。さすがもう初詣客は見あたらない。本堂裏の近道を通っていよいよ関八州見晴台に。山頂付近はつつじの名所でもある。日当たりを求めてほぼ全員一直線に座り、はるかな富士山を愛でながら昼食。各自持ち寄りの漬け物などが何度か廻される。正午が近づくにつれ、いろんな方向からハイカーが続々とやってくる。やはり人気のある手軽な山だ。記念撮影をしたあと下山開始。花立松ノ峠までは歩きづらい下り道。黒山三滝に向かう車道に出てすぐ進むと再び山道に。右前方に、筑波山が望まれ関東平野の拡がりが感じられる。

束の間だが風のない日溜まりの山道歩きは心も弾む。水の乏しい小沢に沿い車道にでると名水“日照水”の看板あり。口に含むと意外に暖かい。車道を少し下り再び山道に入るとまもなく黒山三滝に。男滝、女滝、それに少し下ったところに天狗滝。この時期、水量は少ないが、名勝地であること間違いなし。意外にもここは初めてというメンバーも。バスの発車時刻を見間違ったが幸運にも、黒山バス停に着くと、すぐバスがやって来た。越生駅，坂戸駅でも乗り継ぎよく、日差

しの暖かみがまだ感じられる時間帯にすでに帰途に。

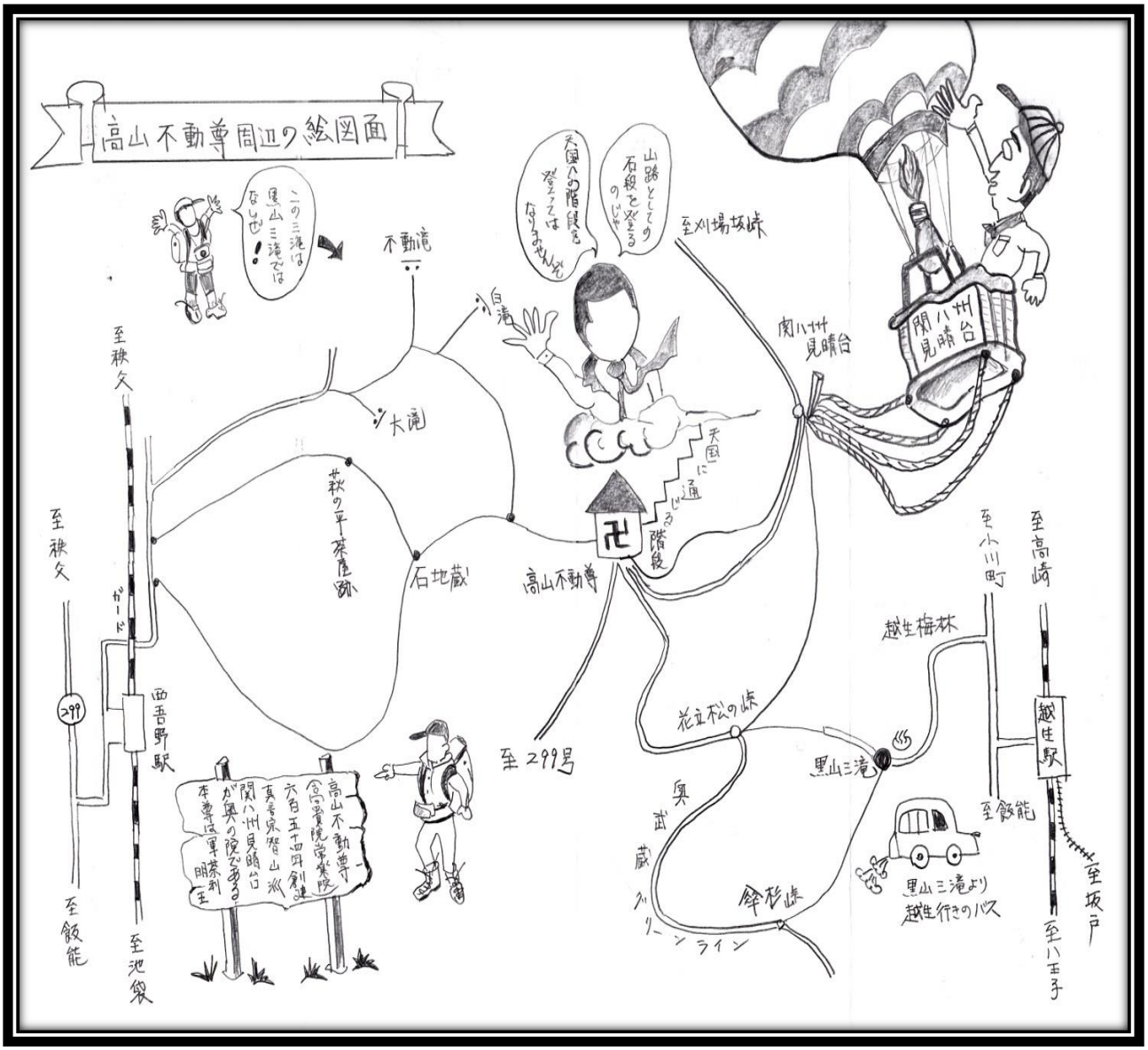
（床次泰文　記）

参　加　者

◎床次泰文、山岸　修、三木正子、大瀧正己、榎原忠雄、藤田喜久子、山内恵美子、互　茂子、荻原章子、斉藤悦子、池田信一、浅田良一瀧沢恵子、　　計 13 名

コースタイム

西吾野駅－40 分－萩の平茶屋跡－30 分－高山不動－30 分－関八州見晴台－20 分－花立松ノ峠－40 分－黒山三滝－－15 分－黒山バス停



関八州見晴台（越生・柚子の里コース）

（２０１３・１２・５　実施）

関八州見晴台は埼玉県では人気ある山の一つである。８００ｍ弱とそれ程高くない山だがその見晴は素晴らしく、四季折々訪れる人が多い。関八州の名前はその名の通り武蔵、相模、下総、上総、安房、上野、下野、常陸の関東八州が一望出来たことから名付けられた。

一般的には秩父鉄道・吾野駅または西吾野駅から歩き、高山不動尊を拝み関八州見晴台に登る人が多いが、その他にも多数のルートがある。吾野の反対側、越生の方から登るコース、しかも黒山三滝からでなく、横吹峠から四寸道を経て関八州に登るコースを十二月初旬歩いたので紹介しよう。

越生から黒山行きのバスに乗り黒山終点二つ前の火の見下で降りる。冬晴れの素晴らしい日だった。越生でもこの地域は柚子栽培で有名である。歩き始めて直ぐ黄色い実がたわわについた柚子の木が目に飛び込んでくる。女性陣は柚子を安く入手出来ないかと人気を探す。たまたま家の庭に中年の女性を見つけ、この近くで柚子を譲ってくれるところがないかと尋ねた。柚子なら家にあるよと、快く家に案内し大きな木箱に入った柚子を引っ張り出してくれた。好きなだけ持っていけという。心ばかりのお礼をして分けてもらった。重くなったリックを担ぎいよいよ山路に入る。

横吹峠から四寸道に入るが、表示は小さな板ギレに書いてあるだけで初めての人は見落とす。四寸道は古く、歴史ある道である。「新編武蔵風土記稿」（１８０４～１８２９）に「入間郡龍ヶ村に秩父郡高山村へ通う道あり、これを四寸道とよぶ、その幅狭くして馬の通わざるほどなる故、此名あるべし」とある。入り口からして狭く、これが道？と思うようなとっかかりである。しかし入り込むと普通の山路で危険なところはない。暫く行くと越生・駒ヶ岳の表示がでてくる。往復１０分位でリックをおいて登る。全国に駒ヶ岳ファンクラブがあって、１８とも２０ともある全国の駒ヶ岳を歩いている人達がいる。一番高いのが甲斐駒ヶ岳２０６７ｍ、一番低いのが越生・駒ヶ岳３６９ｍである。四等三角点を確認する

が展望はよくない。元の道に戻り先に進むと、右に登るルートが出てくる。その先に御嶽神社が祀られているが、今回はスキップした。暫く歩くと舗装された猿岩林道が出てくる。林道を３００ｍ程登ると左側に四寸道の入り口がでてくるが、表示は全くなく、木で覆われ判りにくい。入ってしまうと格別問題になる所はない。左側は黒山三滝に至る谷である。

再び猿岩林道にぶつかる。花立松ノ峠の

方に歩き、峠の前から再び山に入る。ここも表示はない、赤テープがぶら下がっているだけである。鬱蒼として暗い谷間を登る。道は狭く、高度をかせぐと花立松ノ峠から関八州見晴台に登る道に合流し、最後の急登が待っている。関八州見晴台からの眺めは素晴らしく、武甲山、両神山など秩父の山系、富士山も見える。暖かい日差しの中でお昼を取っていると、透明感のある薄いグリーン色のバッタに似た昆虫がリックに止まった。こんなに寒いのによく頑張っているねと暫く観察した後、草むらに帰した。ヤマクダマキモドキという名前だとＫ氏が後から調べてくれた。その後、高山不動尊に寄り、大いちょうの木を見て西吾野に下りた。

（浅田良一　記）

参　加　者

◎浅田良一、力丸忠夫、
箕輪ゆり子、小棚木　魁、
互　茂子、清水順子、小林善行、
榎本千代子、石黒由美子、
大槻千代子、池田信一計 11 名

コースタイム

越生駅＝25 分＝火の見下-
-15 分―横吹峠/四寸道-120 分
-関八州見晴台-20 分-高山不動尊
-50 分-間野-20 分―
―西武秩父線西吾野駅

No035

大霧山（おおぎりやま）

標高
△766.6m
N360204
E1390922

2011,01,20
日帰り
地　図
1/25,000
「安戸」

東武東上線小川町駅から1時間に1本の白石車庫行き・イーグルバスに乗車すると30分程で橋場バス停に到着、バス停の反対側には立派なトイレもある。バス停から粥新田橋を渡り、舗装道路を15分程歩くと、道路左に“世界一小さな釣り場”の看板が目に入る。看板の道路反対側に馬頭尊の石碑と朽ちかけた「粥米田峠・大霧山」の標識があり、標識に従いここから山道を登って行くと、15分もしない内に元の舗装道路に出る。道路端にある無人の直売場でゆずやミカン等を買あさりながら舗装道路を進むと右に大きくカーブする車道の左側に民家の石垣があり、金網のフェンスに「粥仁田峠、大霧山ハイキングコース」の標識が掲げてある。標識に従い舗装道から再度山道に入る。左手に目的の大霧山を見ながら進むと登山口から1時間程で日本武尊の伝説のある粥新田峠に到着。峠の左手にはあずま屋があり数台の車が駐車していて、最近流行の山ガールのグループがこれから登る準備をしている。

あずま屋の脇にある登山道からは本格的な登りになるが、展望もなく所々に階段もある急な山道を登って行くと1時間程で山頂に到着した。**山頂からは、武甲山、両神山、双子山や雲取山の秩父の山々**、榛名山、赤城山、子持山等の上毛の山々や、眼下には秩父の市内がはっきりみえとても素晴らしい展望だった。空気が澄んだ良い天気の時は浅間山や日光連山も展望出来る。

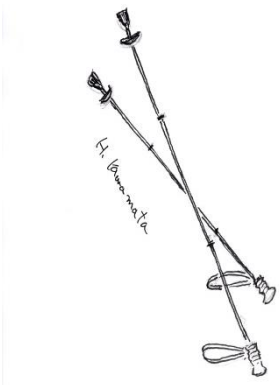
ここで早めの昼食、記念写　真を撮影後下山開始。左手に東秩父牧場や笠山、堂平山を眺めながら下って行くとやがて杉やヒノキの森林地帯に入り旧定峰峠に到着、鬱蒼とした林の中に「旧定峰峠」の標識と笠山、粥仁田峠、釜伏山、二本木峠、大霧山等の地名に因んだダイダラボッチの伝説が書かれた説明書きが掲示されている。この峠を右に下ると45分程で定峰バス停に、左に下ると経塚のバス停に出られるが当初の予定通り直進し定峰峠に向かう。定峰峠までは下りといいながら幾つかの急なアップダウンがあって意外とこたえる。定峰峠には茶屋が開いていたが、バスの時間の関係もあり素通りする。峠から白石車庫バス停までは車道歩きになるが、3か所程ショートカットの道もあり、ほぼ予定通り白石車庫バス停に無事到着した。

（力丸忠夫　記）

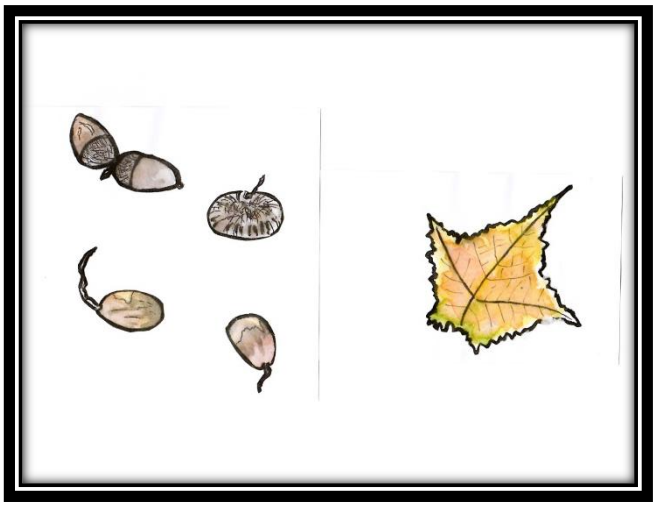
※ 参考
平日の白石車庫から小川町駅行きバスは１０時台から１３時台が無いので早く山から下りるとバスが無いので注意の事。
（Ｈ２５．３月現在）

※ 粥新田峠の表示
峠の表示は場所よってまちまちで最初の標識では「粥米田峠」民家の標識には「粥仁田峠」と記載されていたのでそのまま記載した。最近の地図上では「粥新田峠」とあるが古い地図では「粥仁田峠」と記載してあるのもある

参　加　者
◎力丸忠夫、早川正雄、
山口　勝、和田厚子、
高橋八重子、豊田孝道、
浅田良一　　計７名
コースタイム
小川町＝橋場バス停―15 分―
―登山口―70 分―粥新田峠―
―45 分―大霧山頂―30 分―
―旧定峰峠―40 分―定峰峠―
50 分―白石車庫バス停＝小川町



【絵・浅田良一】



No036
No055

四阿屋山～三合落

（あずまやさん～さんごうつ）

四阿屋山
△771.6m
N355953
E1385706

三合落
△1115.1m
N355957
E1385447
2012,3,25
日帰り
地　図
1/25,000
「三峰」

四阿屋山から両神山へとつながる尾根上の１１１５．１メートル三角点峰は、多くの案内書やホームページにおいて「両見山」と記載されている。しかしながら、地元旧両神村では、両見山は浦島集落にある金剛院西方の７４８メートル峰を指すとされ、金剛院の遥拝所であるこの両見山からは、かつて尾根伝いに両神山へと向かう修験の道が開かれていたという。そしてその途上にある１１１５．１メートル三角点峰は、地元では「三合落」と称されている。そこで本稿では、地元の呼称を尊重して、それらの山名を記載することとする。

上尾駅西口を６時に出発して、順調に四阿屋山登山口の菖蒲園駐車場に到着した。四阿屋山までは、一般のハイキングコースである。指導標が完備され横道にも行先が書かれているので迷いようのない感じである。途中で、菖蒲園からさらに伸びている林道を横切り、福寿草園に出る。ちょっと花の数が少なくて、寂しい感じだ。さらに登ると、両神神社に到着する。ここから頂上はもうすぐ上なのなのだが、かなり急な斜面となっており、ここからの直登は禁止であった。登山道は頂上を南に巻きながら、ぐんぐんと登っていく。ずっと鎖が連続してかかるが、

足元にさえ気をつけていればさほどの危険はない。菖蒲園から１時間あまりで、四阿屋山頂上についた。頂上は狭く、周囲が切り立っているので休むにも注意が必要だ。一段降りたところに木製のベンチがある。禁止されている直登コースから上がるとこちらに出てくるようだ。頂上からは一部潅木が切り開かれて、両神山や二子山がよく見える。今日辿る尾根もずっと見晴らすことができる。

さて、ここからが今回のメインである。頂上を少し南に戻った地点から、西に伸びる尾根に入る。出だしから急峻な岩尾根で、北側を巻く踏み跡があるのでそちらに入るが、落ちたらお陀仏な道である。ちょっと先が思いやられると思いきや、尾根を進むと潅木と植林の中に踏み跡が伸びており、快適な縦走になる。結構登り下りがあるが、下草もなく実に歩きやすい。一ヶ所、急坂で直接稜線に上がることができずに、トラバースして小尾根に取り付きその尾根を登るところがあるが、ここにも踏み跡があった。あとは忠実に稜線を辿り９８６ｍ峰に到着する。ここからはもう１１１５・１三角点峰の「三合落」は目の前である。少し下降すると、小さな祠があった。何となくこの峠を越えているような踏み跡もあり、浦島と川塩を結ぶいにしえの路なのかもし

ない。ここからは実に急な斜面を、潅木や木の根に掴まりながら頂上へと直登していく。程なく三合落頂上に着いた。

ここからが苦難の道のりであった。頂上の北峰から、北に向かう稜線に入るが、ひたすら急な尾根道で、しかも踏み固められていないため、つかむ岩角がぼろぼろと剥がれ落ちてくる。潅木を掴みながら降りるが、掴みたい木に限って枯れて腐っていたりもする。しかももし、

滑ったら間違いなく、谷底まで落ちて別の世界へと旅立ってしまう。幾度か「ロープ出しましょうか」とメンバーに問いかけるような激しい尾根だった。やがて小広い８９２ｍ峰に着き、ようやくほっと一息。そしてここから先も相変わらずヤブのない、快適な尾根道になる。

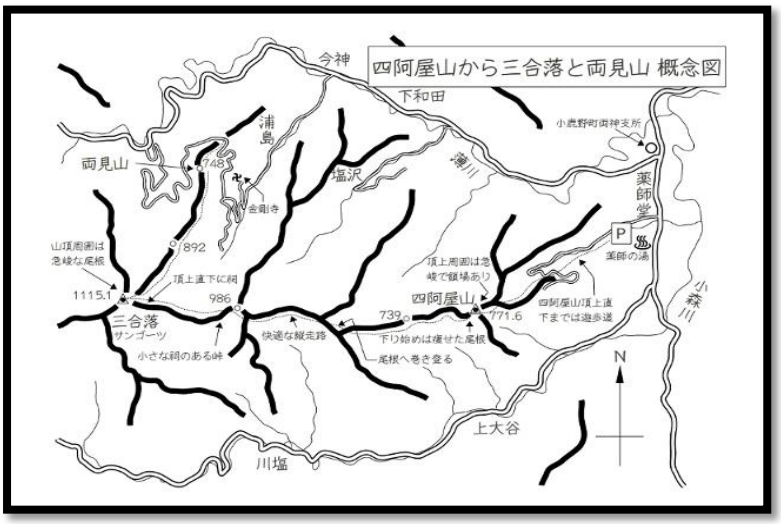
「両見山」を越え、踏み跡はずっと尾根沿いに続いているようであったが、地図にはない新しい林道が尾根を横切っており、ここで山行を終了した。

あとは林道を下り、浦島集落を抜けて、町営バスの走る県道に降りたったが、バスは１時間後ということで、結局朝出発した駐車場まで歩いてしまった。秩父の山は里のすぐ裏山でも侮れない、との思いを深くした山行だった。

（大和田　良一　記）

参　加　者
◎大和田良一、
鹿野紀彦、井上武久、
柳舘紀人
計４名

コースタイム
菖蒲園駐車場―70 分―
―四阿屋山―145 分―
―三合落―15 分―
―両見山 ―155 分―
―浦島入口バス停―70 分―
―菖蒲園駐車場



No037

正丸山（しょうまるやま）

標高
780m
N355646
E1390946

2012,12,02
日帰り
地　図
1/25,000
「正丸峠」

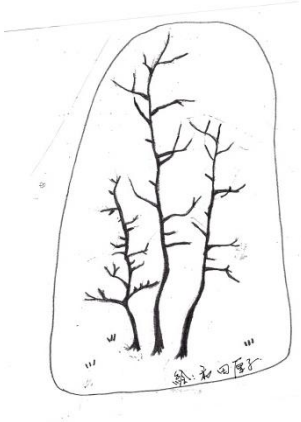
奥武蔵にある正丸峠は良く聞きなれた峠だが、正丸山となると日頃あまり知られてないのではなかろうか。平成二十四年十二月初め支部会員一七名で森田さんのリーダーのもとゆっくりと９時半過ぎに西武正丸駅を出発した。

西武線の線路下を通り正丸峠の標識に従って集落を通り過ぎる頃、道筋に行楽登山客目当ての素朴な一軒のお店があった。地元の産物やお饅頭を売っている。何年か前にここを通った時、皆が急いでいるので立ち寄る間もなく通り過ごしたことを思い出し、蒸したお饅頭を買って早速歩きながら食べるが、これも山歩きだからこそできる楽しみだろう。ゆっくりお喋りをしながら四〇分で大きな馬頭観音の碑の前に出る。ここから左へ分ける道は伊豆ヶ岳の方へ行くが、そのまま直進して荒れた涸沢模様（水が干上がった、かって沢であったところ）の道を進む。しばらくすると急な階段となるが、それを登り切って車道に飛び出したところが正丸峠だ。この峠の傍らに一般行楽客向けの茶店があり、東方向には吾野方面を俯瞰することができる。

昭和三〇年に昭和天皇がここで眺望を愉しまれた由の立派な記念碑も建てられている。なおこの車道は右の方向に行けばその先が正丸トンネルだ。ちょうど時間的にここで一休みしたいところだが休息せず車道の反対側の階段を駆け上がり五分もすると東屋の休憩場があるのでそこで昼食を取ることにする。ただこの冬一番の寒気という風の吹き付ける中、手袋も外さずの食事で早々に出発することにした。食後すぐのスタートで急登が始まりできるだけゆっくりと歩を進める。傾斜はキツイが時に危険な箇所もなく二

○分位で正丸山の頂上に到着した。西に武甲山、二子山が。その先遠くに両神山を眺めることが出来た。記念撮影の址さらに川越山を経て旧正丸峠に向かう。楢・唐松・赤松などの落葉を踏みながらの心地よい山道が続く。ゆっくり３０分足らずに旧正丸峠に到着した。ここにもはっきりした標識が立てられている。昔はここが本道であったのだろうが今はくるまの通る正丸峠に比べ知る人も少ない所になっているのだろうか。ここから先は道を右に曲がって杉・桧の植林の整備された作業道をゆっくり下りながら西武正丸駅に向かう。

（吉野喜八郎　記）

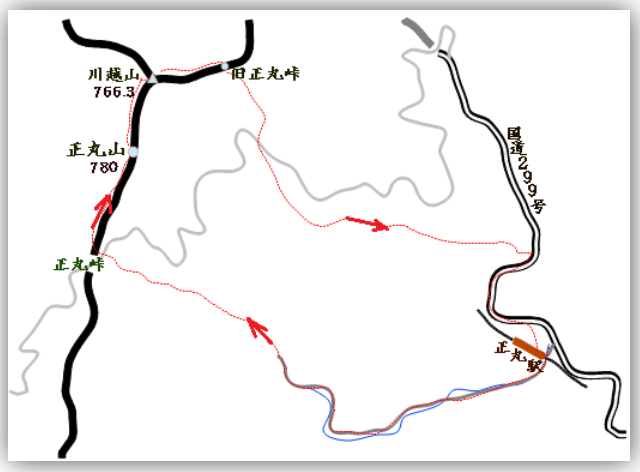


参　加　者

◎森田憲子、大瀧正己、山本富枝、鈴木市子、塩崎孝寿、榎原忠雄、和田厚子、榎本千代子、山崎　忠、吉野喜八郎、豊田孝道、荻原章子、高橋八重子、浜田茂子、石塚嘉子、松本文男　　計 16 名

コースタイム

西武正丸駅―20 分―馬頭観音―45 分―正丸峠―10 分―東屋―20 分―正丸山―20 分―川越山―20 分―旧正丸峠―30 分―西武正丸駅



No038

真弓沢山（まゆみざわやま）

標高
790m
N360503
E1385811

2013,12,07
日帰り
地　図
1/25,000
「長又・
万場」

父不見山～城峰山の山稜からは、いくつもの長大な尾根が派出し、広大な山域を形成している。ところが、城峰山、破風山以外の山々はハイキングや登山の対象とはみなされず、訪れる人も少ない。そんな山域にも、変化に富んだ魅力的な山稜が秘められている。そのひとつが真弓沢山である。登山の適期は晩秋から早春にかけての間で、夏は不向きである。

真弓沢山は石間川と小川に挟まれた長大な（仮称）石間山稜の主峰で、石間（いさま）の沢戸集落と小川集落を結ぶ小川峠（石間峠）の南側に位置する。三角錐の美しいピークである。山名は小川側の小字名（山域名）に由来する。ちなみに石間の沢戸集落では小川山、半納集落では三角山と呼んでいるとのことだが、固定された名称は無いようである。

今回は石間の漆木集落から石間山稜に登り、米山～石間雨乞山～真弓沢山と続く長大な山稜を小川峠まで縦走した。踏み跡が不明瞭な区間が多く、地形が複雑なうえ、痩せた岩稜も多い。もちろん道標の類は皆無なので、地図読みの熟練、またはＧＰＳの携帯が必要である。特に石間側の支尾根に迷い込むと危険な箇所が多いので、細心の注意を払いたい。

登山口は漆木集落の先にある。縦走路まで送電線の巡視路を利用するので、鉄塔のある支尾根を目指すとよい。登り始めは植林の中であるが、すぐに自然林の明るい尾根になる。急登が続くが、間もなく支尾根の中間点となる鉄塔に着くので、一息入れるとよい。ここから先も急登であるが、冬枯れの頃なら展望が開け、効率的で快適な登りである。程なくしてふたつ目の鉄塔がある稜線にたどり着く。ここからは真弓沢山を目指して北東に稜線をたどる。鉄塔から少し行くと岩峰があるが、左側から岩峰上に踏み跡がついている。なおも進むと稜線を越える林道「明ヶ平沢戸線」に出る。再び稜線に乗るためには、明ヶ平側に少し移動し、林道の側壁が切れたところから山の斜面に取り付く。１０ｍほど登り、稜線側にトラバースする感じに踏み跡がついているが、はっきりしない。以後、小川峠に至るまで、はっきりした踏み跡はない。獣道も多いので、稜線上をたどることを意識し、あまり踏み跡を気にしないほうが良いかもしれない。

稜線に戻ると、尾根筋がはっきりしない急登となる。足場も悪く、かなり体力を消耗するが距離は短かい。すぐに明瞭な稜線に出るが、この稜線を東に進むと石間側に落ちる支尾根（林道がトンネルとなっている）に続いており、末端が大

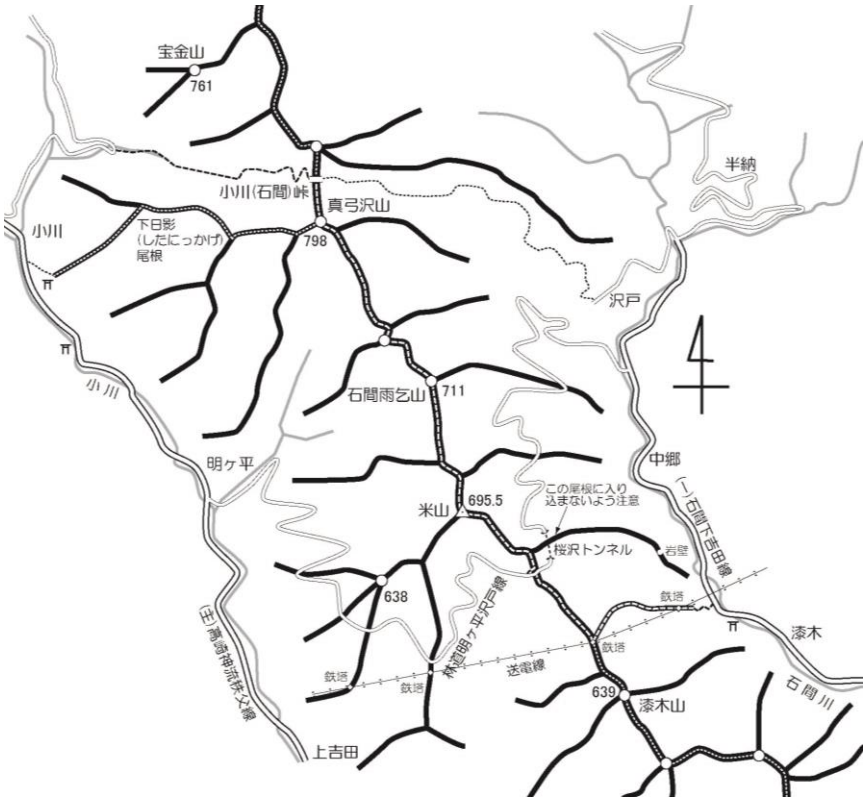
岸壁になっている。逆コースの場合、引き込まれやすいので、注意を要する。この稜線を北西に進むと、すぐに三角点のある米山（６９５・５ｍ）に至る。上吉田の市街地の中にある米山薬師（よねやまやくし）の背後に見える山だ。ここから先は小さなアップダウンを繰り返しながら稜線を進むが、それほど大変なところはない。程なく、７１１ｍの石間雨乞山に到着する。石間の各集落による雨乞いの神事が行われていた山で、山ノ神が祭られている。ここから痩せ尾根や岩稜が多くなるが、注意していれば、うまくすり抜ける踏み跡を見つけることができる。このコースで、最も楽しい区間であり、ここをたどらなければ、真弓沢山に登る価値がないといっても過言ではない。やがて、植林の中の急登となり、真弓沢山の山頂に到着する。展望はない。国土地理院の地図には山名も標高も記されていないが、秩父市が作成した白図では７９８ｍの標高が与えられている。

山頂から北側に下るとすぐに小川峠に到着する。峠からは小川集落、沢戸集落に下ることができるが、沢戸への道は、不明瞭になりつつある。

（高田　良一　記）

参　加　者
◎高田良一、阿部米子、
杉原三千代、箕輪ゆり子、
計４名

コースタイム
大宮＝石間漆木―100 分
―米山―80 分―
―石間雨乞山―60 分―
―真弓沢山―40 分―
―小川＝大宮



No039

両詰山（りょうづまりやま）

標高
△790.7m
N360122
E1385415

2012,11,11
日帰り
地　図
1/25,000
「長又」

両詰山は小鹿野町（旧両神村）日蔭集落の西方に位置する、標高７９１ｍの山です。両神山から天理岳を通り楢尾沢峠を越えて続く、天武将尾根の最後のピークとも云えます。私たちは、日向大谷から楢尾沢峠を経由して日蔭集落に下るルートを辿りました。このコースは明確な登山道がなく、所々でルートファインディングを強いられます。

日向大谷の登山口は小鹿野町営バスの終点で、無料駐車場やトイレが整備されています。ここは両神山の主要な登山口であり、いつも大勢の登山者で賑わっています。登山口の石段に取り付くと、ひと登りで「ふたかみ荘」があり、その手前で道が左右に分かれています。表示板には左が〔両神山頂・清滝小屋〕、右が〔奈良尾峠・納宮〕と書かれています。なお、奈良尾峠は略称で「楢尾沢峠」が本来の名称のようです。すべての登山者が左手へ向かう中、私達だけ右手へ向かって歩き出しました。鳥居の前の木橋を渡って杉林の中に入ると、すぐに左へ上がる微かな踏み跡が現われます。ここから所々に岩の混じった急登が続き、一汗かいたところで右方向へのトラバースとなります。落ち葉に埋まった崩れやすい登山道を慎重に進むと、やがて楢尾沢峠に着きました。右方向が納宮で、左へ向かうと天理岳ですが廃道の警告が記されています。

一息入れて右手へ歩き出すと、なだらかな尾根道となりました。すぐに「納宮」へ下る道が現われますが、直進して案内表示のない尾根を進みます。展望の少ない緩やかな登りや下りを繰り返し、８５２ｍ峰のピークを過ぎて更に行くと、北面が開けた８５７ｍ峰に着きました。こ

こから見る両神山は、全体が壁のようにそそり立ち、天武将尾根が手前に伸びて、天理岳の尖がりがアクセントを付けています。双子山や毘沙門山の奥には、西上州の山々も浮かんでいました。休憩や昼食が済んだら、直進して薄暗い杉林の中を下ります。尾根を外さないように進み、広く明るいヌタ場のような所を過ぎると、やがてぽつんと三角点が現われました。杉林に囲まれ展望も目印もありません。そこでＯリーダーが手作りの山名板を掛け、みんなで記念写真を撮りました。

山頂を後にして標高差で５０ｍほど下ると、左手に北東へ伸びる尾根があります。ちょうど７３８ｍのピークの手前ですが、ここを降りる形になります。目印や踏み跡がなく非常に判り難いので、細心の注意が必要です。急な斜面を慎重に下ると、なだらかな尾根になりました。ここから先も尾根を外さないよう進むと、再び急な斜面となります。これを過ぎるとはっきりした作業道になり、程なく舗装路に降り立ちます。右方向へ進み、薄川に架かる沼里橋を渡ると県道に出ます。右手へ進むとわずかで「日蔭バス停」があり、きれいな観光トイレも設置されていました。

なお、バス停の手前には樹齢５００年を誇る見事な夫婦杉があり、周辺には一万㎡のダリア園が広がっています。秋にはダリア祭りが開かれ、５０００本の花々が一面に咲き誇ります。

（清水　博　記）

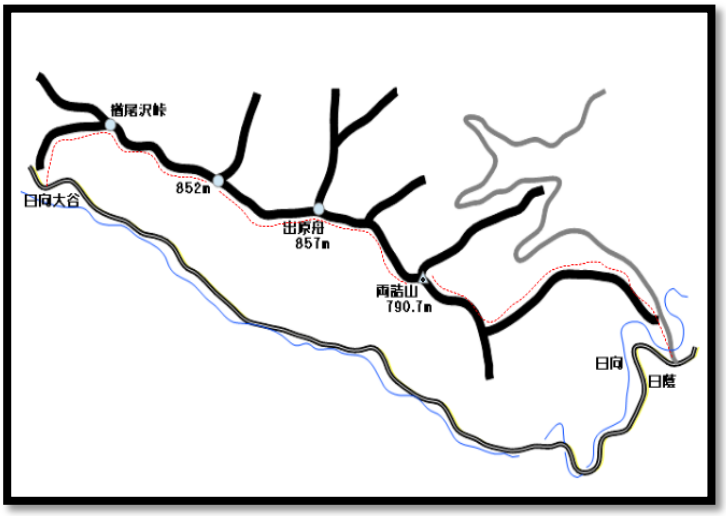
参　加　者

◎大瀧正己、小澤紀行、互　茂子、床次泰文、森田憲子、清水　博

計６名

コースタイム

日向大谷-60 分-天理岳分岐―
-45 分―857m峰―25 分―
―両詰山・山頂―10 分―
―738m地点・北東分岐―40 分―
―日蔭バス停



【酔人山荘　互　茂子　画】

No041

笠山（かさやま）

標高
837m
N360107
E1391124

2013,11,09
日帰り
地　図
1/25,000
「安戸」

東武東上線・小川町駅からリーバスに乗り、皆谷バス停で下車。バスは行楽シーズンの日曜日とあって満員でした。

バス停から白石方面へ６０ｍ行くと左に登山口があり、民家の側を通るとミカンやユズ、カリンなど手が届きそうなところに実っていました。車道に出て左に行くと間もなく右に登山道の標識があるのでこれに入る。このコースは外秩父七峰縦走の一部なので登山道はしっかりと整備されています。ここからは車道と登山道の繰り返しとなりました。途中、比企三山といわれる堂平山や大霧山（笠山を含めて比企三山）が眺められました。車道を少し長く歩くとやがて東屋がある丁字路に突き当たりました。この東屋で休憩。ここから右に向かいブドウ園の脇を標識に従い左折。やや行くと左側に登山道の標識があり、これに従って登山道に入りました。このあたりからコナラやブナの樹林帯のやや急登が続き、所々、淡い紅葉が真っ盛りでした。やがて堂平山への分岐に着く。すぐ先が笠山山頂です。

山頂からさらに奥の笠山神社まで行きました。東京スカイツリーが見られるビューポイントからは残念ながらうす雲がかかっていて確認できなかった。神社の建物を風よけにして昼食。温度計は６度を指していました。

寒かったので昼食を早々に済ませて堂平山分岐まで戻り、急坂を慎重に下ると水平道の笠山峠に降り立つ。さらに行くと林道栗山線と交差する七重峠に着きました。林道を横切って尾根道を登って行くと突然前が開け広場に突き当たり、正面にドーム型の屋根の天文台が見えました。広場を横切って堂平山の一等三角点にタッチ。剣ヶ峰は曇天で展望が望めないと判断しパス、林道を歩くことにしました。途中にグライダー基地があり、軽々と飛び立つハンググライダーを見て感動。白石峠から登山道を下り白石車庫バス停に無事到着しました。

（益田光男　記）

≪　参考資料　≫

沢を登って笠山へ

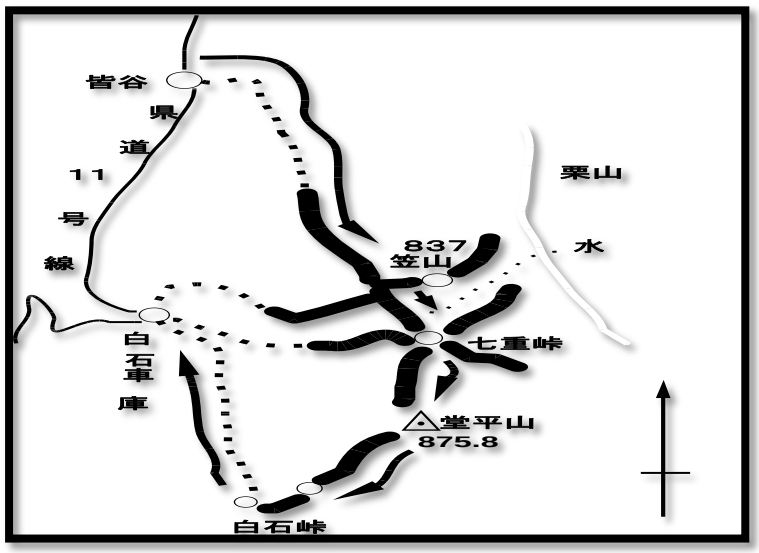
車で川越街道から県道１１号線で小川町の市街を抜け、腰越の切通バス停のある信号を左折し、館川を左に見ながら少し行くと鳥居がある。その鳥居をくぐり抜けて、２００メートルほど行き二十二夜塔の先を右折する。栗山の集落過ぎると笠山へ向かうと曲がりくねった林道になる。やがて、右側に湧水が出ている所に着く。この水は名水で、近くの人たちがポリタンクやペットボトルを持参して汲みに来ます。その手前に2~3台駐車できるスペースが2か所あるのでここに駐車する。

水場の右脇から沢登りが始まる。水量はいつも少ないのでトレッキングシューズで充分登ることができる。階段状の段差の少ない岩を選びながら前進する。大きな岩で前進不可能な場合は、沢の脇の林の中を登ればいい。ただし、沢から離れないように注意する。

水量がほとんどなくなったころ、右側からの登山道と合流する。この道を左に行く。ほとんど水のない沢を右左と繰り返すと歩きやすい登山道になってくる。緩やかな道を登って行くと最近できたばかりの林道に突き当たる。これを左折すると笠山に向かう林道に出る。右折して笠山に行く。

東秩父村　和紙の里

手すき和紙の作り方を実演している。１３００年の伝統がある手すき和紙「細川紙」の技術は重要無形文化財になっています。



参　加　者
◎益田光男、荻原章子・
小林善行、互　茂子・
松本文男・道江伸枝
計　６名

コースタイム
皆谷バス停―30 分―萩平分岐
―90 分―笠山―5 分―
―笠山神社―5 分―笠山―
―25 分―七重峠―45 分―
堂平山―35 分―白石峠―
―60 分―白石車庫

【益田光男　画】

No042
No040

伊豆ヶ岳～古御岳

（いずがたけ～こみたけ）

伊豆ヶ岳
△850.9m
N355537
E1390938
2012,11,24
日帰り

古御岳
820m
N355523
E1390936
地図
1/25,000
「正丸峠」

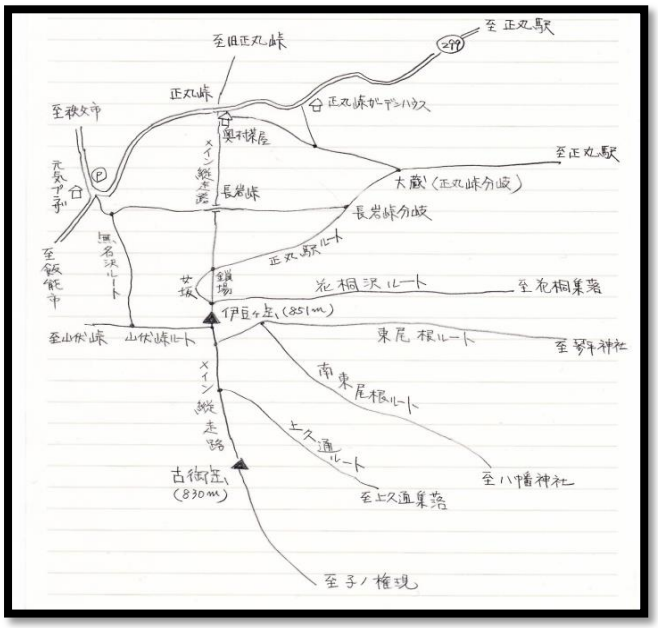
西武鉄道吾野駅がまだ終点だった頃、若人は、土曜日の半日仕事を終えると、競って正丸峠にやって来て、ここのバンガローに泊まった。それは吾野駅から秩父行きのバスに乗って、ガーデンハウス前で下車すると、ちょうどよい時間帯だったのである。そして翌日、正丸峠から伊豆ヶ岳、古御岳、子ノ権現と縦走して吾野駅に下って帰ったのである。このメインルートは今でも健在であるが、鉄道が秩父まで開通したことによって、正丸峠に立つ者は稀になり、ほとんどの者が正丸駅から直接、伊豆ヶ岳に登り、メインルートを縦走して子ノ権現に参拝してから、西吾野駅か吾野駅のどちらかに下っている。

栄枯盛衰は世の常と言われているが、奥武蔵の名峰伊豆が岳は、今でも賑わいを保っている。特に新緑の頃が私は好きである。紅葉の季節もよいのだが、やはり去り行く低山の秋はなぜかもの悲しい。

正丸駅から伊豆ヶ岳に登るルートは３０分ほど舗装道路を歩く。そして大蔵の分岐を左方向に登るのが一般的になったが、クラッシックルートに拘るのであれば、右へ正丸峠への路を登る。そして峠の茶店の前に立って、映画のカチンコの如く「よし、出発」を宣言してから伊豆が岳に向かう事になるが、時間的には９０分程多く歩く事になるので、日帰りが主流の今日は前者選択が多いのだと思う。私達が歩いたのは新緑の５月であった。大蔵の分岐から山路に入ると、それはかなりの傾斜があったが、さわやかな薫風は、相殺しても尚、おつりが来るような心地よい大自然からの贈り物であった。緑の中に点在する山躑躅の花（赤）は、群生美には無い控えめな美しさであり、まさに奥武蔵という低山帯に合致していて、気品さえ漂っていたように思える。登り切ったところが伊豆ヶ岳の山頂直下の鎖場であった。現在は登攀禁止になっているので、原則的には女坂から頂上を目指す事になるが、この山の特徴はこの男坂と、その上部の岩稜帯であろう。この描写を横内浦男氏は４０数年前の朝日新聞の紙上に次の様に載せている。『てっぺんの岩の塔が頭の上に見える。頂上からさがったクサリにつかまって、ヤッコラサと岩場をよじ登る。ロッククライミングのニセモノのような味である。ものの三十分ほどで頂上。てっぺんの岩の頭に立つと、汗ばんだ顔にサッと初夏（原文は冬）の風。おお、すばらしいながめじゃなア。ここからながめる景色はアタイ千両。たばこの煙が、初夏（原文は初冬）の空に流れる。流れたむこうは飯能から

と東京あたり。あっちは川越、東松山、熊谷で、白く見えるのが荒川だろう。ふりかえれば、武甲山を目の前に秩父の山また山。』そして5月の伊豆が岳山頂は多くの登山者で溢れていた。それも老若男女、今はやりの山ガールの姿も。よく視ると、それはオバサンだったり。とにもかくにも、伊豆が岳は昔も今も賑わっているのである。喧騒の頂上を後にして私達は古御岳に向かった。山伏峠への分岐を右に見送り、急坂を最低鞍部まで下り、そこから登り返すこと10分程で古御岳の山頂に着いた。静かに佇む四阿屋のその上部には、まるで巨大テントのフライシートのような、緑の屋根。やっぱり伊豆が岳の弟分のような古御岳も名峰なんだ。私達が休んでいると反対側の方から親子連が登ってきた。「こんにちわ」お兄ちゃんの方は元気がよい。子ノ権現から来たのだとすればたいしたものである。巨大テントの中で一服してから私達はなおも縦走を続けるために出発したのである。そこには、爽やかな空気、そして山の精が立っていて「さようなら」と言ったように思えた。やっぱり奥武蔵高原は初夏の頃が良い。

（小澤紀行　記）



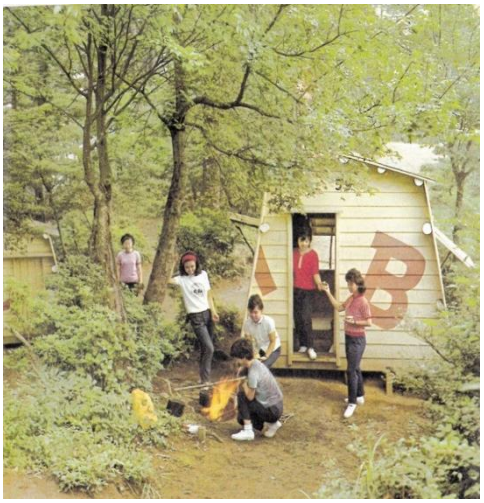
参　加　者

◎小澤紀行、互　茂子、浅田良一
小澤三枝子、斎藤悦子、柳舘紀人、
石井正夫、萩原　昇、藤田喜久子、
道江伸枝、和田厚子、倉重裕一
計 12 名

コースタイム

西吾野−20 分−森坂峠登山口ー
9:15−森坂峠 9:30−南川上名栗線林
道−80 分−南東尾根−55 分−
−古御岳/伊豆ヶ岳鞍部−20 分―
−伊豆ヶ岳−女坂−90 分−正丸駅

【想いでのバンガロー】



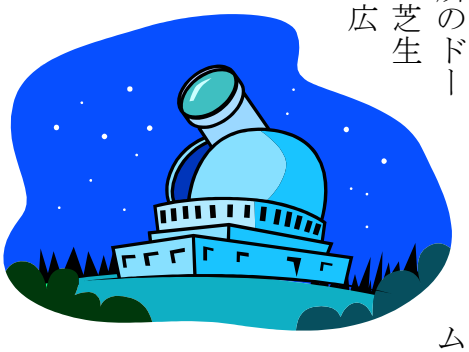
No044

堂平山（どうだいらさん）

標高
△875.8m
N360021
E1391124

2011,01,04
日帰り
地　図
1/25,000
「安戸」

外秩父七峰の一つである堂平山は、東武東上線小川町駅より白石車庫行きのバスで、終点で下車します。白石峠方面へしばらく歩き、白石峠分岐より剣ヶ峰へと急登路を目指す。一番高い剣ヶ峰へと進むと堂平山の山頂が表れる。あと一登りと歩を進めると、目の前に明るい空が飛びこんでくる。天文観測所のドーム



つ頂上は、芝生に囲まれていて広く明るく休憩するのにもってこいの所です。たっぷり休憩を取ったら、都幾川トレッキングコース方面へ下る。約２時間山里を下ると、坂東札所のある慈光寺に出る。バス停はすぐそばです。

（榎本千代子　記）

【連　作　紀　行　文】

奥武蔵の山々へ出かける折に、川島のあたりの広い畑地の彼方に、おっぱい山とも呼ばれる笠山と並んでゆったりと裾野を広げる堂平山が車窓から眺められる。この笠山と、槻川の向かいの大霧山と併せて比企三山のひとつに数えられているのが堂平山だ。その山頂には、国立天文台から、ときがわ町が譲りうけた堂平天文台があり９１センチ反射望遠鏡での星空観測会は人気の催しだ。森林体験施設やキャンプ場も整備され、マイカ―でも登ることができ、多くの人に親しまれている。

この年、支部の新年山行はこの堂平山であった。正月三ガ日の疲れ？を癒すべく集まった参加者に、冬の快晴の青空がまぶしい。小川町駅からイーグルバスに乗り、終点の白石車庫で下車。緩やかな舗装道路を白石峠へと歩きはじめる。途中から山道に入り、足元の霜柱がザクザクと小気味よい音をたてる。すっかり冬枯れの道は落ち葉もあつく、はく息は白い。じっとしていると寒いが少し傾斜があると、すぐ暑くなり衣服の調節が忙しい。白石峠から最高峰の剣ヶ峰へは急な階段を登らされ、息があがる。頂きは電波塔が占拠していて展望もなく、ちょっと当てはずれな感じだ。ここから登山道へ戻るはずが、植林の中を急下降。眼下に明るい民家を見下ろす陽だまりへ飛び出す。しばし陽をあびて休憩したが、これはちょっとした気分転換の道迷いであった。急斜面の雑木の中を登り返して

林道へ戻る。山頂は、遠くからも天体観測ドームが青空に映え、一等三角点のある広い芝の広場に陣取ってのお昼ご飯は格別においしい。新春らしくお汁粉が振る舞われたり、お神酒が回ってきたりと、和気あいあいの時間がながれる。

下山は七重へと向かう。歩きやすい山道や車道を交互にたどって，ときがわトレッキングコース‘を、慈光寺へ下る。コース途中には 雛段のような休憩所も設えられ、しばし、日向ぼっこで小腹を満たしたり、お喋りを愉しんだりの大休止。慈光寺までは結構な距離を歩かされたが、さすが坂東九番の名刹、観音堂や本堂の落ち着いた雰囲気に、しばし疲れも忘れる。慈光寺入口のバス停までを頑張って歩き、清々しい新年山行は無事終了した。

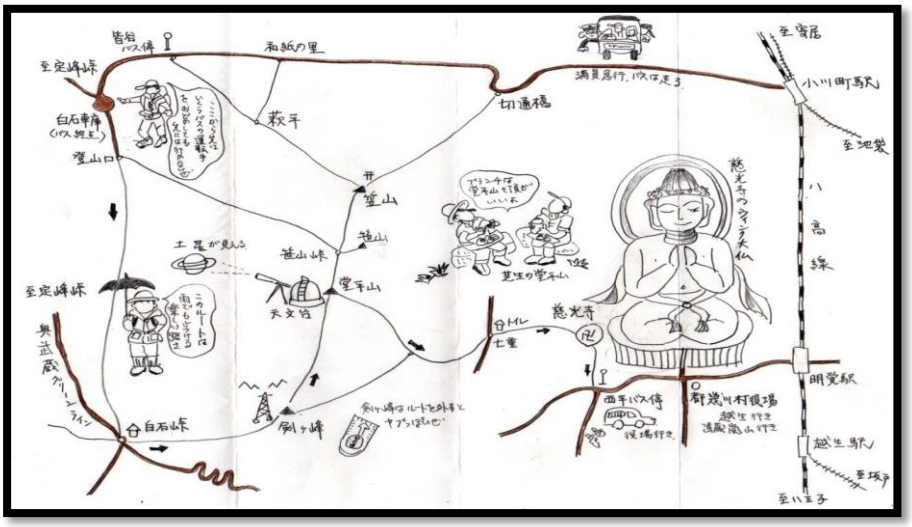
（互　茂子　記）

参　加　者

◎浅田良一、互　茂子、荻原章子、池田信一、井上武久、
藤田喜久子、和田厚子、川俣秀子、山本富枝、早川正雄
榎本千代子、清水順子、大和田良一、益田光男、松田昭子、
小澤紀行、小澤三枝子、森田憲子　　計 18 名

コースタイム

JR 大宮＝川越＝東武東上線小川町＝バス白石車庫―
―70 分―白石峠―20 分―剣が峰―40 分―堂平山―60 分―
―七重―70 分―慈光寺―30 分―慈光寺入口＝越生 16:00



No053
No045

武川岳～二子山

（たけかわだけ～横瀬・ふたごやま）

武川岳
△1052m
N355613
E1390749
2012,10,21
日帰り

二子山
△882.7m
N355743
E1390817
地図
1/25,000
「正丸峠」

名郷バス停からほんの少し歩くと武川尾根に取りつく新道である天狗コースがあるが、今回は旧コースの妻坂峠コースを選んで歩くことにした。

大場戸を直進して、杉林の中の車道を歩く。名栗川のせせらぎの音が心地よく聞こえ、空は秋晴れで真っ青である。狭いがしっかりした橋を渡ると山中で登山道になった。小さな沢に沿って杉林の中を登って行く。途中からジグザグの急登となり、うっすらと汗をかいて登り切ると妻坂峠に到着。峠は風が通る休憩に最適な場所である。四差路になっていて左折すると一時間三〇分で大持山、直進すると三〇分で生川、右は武川岳である。

ここからは左右がミズナラ、ヤマグリなどの木々に変わり、多少急降下する道もあるが快適な歩きで、やがて急登になり武川岳の山頂に着く。ここで昼食。

周りは樹林だが南東側が少しだけ開けていて大岳山が指呼できた。焼山は西側が大きく開けており、すぐ近くに武甲山、右奥に両神山、小鹿野の二子山が確認できた。二子山雄岳の山頂近くは短いが大変な急登である。雄岳、雌岳山頂は小広い広場になっており休憩には格好の場所だが展望はない。ここから谷コースを選択。滑りやすい急坂を　慎重に下り芦ヶ保駅に３時過ぎに無事到着。

今回は日暮れが早いことを考慮し、平坦地はやや速足、急坂の登下降はゆっくり足の「メリハリ」をつけた歩き方をした。参加者８人は健脚で足並みがそろっていたこともあり予定よりはるかに早く下山した。

（益田光男　記）

参　加　者
◎益田光男、西片　昇、
小澤紀行、鹿野紀彦、
小澤三枝子、力丸忠夫
佐藤由紀子、池田信一
計８名

コースタイム
名郷バス停―55 分―山中―
―35 分―妻坂峠―30 分―
―武川岳―70 分―焼山―
―40 分―二子雄岳―15 分―
―雌岳―80 分―芦ヶ久保駅

《参考資料》

新道・天狗の岩コース

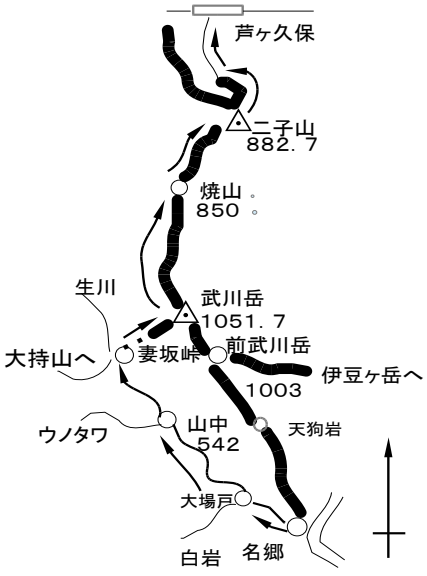
名郷バス停から左の川の流れの音を聞きながら、少し車道を歩くと右に西山荘がある。その横から登りが始まる。舗装の切れるあたりの左に階段があり、これを上がる。ここから５０分ほど歩くと二つ目の岩場がある。ここが天狗岩である。岩場の頂上からは背後に蕨山方面の展望がいい。天狗岩をあとに前武川岳までは林の中の急登でフェンス沿いに登る。前武川岳がはるか遠くに見えるが辛抱して登ると傾斜が緩くなり前武川岳に着く。ここにはベンチがあり、休憩にいい場所である。右折すると伊豆ヶ岳に行くことができる。直進して武川岳に向かう。一旦下って急登すると武川岳である。

新道コースのコースタイム
名郷名バス停―３分―西山荘―
―１時間３０分―天狗岩―４０分―
前武川岳―２０分―武川岳

武川岳から伊豆ヶ岳へ

武川岳から一旦下って登り返すと前武川岳である。前武川岳は全く展望はない。左折して山伏峠へ向かう。とにかくひたすら下る。山伏峠から北に向かうと県立名栗げんきプラザに行くことができる。伊豆ヶ岳へは直進する。ここからの登りはかなりきつい。鳥居をくぐり石の祠の側を登って行く。途中、階段がある。やがて伊豆ヶ岳の山頂に着く。伊豆ヶ岳山頂は３６０度の絶景である。伊豆半島まで展望でいるため伊豆ヶ岳という山名が付いたとの説があるくらいである。伊豆ヶ岳からは正丸駅へ向かってくだる。

武川岳から伊豆ヶ岳へのコースタイム
武川岳―１５分―前武川岳―７５分―
―山伏峠―５０分―伊豆ヶ岳―８５分―
―正丸駅



【益田光男　画】

No046

塚山（つかやま）

標高
△953.9m
N360627
E1385735

2012,02,05
日帰り
地　図
1/25,000
「万場」

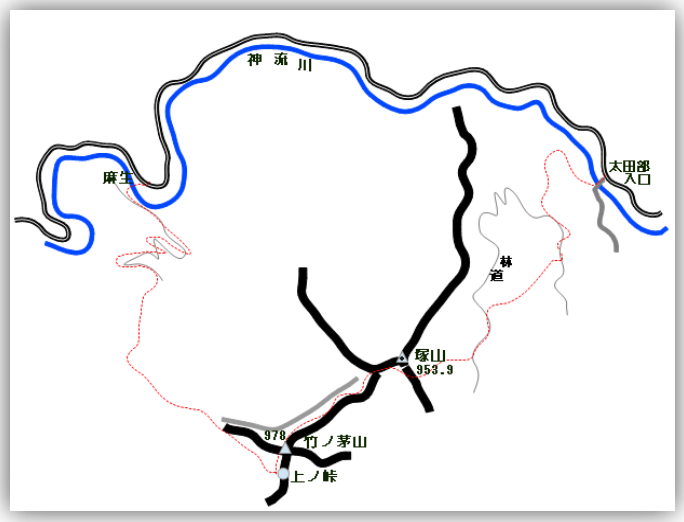
埼玉一〇〇名山選定調査を兼ね、埼玉・群馬県境の「塚山」に二六名で出かけた。本庄児玉インター経由で群馬県との県境を走る国道４６２号を利用し、神流川沿いを下久保ダムに向かう。

ダム湖にかかる秩父・太田部集落入口の橋で下車。リーダーの説明では埼玉の山ガイドに掲載されていない山で、冬の藪漕ぎも楽しめるとのこと。参加者全員興味津々！山斜面は雪化粧している。ダム建設補償の為であろう家々が山沿いにへばりつくように点在している。標高三一四ｍにある「梁場の碑」から登山を開始する。いきなり急登。雪の被る杉植林の作業道を喘ぎながら相見集落を目指す。数件の繭小屋の廃屋を横目に林道に出て、吉田太田部公民館前に到着。凍結で水道が使えなく水汲みの台車を押す地元の女性に出会う。親切に周辺の山の注意と励ましを受ける。「私は若いころに穂高の山小屋でアルバイトしてたのよ」と話されたのが心地良い。十八神社の神楽舞台の脇から塚山古墳群入口を目指す。雪にシカや小動物の足跡がくっきり残る凍った作業道の急登が続く。

立休みを繰り返しながら１時間の苦闘で古墳群入口の標識が待っていた。雪道が続くが風のないことに感謝。頂上への稜線の手前、標高７００ｍのあたりに小さな古墳らしい盛土が杉林の中に点在している。１５００年前なぜこんな場所に「古墳が？」と思わざるを得ない。頂上直下の稜線に出ると視界が開け頂上は雪に覆われていた。秩父の主峰「武甲山」が雪に映えて美しい。風のない雪の山頂でゆっくり食事をとり、事前に数度も下見をしていただいたリーダーの先導で藪漕ぎ下山の開始。いきなり急坂の稜線下山で雪に足を取られたり、登り返しの連

続に四苦八苦。しかし枯れ枝の重なりの上に雪が積りやわらかいクッションで心地よい。凍りついた獣道斜面の歩行は慎重さを要求するが冬山訓練にちょうど良い。**木洩れ日**　が美しい冬の尾根道の藪漕ぎは夏に比較し安心して進める。群馬県の災害用電波中継局「万場中継局」のある竹ノ茅山（９７８ｍ）から見る塚山は雪に映えて美しい。リーダー提案の上ノ峠まで標高差８０ｍ直下下山は本日のハイライト。声を掛け合っての楽しい挑戦でした。バスの待つ麻生橋（群馬県側）までの長い林道は北斜面にあり深いパウダースノーの雪中行進でしたが、雪遊びや下山してきたルートなどを振り返る余裕で予定時間に到着。

（倉重裕一　記）



参　加　者

◎大瀧正己、佐藤　新、小澤紀行、小澤三枝子、互　茂子、
清水順子、荻原章子、浅田良一、新井藤代、安才冨美代、
内田克己、榎原忠雄、神尾ますみ、鹿野紀彦、島　博子、
和田厚子、高木幸代、高橋八重子、豊田孝道、広川ふじ子、
益田光男、松田昭子、森田憲子、山本富枝、松本文男、倉重裕一、
計 26 名

コースタイム

本庄児玉 IC=下久保ダム・太田部入口―60 分―十八神社―35 分―
―林道出合―20 分塚山古墳群入口―50 分―塚山―60 分―
―竹ノ茅山―20 分-上ノ峠―80 分―麻生＝本庄児玉 IC=大宮

No047
No027

丸山～日向山

（まるやま～ひなたやま）

丸山
△960.3m
N355919
E1390935
日向山
633m
N355921
E1390759
2014,04,19
日帰り
地図
1/25,000
「正丸峠」

桜の季節に、展望では奥武蔵随一という丸山から、花と果樹で名高い日向山へ一周した。

西武芦ヶ久保駅から横瀬川を渡り、国道を右へしばらく歩く。左右の山は芽吹き始めた木々の中に桜の花が混じり淡い色合いがとても美しい。そして民家の庭も、紅白の花桃、黄色の、れんぎょう、やまぶき、白の、ゆきやなぎ等々、色とりどりの花木が満開である。

赤谷集落から「大野峠・丸山」の道標に従い沢沿いの道に入る。鳥の囀りが絶えず聞こえ、リスも見かけた。丸太の橋や飛び石で沢を渡る。路肩に古い石垣が残ってたり、石仏や、「昔道」という道標もあり、古くから利用されていた峠道だったようだ。杉林の急斜面をジグザグに登ると、舗装道路に出る。そこが大野峠で、刈場坂峠から大野峠を経て、丸山、白石峠へ至る「関東ふれあいの道」である。芽吹きはこれからという雑木林の歩きやすい尾根道に入る。このコース、麓からずっと数種類のスミレが沢山咲いていて、目を楽しませてくれる。丸山へ向かう途中のピークでは、笠山・堂平山がすぐ近くに見える。それから、パラグライダーが飛び立つところに出会う。風を受けてフワリと鳥の様に飛んで行く。気持ちいいだろうなとしばし見物する。

丸山の頂上の展望広場には展望台が建っている。これがコンクリート製の、砦のような建物である。３６０度の大パノラマが楽しめるらしいが、あいにく眼前の武甲山も二子山も春霞の中でくっきりとは見えない。うららかな陽射しの中でのんびりと昼食をとる。日向山への道の雑木林では、盛りは過ぎていたがカタクリの花がまだ咲いていた。もう終わっているだろうと思っていたので、見られてうれしい。そして途中ですれ違った人の「桃源郷ですよ」の言葉に期待が高まる。木の子茶屋を過ぎ、日向山への登りの右斜面一帯が満開の桜である。桜の種類も沢山あり色も濃淡さまざまで特に枝垂桜の美しいこと、まさに桃源郷である。ここでのんびりとお花見がしたいと思うが、今回は残念だが一周して先に進む。頂上への道の傍らには、ジュウニヒトエが目につく。里で見るのと違い小さいが、ツンと立ち上がった紫色の花がかわいい。

日向山山頂は雑木林だが、武甲山が真正面に見えるように南側が切り開かれている。帰りは「６番峠・風の道ハイキングコース」を行く。まず尾根伝いに行き、それから急な階段状の道をフェンスに沿って下る。フェンスの向こう側の斜面には、何の果物かわからないが白い花が満

開の果樹園が広がっている。琴平神社からは、風の道コースを行き芦ヶ久保観音を経て芦ヶ久保駅へ。途中、露地やハウスのいちご園があり赤いいちごを横目に、春爛漫の道を下る。この景色も又桃源郷だと思える。
駅前には「道の駅・果樹公園あしがくぼ」があり、多くの人で賑わっていた。

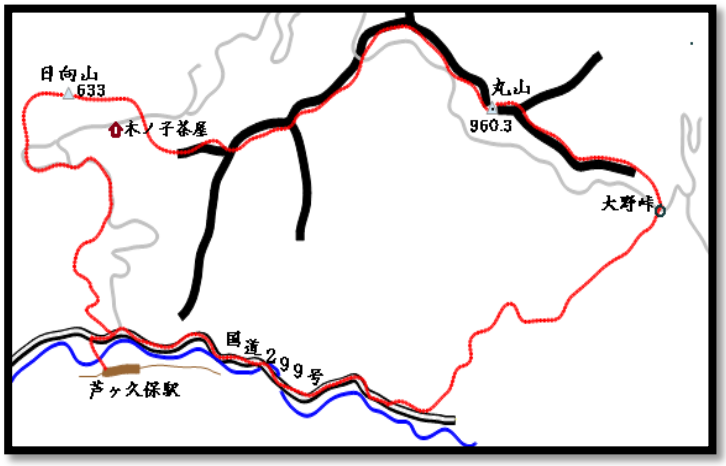
（荻原章子　記）

参　加　者

◎清水順子、浅田良一、今福孝代、荻原章子、黒田拓司、小棚木　魁、小林善行、互茂子、高橋八重子、豊田孝道、野澤六治、早川正雄、松本文男、和田厚子　　計 14 名

コースタイム

芦ヶ久保駅―25 分―赤谷―95 分―
―大野峠―45 分―丸山―85 分―
―日向山―70 分―芦ヶ久保駅



No048

棒ノ嶺（ぼうのみね）

（棒ノ折山）

標高
969m
N355132
E1390919

2013,05,12
日帰り
地　図
1/25,000
「原市場」

埼玉１００山候補の「棒ノ嶺」を埼玉県側からチャレンジする。前日の雨が嘘のように晴れ渡り爽やかな絶好の登山日和となる。西武・飯能駅から名栗行のバス乗車４０分。臨時バスが増発される程、多くの登山者を乗せ「さわらびの湯」に到着。全員で準備体操を済ませ有間ダムの名栗湖に向けきつい車道を進む。新緑の山肌に藤の花の紫が素晴らしい。ダムを渡り湖沿いに登山口へ向かうと、途中の駐車スペースに自家用車が沢山停めてある。おそらく頂上は沢山のハイカーで賑わっていると予想された。橋を渡ると白谷沢の登山口だ。登山口にある「白谷の泉」はなぜか涸れていた。いよいよ登山道に入る。沢沿いの登山道は狭く切り立ち急に高度を上げて行く。昨夜の雨で登山道の岩場は滑りそうで注意しながら進む。４０分程で「藤懸の滝」に到着。いよいよ道は沢に降りる。以前、沢を嫌って迂回できると勘違いしそうになった危険なルートは、進入禁止の大きな標識とロープが張ってあった。沢の流れを左右に渡り変えながら岸壁が迫る峡谷を抜ける。次に「天狗の滝」を左から抜けてさらに狭まる峡谷を滑らないように抜けると、鎖の付いた岩場の階段が現れる。注意深く登り切ると「白孔雀の滝」の落ち口に到着する。狭い場所であるが鎖越しに覗き込むことが出来る。後から続く“山ガール”達の歓声にうらやましさ？？？を感じた。登山口から７５分。林道大名栗線に飛び出す。東屋があり小休止。気づくと一面“ひいらぎ草”の群落で皆小躍りしてカメラタイム。再スタートですぐ木止めされた急登が現れ大きく左に迂回しながら息を切らして「岩茸石」の稜線に出る。左に折れると、稜線伝いに「権次入峠（ごんじりとうげ）」まで一部荒れた木段交じりの急登がまたさらに続く。つらい登りだ。権次入峠は東京都側の黒山からくるルートと合流する峠である。頂上へは右方向に進む。峠の木立の間から飯能の街並みが見え、しばらく平坦な新緑のイロハカエデのトンネルの稜線を進む。秋の紅葉はまた素晴らしいだろうと感じた。いよいよ最後の急登の木の階段が頂上まで続くのだが、白いテープが張られていて、登山道養生中であった。そのため、脇の樹林帯を伐採し仮道が造られていたが、連日多くの登山者が訪れるのか、踏み固められ非常に荒れ始めていた。驚いたことに、あの山を荒らす７００人参加の“トレイルラン”の大会が頂上折り返しで開催されていて、我々登山者を蹴散らすように駆け登り、

駆け下りてゆく姿に山が泣いているように感じてならなかった。自然破壊である。

広い山頂には案の定、沢山の登山者が休息を取っていた。山頂の広く北に開けた眺望は素晴らしい。下山は「岩茸石」まで同じ道を戻り、岩の左を巻きながら滝ノ平尾根を降りる。３度林道と交差。静かな植林と雑木林の山道はアップダウンを繰り返しながら標高を下げてゆく。迷うことはない。ゴールの「さわらびの湯」に近づくにつれ、山道がさらに急坂となり、非常に注意を要した。下山完了に皆安堵の笑顔があった。

（倉重裕一　記）

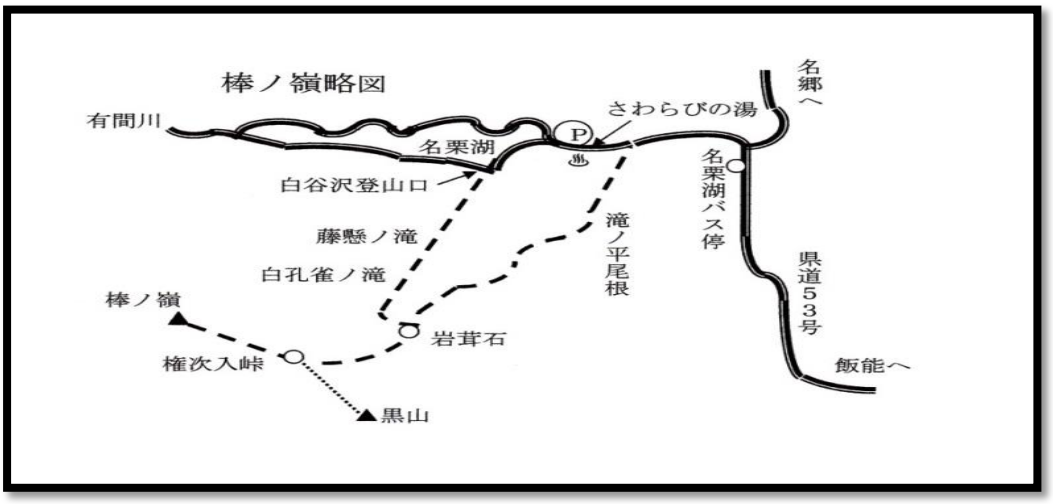
参　加　者

◎本島　健、豊田孝道、山崎　忠、浅田良一、藤田喜久子、石塚嘉子、西片　昇、熊谷裕子、高橋八重子、小林善行、力丸忠夫、松田昭子、荻原章子、道江伸枝、倉重裕一

計 15 名

コースタイム

西武飯能＝(バス)＝さわらびの湯―20 分――白谷沢登山口－30 分－藤懸の滝-20 分――クサリ場-白孔雀滝-15 分－東屋-岩茸岩-30 分－―権次入峠 20 分－棒の嶺――15 分－岩茸岩-―(滝ノ平尾根)－130 分－さわらびの湯＝飯能



No049

毘沙門山（びしゃもんさん）

（白石山）

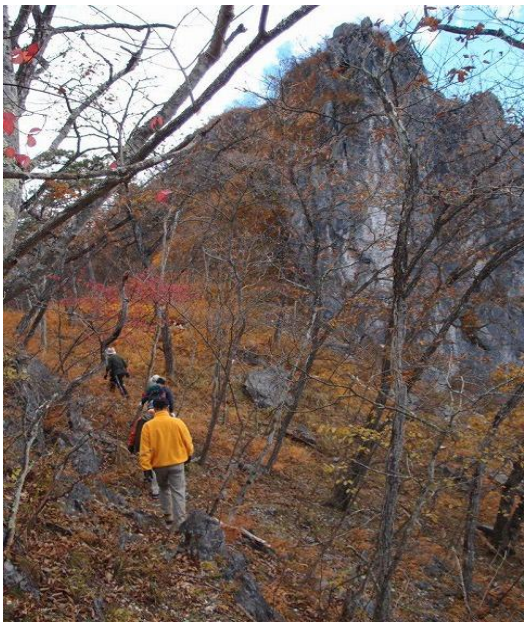
標高
△996.8m
N360258
E1385501

2012,11,10
日帰り
地　図
1/25,000
「長又」

毘沙門山は小鹿野町にある標高９９７ｍの山で、白石山とも呼ばれています。１９９０年代半ばまでは、倉尾鉱山が石灰石を採掘していたため、全山入山禁止となっていました。このため南面は痛々しい採掘跡が残り、今でも立入禁止となっています。今回、私たちは北側から周遊するコースを歩きましたが、わずかに踏み跡があるだけで登山道はありませんでした。

国道２８２号線で合角ダムを渡り、平成の名水で知られる毘沙門水を過ぎると、新旧の「要トンネル」が並んでいます。この手前を左折して林道を行くと、ほどなく車２～３台が止められる広場に突き当たります。広場の隅には〔新榛名線１５４〕の黄色い杭があり、行く手を見上げるとその鉄塔が確認できました。

古びた木橋で長合沢を渡り、すぐにパイプで造られた橋で右岸へ渡り返します。ここから、植林で覆われた巡視路をジグザグに登ります。いきなりの急登で十分ウォーミングアップができたころ、作業道に合流して左方向に向かいます。緩やかな登りを行くと「１５４鉄塔」が現われ、その先の右手に「見晴岩」がありました。ここに上がると北側の展望が開け、父不見山や城峯山が近くにはっきり見えました。さらに進むと壊れた作業小屋が現われ、ここから左斜め方向へ踏み跡を下ります。倒木の多い急な斜面を標高差で１００ｍほど下ると長合沢に降り立ちます。左岸に渡って踏み跡をトラバース気味に高巻くと、やがて沢が詰まって明るい「直登尾根」の末端に突き当たりました。ここから尾根伝いに３００ｍの急登が始まり、１時間弱のアルバイトを強いられます。岩混じりの自然林を木や根を頼りに攀じ登ると、次は薄暗い植林の急登になります。たっぷり汗をかいたところで急に空が開け、別世界のような主稜線の広場が現われました。正面は明るい雑木林で、左手に大きな岩の山頂が見えます。やせ尾根の岩稜を右側から巻いて、草付きの岩場を３０ｍほど登ると山頂です。



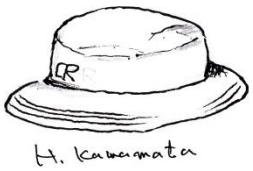
狭い頂上にはポツンと三角点があり、遮るもののない３６０度の展望が待っていました。西には大きく両神山がそびえ、時計回りに二子山、西上州、赤城山、白根山、男体山、筑波山、奥武蔵、武甲山、雲取山、和名倉山、奥秩父の山々・・・と、いつまでも飽きない眺望が広がります。山頂の先を東側へ降りると〔危険・立入禁止〕の看板とロープがありました。景色を十分堪能したら下山開始です。岩場を慎重に降りて、先ほどの広場から西に向かいます。行く手の小高いピークを右側に巻くと、右手が植林で左手が自然林の尾根になります。ここから１５０ｍもある急激な下りを、立ち木や岩を頼りに下ります。今日一番の緊張に汗が噴き

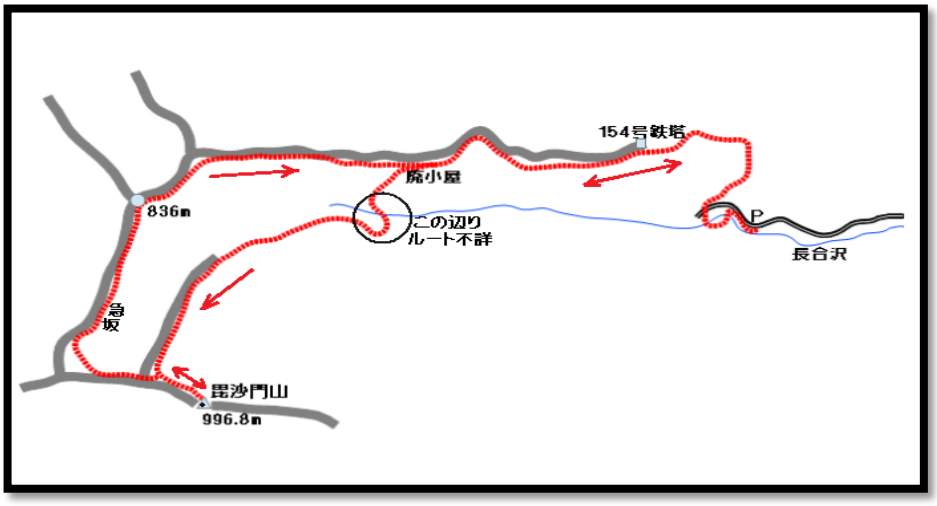
出したところで平坦になりました。一息ついて緩い登りを行くと８３６ｍ地点に着きました。ここは間違いやすいポイントですが右方向へ向かいます。しばらく進むと通行止めの標があり、ここも右側へ尾根を下ります。さらに進むと岩のあるピークとなり、ここは真っ直ぐ行きがちですが、右側の植林の中を下ります。ここから先は確かな踏み跡があり、やがて作業道に合流し、作業小屋跡に着きました。あとは朝来た道を戻ります。見晴岩・鉄塔と作業道を戻り、右へ巡視路を降りて広場まで帰りました。

（清水　博　記）

参　加　者
◎大瀧正己、小澤紀行、
互　茂子、床次泰文、
森田憲子、清水　博
計６名

コースタイム
駐車広場―50 分―作業小屋跡―
―80 分―毘沙門山・山頂―40 分
―836ｍ地点―35 分―作業小屋跡
―35 分―駐車広場





No050

城峯山（じょうみねさん）

標高
△1037.7m
N360551
E1390028

2012,12,23
日帰り
地　図
1/25,000
「鬼石」

秩父盆地の北方に位置する城峰山は展望台も兼ねる電波塔があり周囲の山々からも良く確認できる。登山道は石間川に沿って延びる林道最奥の民家横を抜けて山頂を目指すコース、手前の中郷登山口からのコース等もあるが、今回は西門平から関東ふれあいの道へと入る。

前日の雨で足元が懸念されたが湿り気が全く無く、良く踏まれた道は落ち葉でふかふかと柔らかく心地良い。迷う事も無く植林地、そして自然林を進み二度林道を渡り、送電線の下を潜り鍵掛城を通過すれば、二時間程で一等三角点が置かれる城峰山頂上に到着できる。

遠目で確認した以上に立派な電波塔を登れば視界良好で両神山、八ヶ岳、浅間山、谷川連邦等くっきり見えた。日々山に親しんでいる仲間達が感嘆する程の大展望に満足しながらランチタイムを楽しむ。

帰路は北に雑木林の尾根道を進むが山頂直下は丸太の階段で、凍結時にはアイゼンが無ければ歩けない程の急斜面となり、歩幅を狭めて恐る恐る下る。

西に向きを変えれば間もなく日本武尊が祀られる城峰神社に着く。そこには金色の目をしたオオカミの狛犬が迫力のある風貌で待ち構えていた。

見上げれば城峰山頂のどっしりした電波塔が目に入る。

☆

毎年五月三日は春季大祭(山開き)で、お神楽の奉納があるという。

神社の境内は広々としていてキャンプ場もあり、丸太で仕切られたテントサイトが二十程並んでいる。その脇に沿って進むと十分程で表参道入り口に着き、関東ふれあいの道を辿り西門平に戻る。

☆

この地は将門が天慶の乱（九百四十年頃）で破れて敗走し、石間ヶ岳に砦を築いた。その後にこの山を城峰山と呼ばれるようになった。

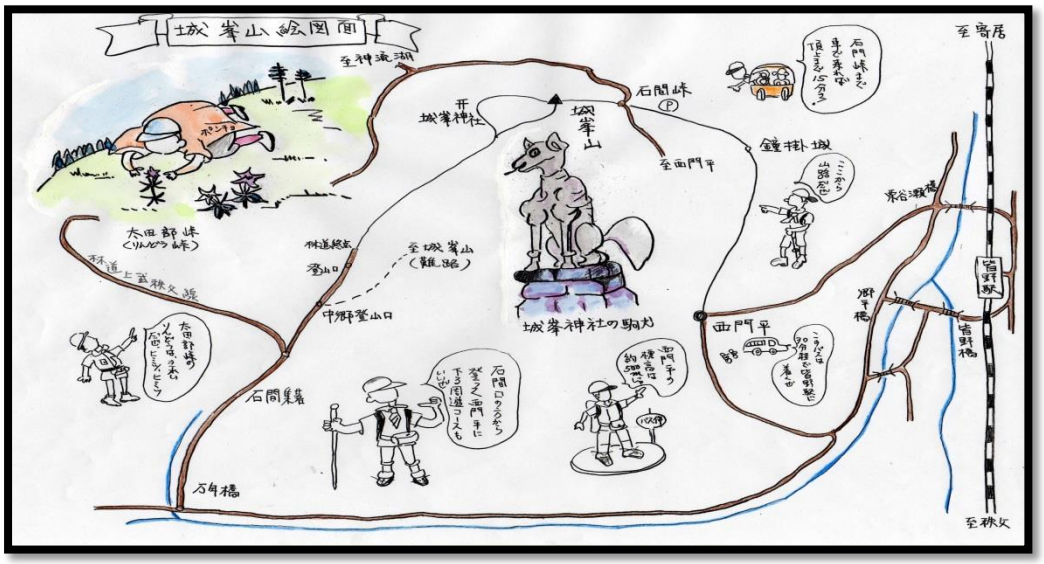
また敵方に密通した疑いで将門は愛妾桔梗を殺害したが、以来城峰山に桔梗の花が咲かないといわれていると山岳ガイドに記されていた。

又明治十七年、困窮に耐えかねた農民が、減税や借金棒引きを求め秩父困民党を結成し、武装蜂起した秩父事件があったが、石間川沿いには党副総理加藤職平の墓や生家、乙副大隊長落合寅市の生家が現存しているという。歴史に興味のある方には見所が多そうだ。

☆

厳冬期は展望を楽しめ、春を待てば山頂

付近にミツバツツジ、将門隠れ岩付近にアカヤシオが咲き、城峰神社付近ではヒトリシズカ、ニリンソウ、アズマイチゲ等も見られるという。
季節を変え、コースも変えて再訪したい。
（高橋八重子・互　茂子　記）



【城峯神社】

参　加　者
◎清水順子、山本富枝、首藤恒子、浜田茂子、塩崎孝尋、豊田孝道、高橋八重子、本島　健、野澤六治青木道子、上原貞幸、西方　昇、岡田純子、浅田良一、互　茂子、本島由利子、神尾ますみ、榎原忠雄、鹿野紀彦、内田克己、大室光江　　計 21 名

コースタイム
皆野＝西門平―130 分―鍵掛城―40 分―
―城峯山―120 分―城峯神社―
―西門平＝皆野

No052

父不見山（ててみえずやま）

標高
1047m
N360538
E1385459

2013,03,17
日帰り
地　図
1/25,000
「万場」

上武国境の父不見山は、多くのガイドブックでは群馬県側からの登山が紹介されている。埼玉県側は植林が多く、四季折々の風情は雑木林が主体の群馬県側の方が優っている、というのがその理由のようだ。しかし今回は、埼玉百山の一峰ということで、あえて埼玉県側からの登山を試みた。

長沢（ちょうざわ）バス停からは集落の間をしばらく歩く。最後の民家を過ぎると、軽トラックが入れるくらいの作業道となって、沢沿いに登っていく。やがてこの道は右に折れて、山腹を巻くような道になるのだが、父不見山を示す指導標がこの作業道を指している。なんとも紛らわしい表示だが、正しい登山道はここで作業道を離れ直進して沢を渡る。ここは時期によってはボサが茂り、道がわかりにくいかもしれない。沢を飛び石伝いに渡ると、後は緩やかに坂丸峠に向かって登っていく。途中父不見山フラワーラインという林道を横切り、バス停から一時間ほどで、植林の中の峠に到着する。

ここからは県境の尾根をゆっくりと辿っていく。なるほど、見事に埼玉県側は植林、群馬県側は自然林だ。穏やかな道を登って行くと、今日の最高峰、長久保の頭を経て、峠から一時間足らずで父不見山頂上に着いた。木の葉の落ちた頂上は、日当たりもよく、実にのどかだ。ただ、県境縦走路にはずっとバイクの轍が刻まれており、今後雨が降れば急斜面の轍跡に雨水が流れ、流水溝のようになって、登山道が破壊されるのではと危惧される。

昼食後、頂上からは長久保の頭まで戻り、南に向かう尾根に入る。この尾根はつい最近始まったばかりという風情の伐採が行われており、今までになかった好展望の尾根に変身していた。御荷鉾山をはじめとする西上州の山々や城峯山が近い。目を転じれば二子山や両神山が岩峰を峙たせている。ただし、足元のこの尾根には、材木運び出しのためのトラック道が縦横に走り、痛々しい山肌を晒している。尾根を下って行くと、今朝横切ったフラワーラインに再び出てこれを渡り、稜線伝いのやや心許ない踏み跡に入っていく。ちょっとしたヤブや岩がちな道を降りていくと地形図にある寺平と八谷（やがい）を結ぶ道にでた。もう八谷のバス停は近いのだが、実際の道は地形図と異なり、７４４メートル標高点から南に伸びる尾根の西側を下って、標高６００メートル圏でまっすぐ登山道記号に向

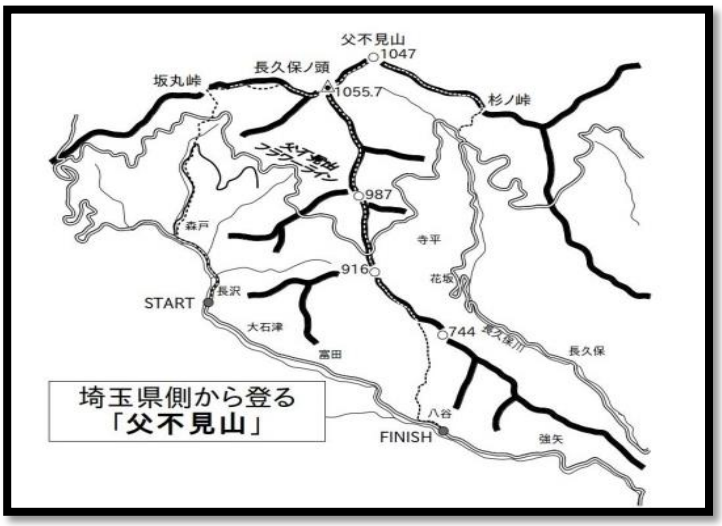
かって下降して地図上の道に出会い、八谷へと降りていく。他の登山道記号は、富田へ降りていく巻道以外、実在していないようだ。ともあれ、八谷でバス通りに降り立ち、わずかに東へ歩けばバス停に着いた。実働四時間ほどの変化のあるハイキングコースであった。

一方、この父不見山に最も簡単に登頂するには、山頂東側の杉ノ峠にフラワーラインから登り、国境稜線を辿ればよい。自家用車なら登山口近くに駐車し、1時間ほどで頂上を往復できる。あるいは頂上から長久保の頭に向かい、南尾根を下りフラワーラインを歩いて駐車地点に戻るという手もある。いずれにしても、この父不見山は埼玉県側からアプローチすれば、南向きの山肌を歩くので、凍結の心配も少なく、早春や晩秋のひだまりハイキングにもってこいの山だ。

（大和田　良一　記）

参　加　者
◎大和田良一、
他本部会員 11 名

コースタイム」
長沢バス停－60 分－坂丸峠－
－40 分－長久保ノ頭－15 分－
－父不見山－15 分－長久保ノ頭--
40 分－林道－70 分－八谷バス停
参考コースタイム
林道（10 分）杉ノ峠（20 分）父不見山（10 分）杉ノ峠（5 分）林道



No054

秩父御岳山（ちちぶおんたけさん）

標高
△1080.4m
N355800
E1385634

2011,12,10
日帰り
地　図
1/25,000
「三峰」

峰口駅から車道を右に行く。歩道には大きな桜の木が十数本植えてあり、その先で荒川を白川橋で渡ります。そのすぐ突き当りが国道１４０号線で、右折します。数十メートル行くと左側に県道３７号線「両神・小鹿野・吉田」線があり、こちらの道に入ります。このあたりは秩父往還・贄川宿といわれる地域です。ここには立派な贄川宿観光トイレがありました。

ここから「御岳山登山口・常明寺」の標識通り左折して舗装された林道を登って行くと5分ほどで再び同じ標識があり左折して登山道になりました。雨水でえぐられU字型になった道を登って行きました。途中、石の急階段となって、夏だと大汗をかくところである。さらにジグザグに急登すると樹林の一部が開けていて熊倉山・武甲山がよく見える。東電・三峰線２６号鉄塔からは大きくジグザグになり、２０分ほどで尾根上に出ました。ここからナラの樹林帯をまっすぐ登ることになります。すると展望地に出て、はるか下方に荒川の向こうに三峰口駅の青い屋根が見えました。その向こうの上方には妙法ヶ岳が確認できました。

登るにしたがって昨日の初雪で雪景色となり、標高８００メートルあたりからは雪道になった。１０センチくらい積もった雪上を歩くと、サクサク、ザクザクといった音は心地よく感じる。やや平坦な尾根の南面を歩きが続き、やっと、御岳山への標識のあるところから北面歩きとなる。また同じような標識から南面歩きとなり、まもなく右から連なる主尾根と思われるような大きな尾根に上がり、直角に左折する。やや急な尾根を登るとタツミチで、右に行くと猪狩山（８２２メートル）を越えて古池に向かうことができる。左折し、やや急坂を登ると、分岐に着き、左に行くと大滝・強石方面で下山はこのコースを行きます。この場所には「落合コースは閉鎖になっています。大変危険ですのでコース内に絶対立ち入らないでください。大規模な山崩れが発生したため」との注意書きがありました。御岳山頂上は直進してすぐでした。ここで昼食。頂上からは北側に両神山、二子山や西上州の山々、遠くは浅間山、双耳峰の燧ヶ岳まで望め、南側は雲取山、飛龍山、和名倉山など絶景でした。

下りは先ほどの分岐まで戻り「大滝・強石」方面へ向かいました。針葉樹の中をぐんぐん下って行き、杉ノ峠から林間の道を強石集落まで下った。国道を歩いて強石バス停を過ぎ、白川橋を渡って無事三峰口駅に到着。

（益田光男　記）

参　加　者
益田光男、大和田良一、
高木幸代、大滝　悟
清水　博　　計５名

コースタイム
三峰口―10 分―白川橋―5 分―
―贄川―５分―登山道取付点―
―60 分―タツミチ－30 分―
―秩父御岳山―80 分―杉ノ峠―
―75 分―白川橋―5 分―三峰口

《参考資料》

秩父往還

秩父往還（道）とは甲斐の国、小原西（甲州市）から笛吹川に沿って上り、雁坂嶺を越え、栃本から大宮（秩父市）までの３７里あまりの街道です。

甲州街道の裏街道が青梅街道で、その裏街道が秩父往還と言われています。

（秩父往還・太田巌著）

その一部を紹介いたします。

〈贄川（にえがわ）宿〉

秩父御岳山を登るには三峰口駅から国道１４０号線・県道３７号線に入りますが、そのすぐ右に「贄川宿」の案内板があります。そこに「秩父市に次ぐ秩父甲州往還の宿場町で三峰神社講中、諸国商人衆の定宿として江戸初期からにぎわっていた。また六斎市や、雛市も開かれた」とある。また太田巌著によると、江戸時代には２０軒もの家が並んでおりその半数が宿屋であったとのこと。

〈猪鼻・土壇場地蔵の由来〉

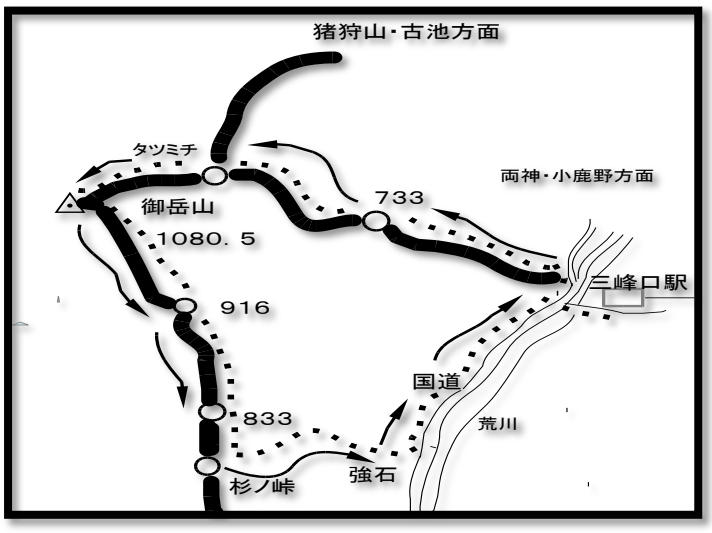
江戸時代、大滝村は天領でした。ここは秩父往還沿いの大滝村一番地の入口です。そして、罪人の処刑場でした。罪人は土壇場で処刑され・・・・たとえ罪人でも死すれば仏界に入るので・・・・地蔵尊を祀って・・・・」と案内板にあります。

〈強石（こわいし）〉

巨岩・大石がそばだっている意味である。今の強石は３０軒ほどだが往時は８０軒あり、食料、雑貨、酒屋、駐在所、宿屋も繁盛していた。

〈杉ノ峠〉

旧秩父往還で強石からジグザグに急登１時間、下り落合へ４０分。



No056

天理岳（てんりだけ）

標高
1150m
N360203
E1385150

2012,11,03
日帰り
地　図
1/25,000
「両神山」

良く晴れた十一月の青空を眺めながら秩父、両神山の東の尾根続きにある天理岳に行った。早朝に日向大谷の集落に入ったが、駐車場はすでに満車で路肩に停める。ほとんどの人たちは会所を経て清滝小屋から両神山に行くのだろう。

私たちは道路脇の階段を上り両神山荘の前を横切り植林帯に入った。ここから楢尾沢峠まではトラバースを交えながらの急登だ。楢尾沢峠は西に両神山の前東岳、東に両詰山に続く天武将尾根上にある。

峠に着くと「この道は登山道として管理されていません」という立て看板の後ろに天理岳への道標があった。

最初はなだらかな尾根に乗ったように思ったがすぐに急な岩稜に代わる。最初の岩稜は右に巻く踏み跡があったが岩を直登する。真っ赤に染まった満天星に埋もれるようにある岩峰を二つ越し少しなだらになった所で昼食にする。北側にはオドケ山、西御荷鉾山～東御荷鉾山、雨降山毘沙門山が見える。

１０８３ｍ三角点を通過し帰路の長尾沢への下降路を気にしながら尾根道を歩くが下山の踏み跡はっきり特定できない。１０ｍほどのクサリを登ると天理岳の頂上に出た。頂上は二峰に分かれていて小祠が置かれてあり、枯れ木に天理岳と書かれた小さなプレートがついていた。前東岳に続く天武将尾根は優雅に手招きをしているように見えた。

下山は南に延びる小尾根の少し先１０８３ｍピーク手前から、倒木や枯草の中をまっしぐらに長尾沢出合をめざした。左右に沢形が出て現在地の確認が

はっきりすると間もなく二俣にある諏訪神社に着いた。

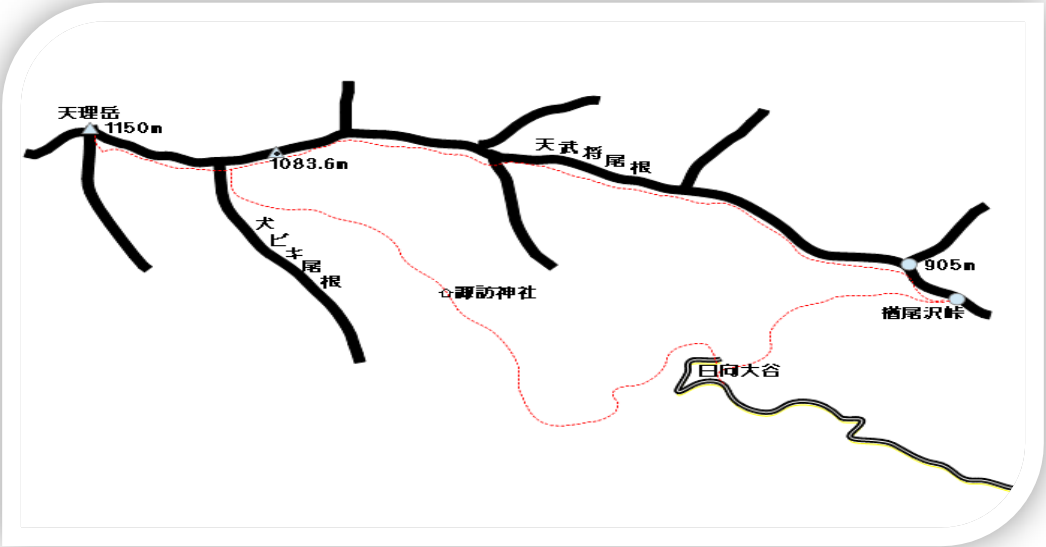
諏訪神社は骨組みだけだ。一休みして在りし日の神社を思い浮かべる。周りには何本もの踏み跡が交錯するが一番明瞭なところを辿ると登山道になった。

両神山からの登山道を合わせると間もなく日向大谷の集落にもどった。

（田中比佐子　記）

参 加 者
◎佐藤(新)、大瀧正己
互 茂子　森田憲子、広川ふじ子
田中比佐子　　計 6 名

コースタイム
日向大谷―60 分―楢尾沢峠―
―70 分―1050m―45 分―
―天理岳―80 分－諏訪神社－
―両神山への登山道―45 分―
―日向大谷



【楢尾沢峠の分岐】

No057

小鹿野・二子山

（おがの・ふたごやま）

標高
△1165.8m
N360411
E1385149

2013,06,02
日帰り
マイカー

地　図
1/25,000
「両神山」

駐車スペースはすでに満杯となっていたので余裕のある路肩を見つけて車を止める。天気も良いハイキング日和となってきた。登山口を出発してアッという間に起点の股峠に着く。標柱には直進（下り）で坂本地区へ、右折で西岳へ、左折で東岳となっている。まず東岳方向に足を向ける。すぐに崖となり連続急登の始まりである。岩に手を掛け、足を掛け、小木の幹や根っこに掴まり３点確保で高度を上げる。中間点あたりの難所には新たに６センチ四方の金属製のステップが取り付けられていて助かる。だんだんと展望もきくようになり、ヤマツツジの花も残ったりしていて気分も和らぐ。さらに上へクサリにも助けられ崖を一気に登り山頂に出る。

３６０度の展望にバンザイ！である。南側方向目の前に両神山が。その奥に奥秩父連峰の山並みが雲取山も見える。西方向はこれから向かう。

西岳とその奥に群馬県境の峰々が、狭い山頂ではあるが足元にはイワシモツケが咲き誇っていた。今度は登って来た同じルートの下りで慎重に行動する。

股峠には西岳への案内板が立っている。これからのルートを確認して出発。中間点あたりで分岐となり一般コースと正面の岩稜を上る上級コースに分かれる道である。西岳の北面の裾を巻くように進む一般コースを選択。岩も多くなりクサリにも助けられながら両手を使って急な登りを一気に稜線まで登る。ほどなく西岳山頂に到着。ここも３６０度の展望で両神山や群馬県境の山々と御荷鉾山方面の近くに父不見山が望める。足下には志賀

【東　　岳】

坂峠越えの国道と坂本の人家も見える。狭い山頂と日当たりを避けて少し下った処で昼食タイムとした。体力をつけて一気に下り股峠経由で登山口に戻る。石灰岩の怪峰「二子山」を最短距離利用で踏破。岩場を登るスリルを味わった楽しい一日でした。

（山崎　忠　記）

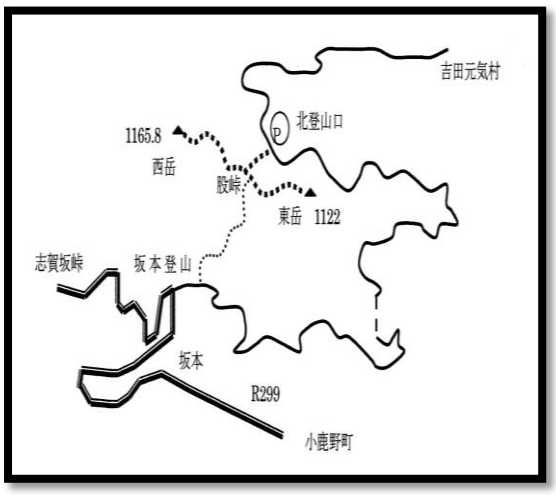
【西　　岳】

※コラム

『石灰岩について』

西岳から望むと、西に採掘でたいらになってしまった叶岳、東には二子山東岳、その先に毘沙門山そして盆地を隔てて武甲山が見える。これらの山は、いずれも石灰岩でできていて、西北西―東南東の方向に一列に並んでいる。ここの石灰岩は、炭酸カルシウムでできた骨格を持つフズリナ類やサンゴ虫など今から3億年前の太古の海（古生代の石灰紀～ペムル紀）に生きていた生物のし死骸が海底に堆積してできた。表面を平らにして磨くと中に模様のある米粒のようなスブリナ（紡錘中）の化石が見られることがあります。参考「埼玉の自然をたずねて」

堀口萬吉監修・築地書館より



参　加　者

◎広川ふじ子、内田克己、大瀧正己、佐藤　新
小澤紀行、小澤三枝子、互　茂子、西片　昇、
野澤六治、松岡茂夫、箕輪ゆり子、
吉野喜八郎,、山崎　忠　　計 13 名

コースタイム

国道 299 号を志賀坂峠手前の
坂本登山口を右折し北登山口駐車場
北登山口―10 分―股峠―30 分―
―東岳―30 分―股峠―45 分―西岳――40 分
―股峠―10 分―北登山口

No058

諏訪山（すわやま）

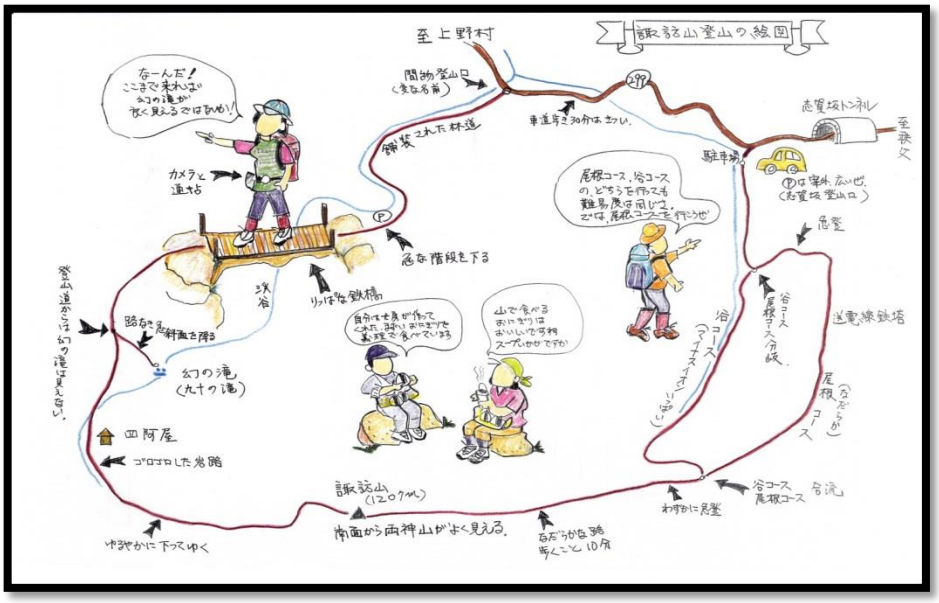
標高
△1207.1m
N360301
E1385005

2011,10,09
日帰り
地　図
1/25,000
「両神山」

秋の日は良く晴れて、歩きはじめたのが十一時頃と云うのに爽やかだ。明日は、メインの両神山に登るので軽いトレーニングのつもりで、ここ諏訪山に登ることにする。

志賀坂トンネル入口脇に駐車。６人で賑やかに登り始める。すぐに、尾根コースと谷コースとに別れるが、かかる時間は大差ないので、尾根コースをたどることにする。ここは、シオジの林で有名というが、どの木がそうなのか、悲しいかな、わからないけれど、コナラ、クヌギ、カエデなどの紅葉が杉の植林と競い合って鮮やかだ。勾配がきつくなり木段に息がはずむ。振り返れば二子山の岩峰がそびえ、西上州の峰々が遥かに連なる。そろそろアゴが出かかった頃、「諏訪山まで４０分」の標識。エ～、まだそんなに、と、愚痴ると仲間が「簡単に標識を信じちゃダメ。あと、１０分だよ」と、おっしゃる。まっこと、少しの登りで「山頂まであと２分」の標識。さあ、登頂はレディーファーストで、とのお言葉に甘えて、女二人がまず山頂へ。古い木の祠のある山頂は、両神山の側が切り開かれ、堂々の鋭鋒を堪能する。下山は間物登山口を目指す。（まもの、とは不思議な地名だが、由来はわからなかった。山頂からはゆるやかに下るが、ゴロゴロした岩道もあり愉しい。東屋が見えてきたあたりで、O氏が、「幻の滝」にご案内するという。登山道からは件の滝は見えないので、ちょっとワイルドな急斜面を下って、白く飛沫をあげる滝を眺める。落差は４０ｍだそうな。登山道に戻ると「九十滝」という標識が。なあんだ・・・。その先に渡登橋という鉄のつり橋が付けられていて、そこからも正面に滝を見ることができた。滝壷へも降りられる道もあるようだったが、我々は間物登山口へ下った。間物からはＲ２９９をひたすら歩き、出発地の志賀坂トンネルへと歩をすすめる。こういう、最後の舗装歩きはきついが、そこは良き仲間、足の重さは口の軽さでカバーして、愉しく締めくくった。その夜の宿はO氏の「酔人山荘」。Ｉ氏の用意してくれた岩魚の塩焼きも香ばしく、宴は果てない・・・。

（互　茂子　記）



【酔人山荘　川俣秀子　画】

【酔人山荘・いろり端】

参　加　者

◎互　茂子　小澤紀行、浅田良一
荻原章子、倉重裕一、益田光男
井上武久　　計７名

コースタイム

志賀坂トンネル登山口―90 分―
―山頂―
―60 分－九十滝―40 分―渡登橋―
―15 分－間物登山口―35 分－
―志賀坂トンネル入り口

No059

瞽女ケ岳（ごぜがたけ）

標高
△1208m
N360012
E1385326

2013,04,20
日帰り
地　図
1/25,000
「長又・三峰」

神山から派出する長大な辺見尾根には、登山道と呼べるような道は無いが、すこぶる魅力的な峰が連なっている。そのひとつである瞽女ヶ岳は、大谷峠の東に位置する双耳峰の岩峰で、埼玉山岳の白眉と言ってもいい秀峰である。登山の適期は晩秋と早春で、夏は不向きである。

山名については、大谷（おおや）集落の千島氏にうかがった。固定された正式な名称は無いとのことだが、山頂直下に落差５０ｍの「瞽女の滝」があることから、便宜上「瞽女ヶ岳」または「瞽女の滝上山」と呼んでいるとのこと。一方、南面の小森側では北峰と南峰が並んで見えることから「双子山」と呼ばれている。

今回は小森側の中尾から南峰に直接突き上げる南西尾根を登り、南峰～北峰～大谷山～大谷峠と縦走し、北面の大谷尾根を下るルートをとった。当コースは登山道や道標の類は一切無いが、藪も薄く、快適に歩くことができる。反面、地形が複雑な箇所があり、地図読みの熟練、またはＧＰＳの携帯が必要である。

【大谷集落より瞽女ヶ岳を望む】

登山口は、中尾の廃林道のゲート脇である。ザレている所から、強引に南西尾根に取り付く。最初のうちは植林の中の急登で、尾根の高みを目指して黙々と登る。高低差にして１００ｍほどであるが、今日の行程の中で最も辛いところだ。植林が尽きると、尾根は平坦になり、明るい雑木林となる。再び急騰となるが、尾根筋が明瞭なので、快適な登りである。ぐんぐんと高度を上げることができる。途中、脆い岩稜や両側が切れた痩せ尾根が出現するが、難しいところはない。

程なくして瞽女ヶ岳南峰（１１９９ｍ）に着く。雑木に囲まれた狭い山頂で展望はないが、北面の傾斜が緩いので、大人数でもゆっくり休める。

主峰である瞽女ヶ岳北峰へは、いったん急降下し、岩稜をたどる。北峰はちょっとした鋭峰で、最後は急登となるが、岩が階段状になっており、快適に登ることができる。この山頂も狭く、雑木に囲まれているが、突出した岩峰なので、両神山や辺見岳がよく見える。標高点はないが、小鹿野町が作成した白図では１２０８ｍの標高が与えられている。

北峰の下りは特に急で、両側が切れている箇所もあるので注意を要する。立ち木につかまりながら慎重に下る。ちょうど瞽女の滝の上あたりであろうか、大谷側が、すっぱりと切れ落ちている。

しかしながら、それもつかの間、やがて尾根は緩く穏やかになり、ひと登りで大谷山（１１９５・２ｍ）に着く。今日の行程で唯一の三角点がある。

ここからは緩いくだりで、大岩を越すと山ノ神が祭ってある大谷峠に着く。

【山頂直下の稜線】

大谷峠道は、白井差峠、三国峠とともに、秩父～中津川～信州佐久を結ぶ街道を構成しており、平安時代以前に成立していたと考えられているが、近年、過疎化や自動車利用により使われなくなり、荒れて、通行が難しくなってしまった。千数百年の歴史ある道が、私たちの時代に消滅してしまうとは何とも悲しい。

大谷峠からは大谷沢の頭まで再び登りとなる。大谷沢の頭は植林に囲まれた小さなピークである。ここから植林地に沿って鋭角に北側に向い、大谷尾根に乗る。よく地図を確認したいところだ。

大谷尾根は大谷側が植林、北西面の瀬ノ沢側が自然林になっているので、この境界をはずさないように下る。やがて、山ノ神が祭られているところに出る。そこから大谷側へ植林の中の急斜面を強引に下ると大谷集落に出ることができる。

大谷集落は、早春のころであれば桜や梅の花に囲まれたほんとうに美しい山里だ。桜の花を東京の市場に出荷しているそうだ。瞽女ヶ岳も意外に近くに見える。マイクロバスや数台の車が駐車できるスペースもある。

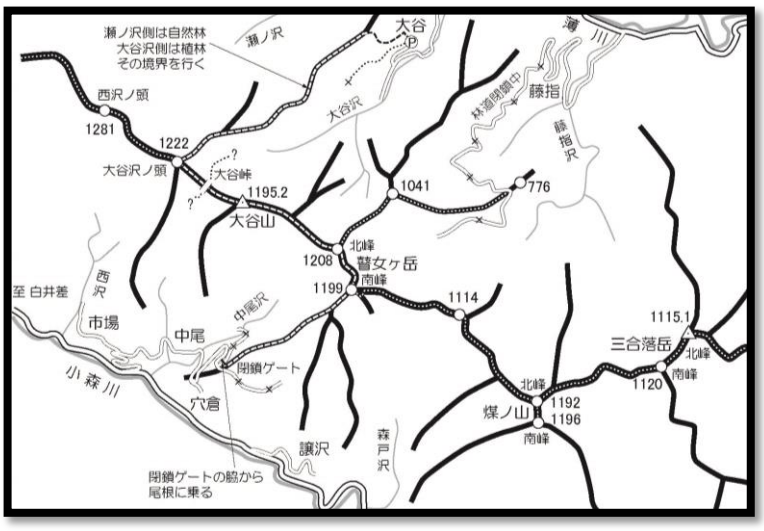
（高田良一　記）

参　加　者

◎高田良一、阿部米子、小澤三枝子、杉原三千代、広川ふじ子、箕輪ゆり子、益田光男、吉野喜八郎、　計８名

コースタイム

大宮＝小森中尾―80 分―
―瞽女ヶ岳南峰―30 分―
―瞽女ヶ岳北峰―
―40 分―大谷山―30 分―大谷峠―
―60 分―大谷＝(バス)＝大宮



No060
No051

有間山～蕨山

（ありまやま～わらびやま）

有間山
△1213.5m
N355312
E1390657
2013,03,17
日帰り
地　図
1/25,000
「武蔵日原」

蕨山
1044m
N355347
E1390756
地図
1/25,000
「原市場」

有間山は一般的には**橋小屋ノ頭**を指すことが多い。その頂上には立派な「有間山」の山名板がある。しかし、その最高点はタタラノ頭の三角点峰である。今回はタタラノ頭を有間山として落合から直接タタラノ頭へ登り上げている長く踏み跡の無いバラ尾根を登り、蕨山、藤棚山へと回り、大ヨケノ頭から落合へ下る周回コースを歩く。ＣＬ曰く、少々ワイルドなコースとのこと。

早春の一日、晴天で風も無く、絶好の登山日和に恵まれる。仲間八名、今日のコースを確認後、ゆっくり歩き出す。すぐ道のない藪の急斜面に取り付く。掴まるものといえばススキの枯枝、とても頼りない。しかも足元の敷き詰められたような枯葉は、滑りやすく、少々ワイルドどころか充分にワイルドだ。３０分ほどの登りでスギやヒノキに囲まれた小ピークに上がり、ほっと一息つく。「ここからは少し楽になりますよ」というＣＬの言葉に期待する間もなく、又もや急登の連続となる。でもメンバーの楽しい会話に後押しされ、心が和み足も進む。上を臨みながらアルバイト２時間。急登もようやく一段落、緩やかな道なき道をのんびりと歩を進める。更に二度林道を横切り、最後の急登を少々頑張ると、今日の最大の目的地、有間山最高地点タタラノ頭に到着。２時間５０分、長かったバラ尾根を登り切った達成感に浸る。

タタラノ頭は、あまり広くない稜線上にある静かで地味なピークだ。葉を落とした樹幹に「タタラノ頭」と小さな看板が取り付けられている。誰かが有間山と小さく添え書きをしていて、筆者の最高地点へのこだわりを垣間見る。目の前にはこれから行く蕨山の稜線が広がり、周回コースの峰々が続いている。ここからはしっかりとした登山道を歩ける。道を歩ける楽しさを実感。少々の登りも気にならない。まだ少し残雪のある小ピークを幾度か越え、３０分弱で立派な「有間山」の看板のある橋小屋ノ頭に到着。大持山への分岐点でもある。ここが有間山と思って引き返す人が多くいるようだ。これではタタラノ頭が静かなのも頷ける。そして、稜線を東に取り、逆川乗越まで進み、陽だまりでゆっくり昼食を取り、蕨山へと向かう。

蕨山には「本来の山頂」があり、ここが蕨山の最高地点だ。小石がそれらしく積み重ねてあるが、道から外れているので見逃してしまいそうだ。しかし、蕨山展望台はそれより少し低いが、しっかりと蕨山の標識が立っていて、ここからは春霞はあるものの、北には武甲山、武川

岳、伊豆ヶ岳、また南には冬枯れの木々の間から棒ノ嶺もうかがえる。山座同定が楽しめる。蕨山からは徐々に高度を下げながら歩き、藤棚山から最後のピーク大ヨケノ頭へと進み、いよいよ落合へと下る。しかしこのルート、昭文社の地図から外されるほどの大下り。ロープはあるものの慎重さを要す。有間小屋跡まで一気に下り、ほっとして周りを見渡すと、右手に朝登ったバラ尾根が、長々とかつ雄大にタタラノ頭へと続いている。

「これをはじめに見たら登らなかった」と何処かで声がする。改めて今日のコースを振り返り感慨にふける。そしてすぐ落合に至る。

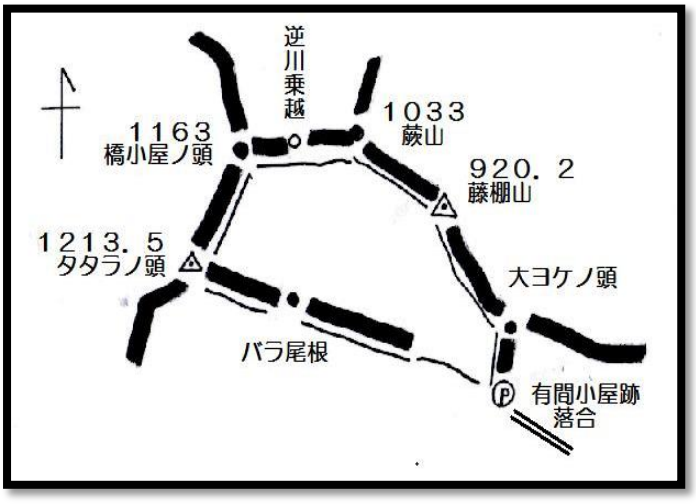
（杉原三千代　記）

参　加　者

◎大滝正巳　小澤紀行、佐藤　新、
互　茂子、床次泰文、萩原　昇、
森田憲子、杉原三千代　計８名

コースタイム

落合−80 分－834 峰−40 分−1016 峰−
―50 分－タタラノ頭−20 分－
―橋小屋ノ頭（有間山）−20 分－
−逆川乗越−25 分－蕨山最高点−15 分
―蕨山展望台―藤棚山−75 分―
―大ヨケノ頭―15 分―有間小屋跡―落合



＊コ　ラ　ム

畠山重忠と有馬山

本によっては、有間山は有馬山とも表記される。

源頼朝の先陣をつとめた武蔵武士の重忠は、深谷市の畠山で生まれ育った。鎌倉で有力御家人になるが、北条氏の謀略で横浜市の二俣川で討ち死にする。

有馬山は、重忠が実は討死をせず、忍び隠れたところで、後に土佐に行ったという話が伝わる。

深谷市ＨＰ「畠山重忠」辞典より

No061
No062
No063

小持山～大持山～武甲山

（こもちやま～おおもちやま～ぶこうさん）

小持山
1273m
N355608
E1390545
2013,04,28
日帰り
地　図
1/25,000
「秩父」

大持山
△1294.1m
N355543
E1390602
1/25,000
「秩父」

武甲山
△1,295.4m
E3555706
E1390552
1/25,000
「秩父」

飯能市にある天覧山から秩父の盟主と言われている武甲山まで六回シリーズで歩いてみた。最終回の大持山～小持山～武甲山を紹介しよう。

西武秩父駅からタクシーで石灰岩採掘工場を通りぬけ生川へ。一ノ鳥居前で降りる。ここは以前駐車場がなかったが、現在は整備されていて利用者は多い。今日はゴールデンウィークとあってマイカーで満車状態だ。一ノ鳥居からは林道を挟んで西は武甲山への表参道、南は妻坂峠に通じている。今回は妻坂峠から登ることになる。広葉樹の新緑が美しいが荒れた道だ。意外なほどに急な坂道をゆっくりと５０分かけて妻坂峠へ登りつく。小広い平担地で延享年号の刻まれている地蔵尊が安置されている。妻坂峠が前回の最終地点で今回はここがスタート地点となる。

峠から西へ汗をぬぐいながら急な坂道がしばらく続く。足元には盛りを過ぎたカタクリの花が目に入る。

標高 1,110m 過ぎると防火帯は広く、緩やかな傾斜になり展望が広がる。背後には武川岳から二子山、焼山方面の稜線

が続いている。程良い涼風の中、まずは大持山登頂。展望は西谷山、天目山、蕎麦粒山の尾根が一望だ。そしては小持山へはアップダウンの続く岩稜混じりのヤセ尾根を歩き緊張感を味わう。例年であればゴールデンウィークに大持山から小持山にかけて、尾根の両側に咲くアカヤシオが満開なのだが、今年は？と期待して歩いてきました。だが満開を心待ちしていたアカヤシオは、残念だが日照り続きのためか、水不足で花びらが茶色っぽくなっている。いつもの年であればアカヤシオの花のアーチをくぐって小持山頂となるのだが、ちらほら咲いているだけで非常に残念である。小持山頂は小広く大持山より展望が広がっていた。そして目の前には武甲山が優美に構えている。

が最低鞍部のシラジクボまでは200mほど一旦下り、そこから見る武甲山はより高さを増して立ちはだかる。

コバイケイソウの群落が山肌を覆い見事な景観をつくっている。下ってくる登山者に励まされ又、励まし返しながら、ほぼ４０分の登りで武甲山頂に到着した。

午後二時近くだが北西方向に両神山が

迎えてくれる。転落防止用フェンスから覗く眼下には、秩父市郊外の羊山公園の芝桜がピンク色で鮮やかだ。最後の記念写真を撮り、下りもまだ２時間３０分あり気が抜けない。長者屋敷ノ頭を経て秩父線浦山口駅へと急ぐ。

飯能市の天覧山から始まった六回シリーズの登山も武甲山の登頂で完結し、赤ラインで地図につなぐことができました。

（清水順子　記）

参　加　者

◎清水順子、井上武久、西片　昇、山崎　忠、吉野喜八郎、床次泰文
荻原章子、池田信一　　計８名

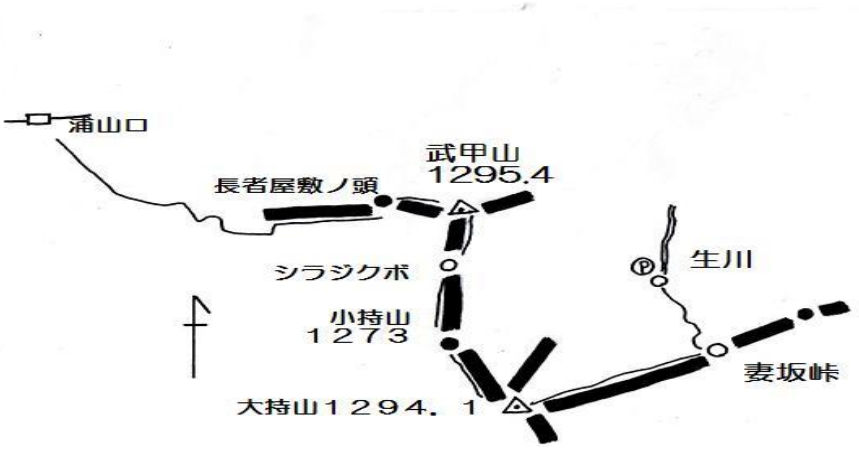
コースタイム

西武秩父＝(タクシー)＝生川―
―50 分―妻坂峠－40 分―大持山
―90 分―小持山―80 分―
―シラジクボ-80 分―武甲山―
―30 分―長者屋敷ノ頭―120 分―
―秩父浦山口

※コラム　草笛で道草

自然に親しみたくて山を歩く、自然と戯れたくて、そこにあった葉で曲を奏でる。静寂の中で。そんな楽しみ方を貴方にも。葉・・形と柔らかさがポイント。オオムラサキツツジ、トウネズミモチの葉などが比較的吹きやすい。

奏で方・・葉を横にして下唇に押し当て、両端に指を添える。おちょぼ口にして葉の上側に向け息を強く吹いて、葉を振動させることにより音を出す。音階・・息を噴き出す方向を上下に変えることで音階を創りだす。



No064

妙法ヶ岳（みょうほうがだけ）

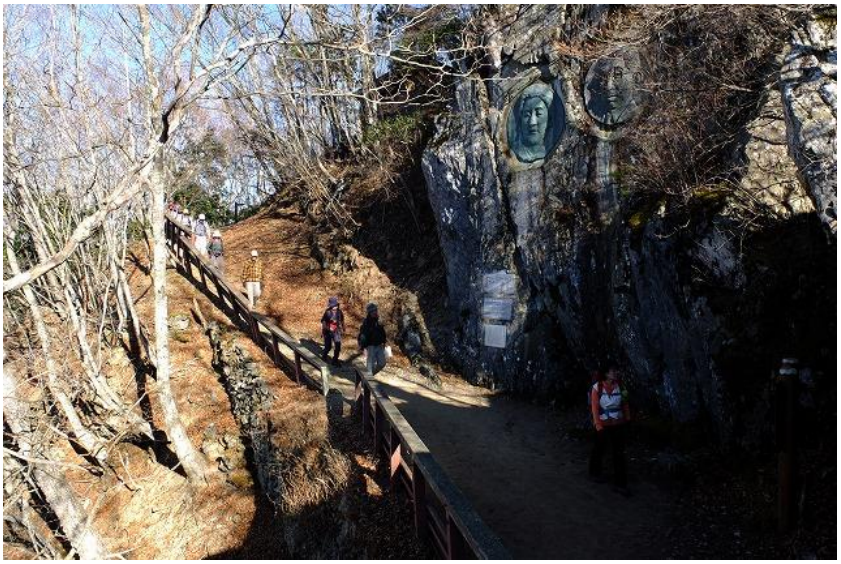
標高
1329m
N355505
E1385652

2013,11,23
日帰り
地　図
1/25,000
「雲取山」

秩父にはメジャーな山、例えば武甲山・伊豆ヶ岳・秩父槍ヶ岳等色々有りますが、私の中では妙法ヶ岳は、メジャーな山ではないという感覚が有りました。

妙法ヶ岳は三峰駅の南西に位置し、秩父では比較的に容易な山である。登山口は三峯神社を拠点とし往復するか太陽寺に下山をするのが、一般的である。我々一行１７名は、当初２０１３年５月にＳさん（２０１３年６月他界）が係として実施予定でしたが、Ｓさんの追悼も兼ねての山行としました。

この週の天気は比較的に穏やかな秋晴れの続く天気で、当日も見事に終始快晴であった。この快晴の空の元、私達は上尾を出発。順調に三峯神社着となり、準備を整え時間の関係で神社には寄らず、早々に出発する。登山道は極めて整備されており歩きやすい。両神山の分岐を左へ巻くようにとり、妙法ヶ岳と霧藻ヶ峰の分岐に至る。若干下り、今回最大の急登な直下の階段を登り、ちょっときついなと思った頃に頂きに立つ。神社から来ると手軽さもあり、現在は登山ブームも老若男女問わず結構登山客も多く、１０年前とは全然違ってメジャーな山になった感じがする。



【霧藻ヶ峰・秩父宮様レリーフ】

頂上でランチタイム後、ここでＳさんの追悼をしようと思いましたが、次々と登山者が絶えないため、頂上を後にし、途中の東屋でＳさんを偲び「今日の日はさようなら」を声高らかにメンバーＡ氏のハーモニカ伴奏で大合唱し、霧藻ヶ峰を目指す。霧藻ヶ峰への道のりは緩やかな登りを軽快に進み、地蔵峠を経て１時

間程で到着する。霧藻ヶ峰には秩父宮様のレリーフが有りその先に休憩所がある。ここは展望が良く、今日は遠望が利き北アルプス方面も見る事が出来た。この景色や歌声は、Ｓさんにも届いたと確信している。ここからは、一旦地蔵峠に戻ると、太陽寺までは下るのみ。休憩所が中間点にあり更に下ると水場がある。秩父には名水が多くめいめい水筒に入れて持ち帰る人もいる。ここから太陽寺はすぐに着く。太陽寺を拝観したかったが、不可という事で早々バスに乗車し、帰路上尾駅に向った。

（柳舘紀人　記）

参　加　者

◎柳舘紀人、萩原　昇、大瀧正己、大和田良一、森田憲子、井上武久
清水　博、桶川和子・田中比佐子、杉原三千代、広川ふじ子・互　茂子、小澤紀行、小澤三枝子、松本文男、清水順子、浅田良一　　計 17 名

コースタイム

三峰神社－70 分－妙法ヶ岳－15 分－
－妙法ヶ岳分岐－70 分－霧藻ヶ峰－
－40 分－東屋－20 分－水場－20 分－
－太陽寺

※コラム　三峰神社と狼

三峰山は紀州熊野から名前を移した雲取山、白岩山、妙法ケ岳の三山を総称した。今は、奥宮のある妙法ケ岳を遥拝できる三峰神社の辺りを呼ぶ。

三峰神社の神の使い、けん属は狼で、神札に描かれ境内には狛犬ではなく狼の像がある。万葉集の歌にある大口真神は狼のことで「おおかみ」の名は「大神おおかみ」に由来する。

ニホンオオカミは２０世紀初頭に絶滅し、標本は世界に６例しかない。平成８年に秩父の個人宅で７例目の毛皮が見つかり三峰神社博物館に展示されている。

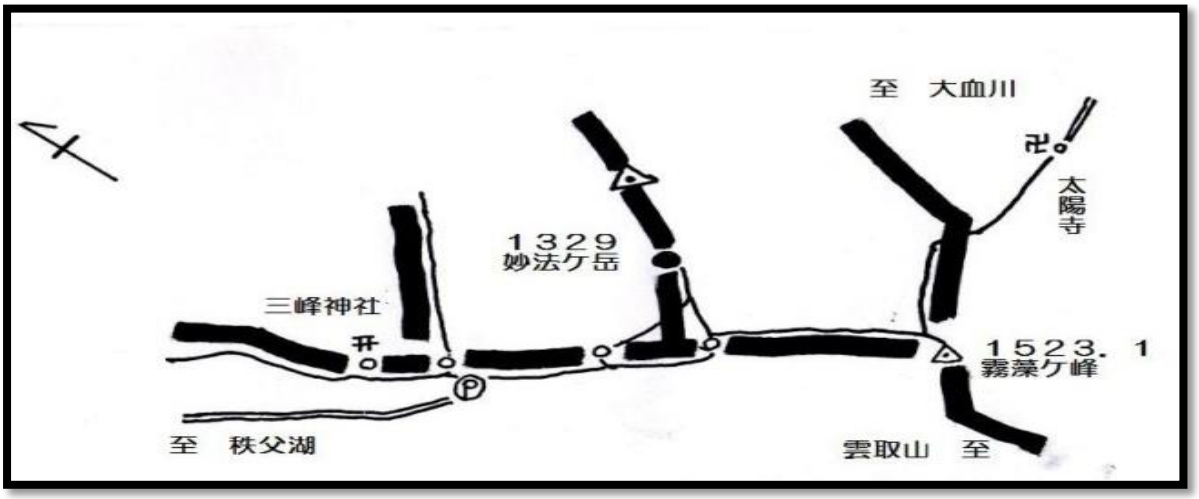
参考　「秩父学」・千嶋監修・学研

※コラム　太陽寺の畠山重忠伝説

三峰山麓大血川の太陽寺の髭僧大師を妙齢の美しい娘が訪ねてきて、ちぎりを結び子を産んだ。産室をけっして見ないでくれといわれたが、待ち切れずに覗くとそこには大蛇の姿があった。

大蛇は恨んで、故郷の諏訪湖に飛んで帰った。子は荒川に流されてたが、畠山で拾われ成長して武名をとどろかす重忠になった。

参考「ものがたり奥武蔵」
神山新井著・岳書房



No065
No069

倉明山～芋掘ドッケン

（くらけやま～いもほりどっけん）

倉明山
標高
△1333.4m
N355821
E1385304

日帰り
2013,11,3
地　図
1/25,000
「三峰」

芋掘ドッケン
標高
△1464.0m
N355850
E1385158

2013,11,3
日帰り
地　図
1/25,000
「中津峡」

１４０号を中津川渓谷へ目指すと、滝沢ダム（奥秩父もみじ湖）が現れる。その先に滝ノ沢望郷広場の標識があり、更に登ると立派な駐車場とトイレがある。この広場は、滝沢ダム建設に伴い、この滝沢地区に４２戸の住民が住んでいたが、移転のために作られた広場であるが、多分マニアックな廃村・廃町を趣味としている人が訪れるぐらいと思われ、個人的にいつか廃村廃町の見学をしたいと思っていたので、願ったりかなったり。山よりこちらの方が興味深い。

この元集落の遊歩道を上へ上へと登り適当なところで樹林帯に入って行くが、ここから急登なためトラバースして東側から尾根にとり着く。尾根まではかなりの急登なので注意が必要。また、直登するとハードワークを強いられる。尾根にとり着いたら、後はこの尾根を登る。途中稲荷神社跡があり、ひたすら尾根を登りきると、立派な標識のある倉明山に着く。山頂は樹林帯に囲まれてはいるが、今時期は両神方面も見る事が出来る。

【倉明山から芋掘ドッケンを望む】

倉明山から芋掘ドッケンは若干アップダウンのある尾根歩きで、オレンジや黄色が映える紅葉の中を歩くので気持ち良い。途中１３３１ｍ峰の岩から真正面に紅葉した芋掘ドッケンと両神山がよく見える。１３３１ｍ峰から標高にして３０ｍ程下り、芋掘ドッケン目掛け登り返す。平坦な丘の先に三角点がある芋掘ドッケンの山頂に着く。この山頂は平坦で樹林帯に囲まれているため倉明山より展望はない。

芋掘ドッケンから白井差峠までは地図で確認しないと、西寄り（まっすぐ）に行く可能性があるので充分注意が必要。進路を北西に延びる尾根を歩くと１時間程で最後のピーク１４４１ｍ峰。さらに２０分程で登山道のある白井差峠に合流する。白井差峠からは、高低差８００ｍを一気に下るが、歩きやすい一般登山道で、ジグザクに切ってあるため歩きやすい。中津川の川音がどんどん近くなり集落が見えるとすぐに中双里着となる。中津川を渡ればバス停は目の前にある。土日のバスは午後から2本しかなく、目指していた１４時２２分発のバスに余裕で間にあうことが出来た。このコースは全

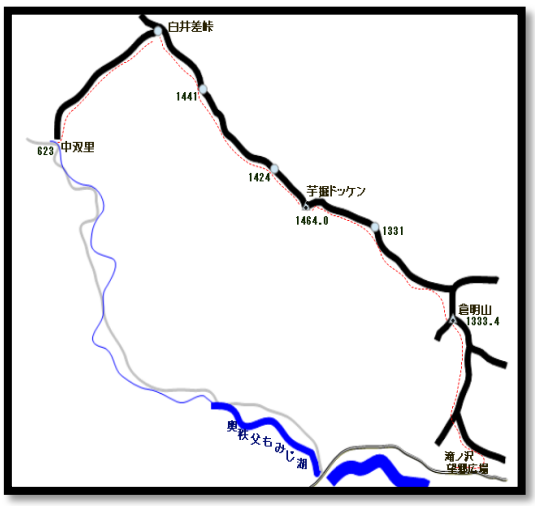
体的に景観がないので落葉の１１月から３月がお勧めである。また、殆どが尾根歩きのためこの時期に歩けば景観も得られ紅葉も楽しめる。

芋掘りドッケンの山名である「ドッケン」は「突」の意味でいわゆる「山頂」という意味で、場所によっては「ドッケ」と表現するところもある。

（柳舘紀人　記）

【倉明山　山頂は樹林帯】

参　加　者
◎大瀧正己　広川ふじ子
柳舘紀人　　計３名
コースタイム
滝ノ沢望郷広場―130 分―
―倉明山―60 分― 1331m―
―55 分―芋掘ドッケン―
―60 分―1441m峰―15 分―
―白井差峠―80 分―中双里＝
＝（バス 35 分）＝
＝滝ノ沢望郷広場



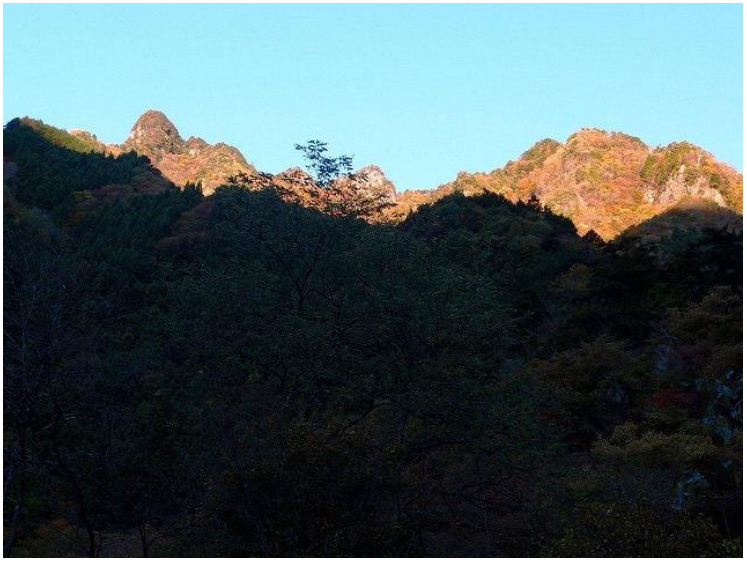
No066

秩父槍ヶ岳

（ちちぶやりがたけ）

標高
1341m
N355927
E1384851

2012,11,04
日帰り
地　図
1/25,000
「中津峡」



早朝、下吉田を出る。途中、車から降りて、中双里の橋の上からライトアップされたように朝日を浴びて金色に輝く鋭い岩峰群の槍ヶ岳の姿を堪能する。男性陣は女性を相原橋で降ろし、下山口の中津川キャンプ場に１台車を回してくれた。

登路の野鳥の森観察路にある相原沢は優しく綺麗な流れで心和む。野鳥観察小屋を右に見て、急登の小尾根に乗る。野鳥の森終点の表示があると間もなく１４６１ｍ峰と槍ヶ岳への鞍部に出る。青空のもと、展望は最高だ。両側の切れた岩峰を巻いたり登ったりしながら１４３０ｍの（コンサイス）槍ヶ岳に着く。コンサイス山名辞典に載っている山頂なので（コンサイス）と書くらしい。一般に言われている山頂の秩父槍ヶ岳山頂より約１００ｍ高い。急下降し１３４１ｍ秩父槍ヶ岳に着く。山頂は樹林ではあるが真紅の満天星にかこまれて明るい。北東には狩倉岳が大き

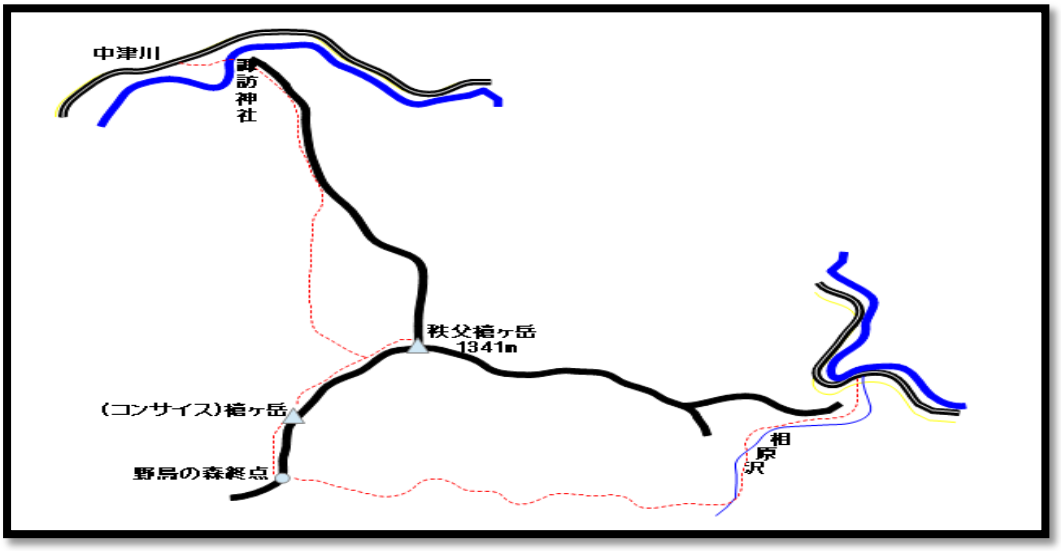
く見える。東南に続く急な尾根は野鳥観察小屋裏からの直登の尾根コースのようだが「これより先通行禁止」の看板が張られている。事故が多発したそうだ。早い昼食を食べ往路を少し戻った小さな鞍部から北に向かう斜面の踏み跡を探る。

山盛りの落ち葉で踏み跡は微か、しばらくするとそれも無くなり前日の天理岳と同じように中津川支流を目指し直滑降。ナメの沢に出ると右上から踏み跡が小尾根を巻いている。そこからは楽勝で諏訪神社裏に出た。

予想通り、中津川渓谷はもみじ祭りで大混雑。早めの下山で大した渋滞もなく帰路に就く。

（田中比佐子　記）

参　加　者
◎佐藤　新、大瀧正己、互　茂子
森田憲子、広川ふじ子、田中比佐子
計 6 名
コースタイム
下吉田キャンプ場＝
＝相原橋−140 分―野鳥の森終点
―40 分―槍ヶ岳（コンサイス）―
―40 分－秩父槍ヶ岳―120 分－
―諏訪神社－15 分－
―中津川村キャンプ場



No068
No080
No067
No043

熊倉山～酉谷山～～矢岳～大反山

（くまくらやま～とりだにやま～～やだけ～おおそりやま）

2012,05,13
～05,14

熊倉山
△1426.5m
N355529
E1385928

酉谷山
△1718.3m
N355350
E1390037

矢岳
△1357.9m
N355458
E1390151

大反山
△853.7
N355627
E1390242

地図
1/25,000
「三峰」
「武蔵日原」
「秩父」

一日目

武州日野駅から熊倉山日野コース登山口に向かって歩き出す。白久駅からの林道コースは、登山道崩落で通行止めとの由であった。しばらく車道をたどる。矢通反（やとおりぞり）隧道というかわいらしいトンネルをくぐり、登山口までは小一時間の道のり。立派な指導標の立つ登山口から山道に入ると、ほどなく沢沿いの道になる。日差しは強いが、風が涼しい。沢音も耳に涼しい。この道なら夏でも登れそうだ。沢身を右に左にと渡りながら徐々に高度を上げていく。一ヶ所、橋がなく、沢の中に靴を浸しながら渡るところがあったが、ここは増水時には渡れないだろう。やがて沢を離れ急登にたっぷり汗を絞られると、官舎跡を通り、水場に着く。斜面を横切る登山道の少し下に清冽な水が湧いている。まわりを見渡すと、他にも水が出ているところがある。ここで昼食にした。

再び歩き出すとすぐ、素晴らしい広場、笹平にでる。新緑の木々が美しい。ここからひと登りでようやく熊倉山頂上だ。

着いた時には多くの登山者がいたのだが、我々が休んでいるうちに、誰もいなくなってしまった。さぁ、ここからが今回の

山行のメインだ。熊倉山を後にするが、ルートは今までとあまり変わらない良い道だ。迷い込み防止の大きな標識が、かえって踏み跡の確かさを証明しているようにも思える。あまり広すぎず、狭すぎない快適な尾根道を辿る。ところどころにアカヤシオが咲いている。また遠くの山も見えているのだが、潅木が邪魔して見づらくて、何となく欲求不満である。小さなコブを越えながら西谷山へと迫っていく。やがて、尾根の幅が広がり、枯れた笹原の道になる。一面のすべての笹が枯れている。ウェブ上の記録では背丈を没する笹薮の道と書かれているが、枯れたようだ。歩きやすい。また再び笹薮になる日がくるのだろうか。バス停留所のような丸い標識の大血川分岐を過ぎて、小黒への登りにかかると、踏み跡が不明瞭になる。赤布はあるのだが、見つけにくい。稜線の西側を巻きながら登っていく人が多いようだ。だいぶ疲れてきているので、巻きたい気持ちは良くわかる。どうせなら全部巻いて、西谷山との鞍部に上がればいいのにと思う。赤布を拾っていくと、ひとしきりの急登でようやく小黒の頂上に着く。

ここからは一旦高度を下げ、本日最後の登りにかかる。日は西にずいぶんと傾いた。晩秋ならもう暗くなる時刻だ。なかなか小黒が低くならない。少し傾斜が緩くなるころようやく小黒を眼下にし、登りやすいところを拾いながら歩いていくと、頂上の標識が見えた。17時近くになって、西谷山頂にようやく辿り着いた。初めて、奥多摩側の展望が開けた。なかなか山深い頂上だ。

しばらく休憩した後、今宵の宿泊地、西谷避難小屋に降りる。混雑はどうかと気になっていたが、先客は若い男性が一人、加えて我々五人でちょうど公称定員一杯だ。皆で持ち寄ったつまみと、この時の為に延々運んできた酒で乾杯した。実家は浦和という同宿の男性も加わって、快適な避難小屋の夜は更けた。

二日目

今日もいい天気だ。避難小屋の窓から奥多摩はもとより、富士山や丹沢の山々も見渡せる。ひとしきり夜明けの山々の景観を楽しんだ後、朝食の準備をする。水場は小屋のすぐ前にあるが、水量はあまり多くない。枯れるときもあるというが、そうかもしれないと思わされるほどの流れだ。

朝食を済ませ、支度を整えて、簡単に小屋掃除(同宿の男性はまだしっかり寝ていたので)を済ませ、矢岳に向けて出発する。都県境の登山道は、よく整備され歩きやすい。あまりにも歩きやすかったので、うっかり矢岳へ向かう尾根への分岐を通り越してしまった。と言っても分岐には明らかな標識はなく、安易に立ち入らないようにという警告が書かれている表示板があるだけだった。登山道から別れて踏み跡に入る。路型はかなりしっかりしており、ルートはわかりやすいが、時々短い距離だが踏み跡が途切れる場所がある。天気がよくて見通しがよいので、今日は問題が少ないが、条件の悪い日は

意しないとあらぬ方向に踏み込んでしまいそうだ。小さなピークをひとつひとつ越えながら、特徴的な三角形の矢岳を目指して歩いていく。

登山地図のポイントに着くと、そこには大概、誰かの手製の標識、あるいは、朽ちかけた木製指導標があった。なかにはメモ用紙然としたもの(さすがに材質は紙ではない)を画鋲で止めたものや、赤テープに現在地が油性ペンで書かれただけのものもある。やがて特に問題となるようなところもなく、矢岳の頂上についた。「ロープが必要」などと書かれた古いガイド本もあるが、今日のように条件がよければ、それなりに山慣れた人なら、問題は少ないと思われる。ただし、丹沢、奥多摩あたりの整備された登山道を歩いた事がある程度の経験では、総じて秩父の山々には歯が立たないことも多いので、安易な入山は禁物だ。

矢岳からは、新緑の道を快適に歩いていく。透過光に映える若々しい木々の緑がこの上もなく美しい。尾根は適度な広さで、踏み跡も比較的はっきりしており、何の心配もなく稜線を辿っていける。

やがて斜面一面が皆伐された篠戸山に着く。武甲山や大持山、小持山から南へと続く稜線が見渡せる。振り返れば矢岳が見えていた。だが、伐採された稜線は日当たりがよくて暑い。どっと疲れがでる。逃げるように日の当たる稜線に別れを告げて再び樹林帯に入る。やがて大きな送電線鉄塔に着くと、あとは大反山への最後の登りとなる。

急登をひとしきり耐えると本日最後のピーク、大反山に着いた。軽く食事したりしてのんびりしていると、昨晩同宿だった男性が追いついてきた。避難小屋を我々より1時間ほど後に出発したそうだ。途中で膝を痛めたと言いながらも軽い足取りでやってきた。さぁ!ここからは、一般のガイドブックにある登山道だと油断したせいか、尾根を乗り換えそこね、若御子山への稜線に入りそうになった。少し戻り、怪しげな踏み跡を辿って、登山道に合流した。深くえぐれた道を下界へと向かって降りつづける。やがて沢に出会い、ここで顔を洗ったりしてさっぱりした後、人里へと下る。すれ違う地元の方々と親しげに挨拶を交わしながら、駅へと急ぐが、おいしい蕎麦屋があると聞きつけ、駅への道をやり過ごしてその

店に向かう。まだ昼を少しまわった時刻だが、待ちきれない面々は、電車の待ち時間を口実に、ここで山行の無事完結を祝って、乾杯！　すべてが充実感に満ち溢れた山行になった。

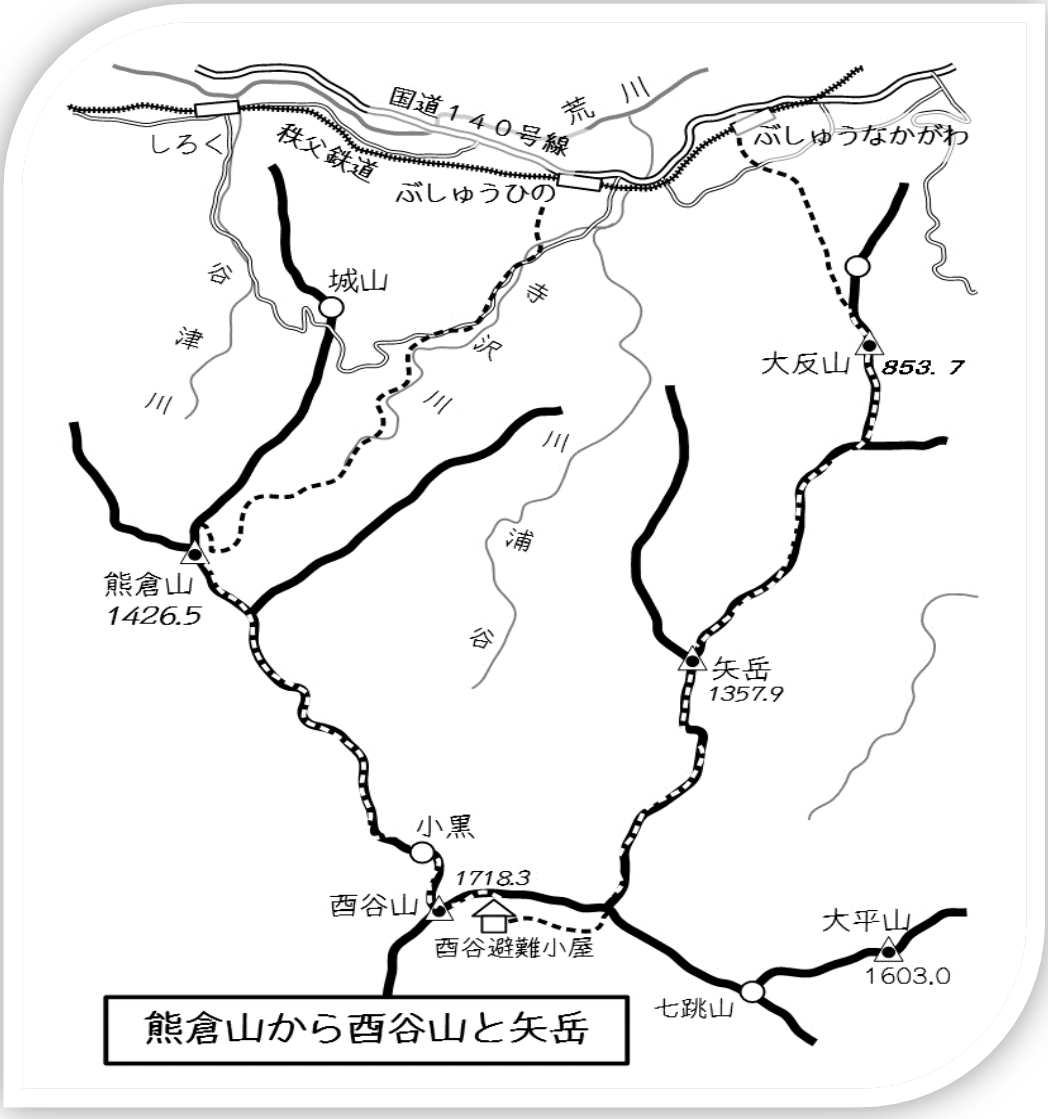
（大和田　良一　記）

参　加　者

◎大和田良一、益田光男、鹿野紀彦、
清水順子、井上武久　　計５名

コースタイム

武州日野駅―60 分―登山口―90 分―
―水場―45 分―熊倉山―60 分―P1451―
―50 分―大血川分岐―25 分―小黒―
―25 分―酉谷山―15 分―酉谷避難小屋―
―20 分―矢岳分岐―90 分―矢岳―110 分―
―大反山―80 分―武州中川駅



熊倉山から酉谷山と矢岳

No071

南天山（なんてんさん）

標高
△1483m
N360040
E1384651

2012,11,04
日帰り

地　図
1/25,000
「両神山」

南天山は中津川の上流域、奥秩父山域にあり、秩父の奥深くアプローチが長くアクセスに時間を要する。しかし、山行当日は、折からの紅葉シーズンに加え雲ひとつない快晴。何組ものグループとすれ違い、狭い山頂にはあふれる程の人たちで盛況であった。

大宮駅をレンタカーで出発、秩父から国道１４０号線を走りループ橋を過ぎて右手の林道へ入り、川沿いの登山口に到着、約３時間弱の道程である。

鎌倉橋の上流より路肩に駐車スペースが有り、先着の車が１０台前後、我々は先端に駐車した。早速支度を整え鎌倉沢右岸の登山口から山行開始。

山行直後の沢沿い歩行では、何度も沢を渡り返す。沢の横断部には木道がほとんど全て設置されるなど、よく整備されており、危険な箇所は少なく歩きやすい。沢には適度の水量があり、途中の方印の滝を始めいくつかの滝に出合った。

しばらく行くと沢を離れ、樹林帯の中を抜け稜線へ。紅葉は盛りの一歩手前であるが、高度を上げるに従い黄金色に輝くカラマツの黄葉が映えてくる。

山頂までは、岩の間を最後の一踏ん張り、二時間半時間程度で山頂へ到着。頂上は、雲ひとつない天候のもと、両神山・天丸山・帳付山等々、３６０度の展望が満喫できた。

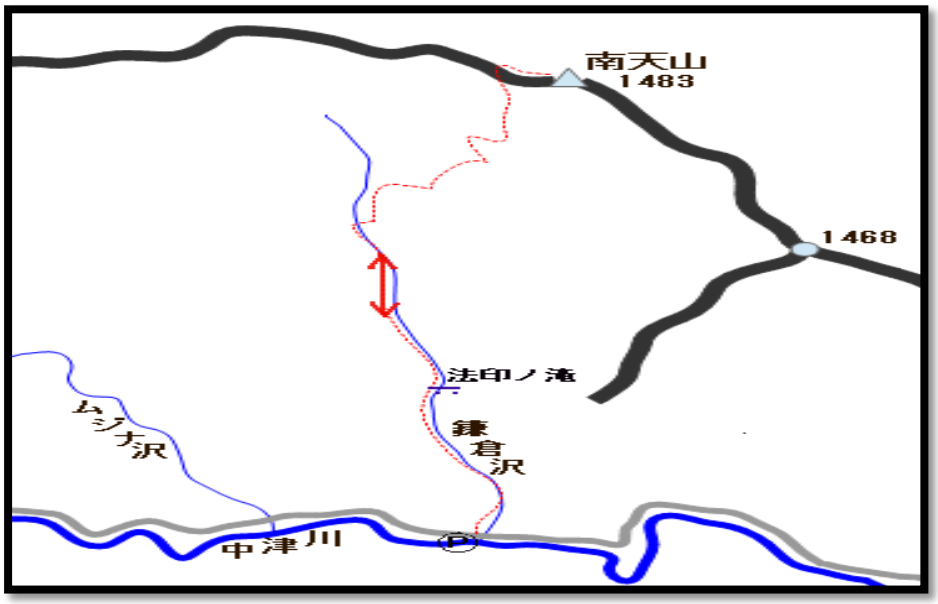
下山は同じ道を引返し、二時間足らずで鎌倉橋に無事到着。

帰路途中の中津峡では多くの紅葉狩りの人出に出会い途中下車、見事な紅葉を脳裏に納め、帰途についた。

（萩原　昇　記）

参　加　者
◎益田光男　鹿野紀彦
吉野喜八郎　榎原忠雄　緒形　明
石井正夫　萩原　昇
計７名

コースタイム
中津川林道・鎌倉橋―30 分―
―方印の滝―40 分―尾根分岐―
―70 分―南天山―2 時間 30 分―
―鎌倉橋＝大宮



【頂上から両神山をのぞむ】

No072
No077

宗四郎山・帳付山

（そうしろうやま・ちょうづけやま）

宗四郎山
1510m
N360150
E1384716
2013,05,11
～05,12

帳付山
1619m
N360204
E1384516
2013,05,11
～05,12

地図
1/25,000
「両神山」

1日目

北浦和駅をマイカーでに出発。今日は午後から大雨の予報なので、早めに宗四郎山の登頂を済ませようと先を急ぐ。

3時間弱の所要時間で、登山口である天丸トンネル入口（群馬県側）に到着。トンネル右側の広場に駐車、その奥にある沢筋が登山口である。身支度を調えている最中に小雨模様となり、雨具を身につけての出発となる。沢に沿って、登りやすい所を適当に、稜線目指して登る。途中藪こぎなど苦労して稜線へたどり着き、たっぷり汗をかいたが、小雨はいつの間にかやんでいた。

稜線からは、歩きやすい山道である。春の若葉のなかを快適に山頂目指して進む。山頂に近づくにつれ急登となり、ロープが数カ所張ってある。山頂には、1時間20分ほどで到着。あいにくの曇り空だが、晴れていれば360度の眺望―上武国境稜線にある帳付山・滝谷山・南天山が目前に見えるはずである。さわやかな空気を胸一杯吸い込み、森林浴を味わい、すがすがしい気持ちで下山する。幸い下山するまで雨に降られることも無く快適であったが、下山後はまもなく雨がふりだし、今夜の宿泊地である民宿・不二野家へ早めに入った。民宿到着後、明日の鋭気を養うため、食前の小宴を行ったのは言うまでも無い。

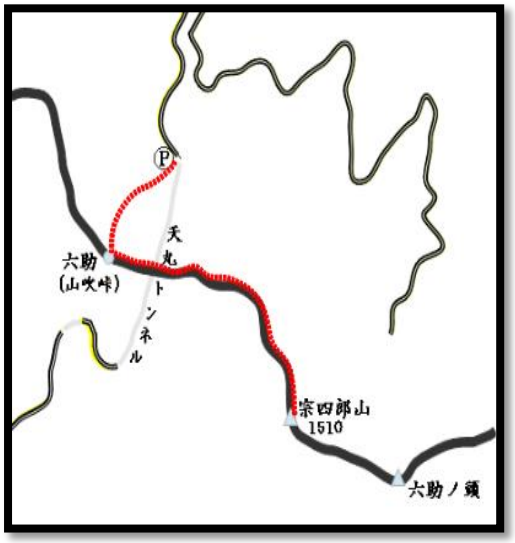
【宗四郎山】

2日目

翌日は、気持ちの良い快晴、5時頃早めの朝食を摂り、6時頃出発。帳付山登山口は、天丸橋を通り過ぎた林道の先端付近である。途中の林道には、落石が点在、「落石は拾って片付けて」との看板あり、踏まないように・車の腹に接触しないように慎重に運転する。登山口（社壇乗越）付近の林道脇に車を駐車し、準備を整え出発。登山口から「馬道のコル」と言われる稜線までが、幅広くなだらかな登りやすい山道であり、1時間20分ほどの所要時間。馬道のコルからはアップダウンが激しく険しい稜線をひたすら登り、山頂まで2時間近い所要時間である。登山口から稜線（馬道のコル）までのなだらかな道は、昔の馬道と思われ、日陰の苔生す幻想的な雰囲気がある。雨後の湿り気のある空気が気持ちよく、鼻歌でもでそうな気分である。馬道のコル

から山頂までの稜線沿いの山道は、行く手を塞ぐ岩山を乗り越え、巻き道を捜しつつひたすら登る。巻き道の無いのを確認し岩山乗り越えに挑んだところ崖にであい引き返し、再度巻き道を捜し先に進むこともあり、これもわいわい賑やかなグループのなかでは苦にならず、むしろ険しい登りを乗り越えて行く楽しさがある。所々で、雨後の澄み切った快晴のなか、くっきり鮮やかな眺望が得られる。加えて時節柄、若葉が映え、あちらこちらで咲いているヤツガシラアカヤシオのピンク色の花が鮮やかである。登るにつれ尾根は痩せ、痩せ尾根の右側は崖、足場も悪く慎重に登る。帳付山山頂は、細長く右側が崖で、左下がりの尾根となっている。折しも絶好の空模様からすばらしい眺望が得られ、みんな歓声を上げることしきり。近場の諏訪山・両神山は目前にせまり、遠くには八ヶ岳、雪の白馬岳が見える。又周囲に点在しているヒカゲツツジの中に絶滅の恐れ有る希少種に指定されている種（ウラジロヒカゲツツジ）が混じっているのを発見、またも歓声が上がる。下山は、険しい痩せ尾根を慎重におりる。馬上のコルにつくとほっと一安心。後はなだらかな馬道をゆっくり下るのみ、２時間３０分で登山口に到着。

（萩原　昇　記）



参　加　者

◎佐藤　新、森田憲子、互　茂子、
大瀧正巳、広川ふじ子、田中比佐子、
桶川和子、萩原　昇　　計８名

コースタイム

１日目：天丸トンネル入口―80 分―宗四郎山―
30 分―天丸トンネル入口＝
＝上野村民宿/不二野家(泊)
２日目：民宿＝天丸橋＝帳付山登山―80 分―
―馬道のコル―110 分―帳付山―80 分―
―馬道のコル-60 分―帳付山登山口（社壇乗越）

No074

赤岩岳（あかいわだけ）

標高
1570m
N360201
E1384843

テント泊
2012,09,29
～30

地　図
1/25,000
「両神山」

西秩父にあり、両神山の八丁尾根に派生して続く赤岩尾根の岩峰である。赤岩岳は両神山と同じチャートという岩石からなり、赤色を示すことがある。小倉沢の鉱山住宅跡から赤岩峠を経て登るコースを選んだ。合わせて隣にある大ナゲシ（群馬県）の山を往復し、赤岩岳の雄姿を見る。ゆっくりと安全に登るために、前夜は下吉田のキャンプ場に泊り一泊二日の行程で実施した。

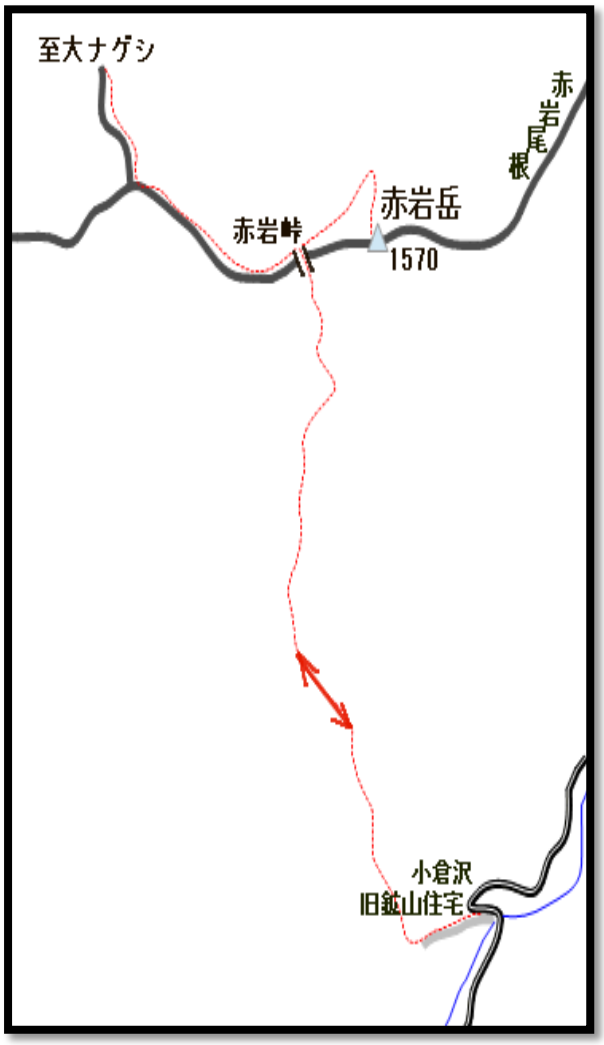
小倉沢の鉱山住宅跡はロープの車止があり、林道横の広いスペースに駐車する。朽ち始めた建物の上に赤岩岳の岩峰が見える。住宅に赤岩岳登山口を示す標識が付けられていて、ここが登山口だ。右手の住宅の間に入り、小沢を鉄板の橋で渡って右岸につけられた道を上がる。仮小屋を右に見て、植林の道から尾根の道になる。測量の基準点があり、木々の間から狩倉尾根が見える。岩礫の斜面をジグザグに登り、峠に着くと石祠と標識がある。

少し尾根を登り、すぐ左へトラバースに入るる。岩壁の下を巻いて、落石に注意して岩溝を登ると岩に囲まれたコルに到着。右の階段状の岩を上がり、小さなケルンのある尾根に出る。以前はこの岩尾根を登りザイルがほしくなったが、今は左側にある急斜面の樹林の中にルートがあり、木にすがって登ると赤岩岳頂上に出る。樹木のために展望はよくない。山名板がある。赤岩峠まで戻り、西へ岩交りの県境尾根を登る。傾斜が緩くなると「県界見出標９２番」の先で、尾根をはずし右へ横切る道になる。この分岐には道標がないので注意したい。

森の高まりのような小ピークを二つど越えると、大ナゲシ下部の岩場に着く。

岩尾根の左側から鎖を使って登る。上部の岩場は容易に登れ、頂上に到着する。赤岩岳はもちろん、西上州の山々のほとんどが見られる好展望台である。同じ道を登山口に戻る。

（佐藤　新　記）



参 加 者
◎佐藤　新、互　茂子、
広川ふじ子、清水　博、
大瀧正己、鹿野紀彦
計 6 名
コースタイム
小倉沢鉱山住宅跡―65 分―
―赤岩峠―30 分―赤岩岳―
―25 分―赤岩峠―65 分―
―大ナゲシ―45 分―赤岩峠―
―45 分―小倉沢鉱山住宅跡

No075

天　目　山（三ツドッケ）

（てんもくざん）日原コース

標高
△1576m
N355238
E1390330

2012,09,29
日帰り
地　図
1/25,000
「武蔵日原」

埼玉１００山の対象の山ではあるが、登山コースは全て東京都であるため、参考紀行として掲載します。

心配していた台風１８号は、見事にスライス・・好天を期待していたが残念ながら今一の天気であった。到着した奥多摩駅は登山客でごった返しており、東日原行きのバスは２台待機していたが川乗山の登山口である川乗橋までは２台とも超満員であった。

東日原バス停から登山開始。車道を日原鍾乳洞方面に進むと間もなく駐在所があり、右手の急な石段を登りバス道路の上の道に出ると左手に登山口の標識がある。登山道は良く整備されているが、奥多摩特有の急坂が中間点まで続き結構きつい登りであった。杉やヒノキの植林地を抜けると雑木林になり、傾斜は段々緩くなってくるが無人小屋までは時間がかかりそう。道路わきには名前が判らない色々なキノコのオンパレードが始まり、まさにお花見山行ならぬキノコ見山行であった。また、道にはドングリや山栗の殻が散乱しており、そこから数匹の子連れの猿が逃げて行くのが見えた。

一杯水避難小屋に着くと、小屋の前のベンチにキノコ狩りの３人の男性が休憩していた。お昼を過ぎていたので、ここで昼食。その間にキノコ狩りの人に収穫したキノコの名前を教えてもらったが、判ったのはシメジくらいであとは初めての聞くものばかりであった。ついでに熊の出没の話を聞いてみると、通過してきた道に栗の殻が散乱していたところは熊のえさ場で、猿が居たのはそのおこぼれをあさっているのだそうだ。

さらに、休憩中に山頂の木を無断伐採した人が到着し、当時のいきさつをＡ氏が直接聞き、その話を後でまとめてもらいましたので紹介します。

『・・話は6年前「天目山頂上からの展望がなく、他のハイカーも不満をもらしていた事もあり218本の木を伐採した。ネットで展望が良くなったことが紹介されたこともあり、各管轄部署に事情説明に出向いた。埼玉県は秩父営林署、東京都は水源管理事務所、結果的には埼玉県側170本の伐採に対して27，000円の罰金、東京都側は48本の伐採に対して27万円の罰金が課せられた」と云う話。尚、その後頂上に「違法伐採は罰せられる」との看板が立てられ、山頂でそれも看ました。（Ａ記）』

天目山の山頂へは無人小屋の脇の急な道を登って行くが、食後でもありとてもきつい登りであった。

山頂には２５分程で到着したが、せっ

かく伐採してもらったという待望の展望は霧の中で、見えるはずの山を勝手に想像するだけであった。

ここで記念写真を撮影し、直ちに下山開始、避難小屋からは元の道をひたすら下り無事、バス停に到着した。

（力丸忠夫　記）

参　加　者

◎力丸忠夫、榎原忠雄、高橋八重子、神尾ますみ、益田光男、吉野喜八郎、豊田孝道、西片　昇、山本富枝、萩原　昇、榎本千代子、浅田良一、池田信一、大室光江　　計 14 名

コースタイム

奥多摩駅＝東日原バス停―170 分―一杯水避難小屋―25 分―三ツドッケ―20 分―一杯水避難小屋―100 分―東日原バス停＝奥多摩駅

No076
No079
No070

大平山～七跳山～蕎麦粒山

（おおひらやま～ななはねやま～そばつぶやま）

標 高
大平山
△1603.0m
N355338
E1390246

七跳山
1651m
N355325
E1390207

蕎麦粒山
△1472.9m
N355220
E1390514

2013,04,21
～04,22

地 図
1/25,000
「武蔵日原」

当初、前日朝から登りはじめ、一杯水避難小屋に宿泊した後、蕎麦粒山から有間山を経由して鳥首峠から浦山に降りるという周回コースを予定していたが、２１日は朝から雨だったため、午後に出発して現地に宿泊し、日帰りで大平山から蕎麦粒山までを周回するコースに縮小して実行した。

２２日は素晴らしい晴天に恵まれた。細久保廃村の道をなんとなく登って行くと、**神社**にたどり着き、ここから適当に踏み跡を拾って、尾根に登った。あとは尾根伝いにひたすら高度を上げ、大平山へと向かった。昨日の雨は、山では雪だったようで、尾根上にはハイカットブーツが埋まるくらいの積雪があったが、登山道は明瞭で、まるで雪山を歩いているような心地よさで、迷うことなく大平山に登りついた。**大平山**は展望も乏しく、地味な山頂であったがなかなか訪れにくい山なので、**ゆっくりと休憩**して風情を味わった。ここからは、稜線沿いに長沢背稜の七跳山に向かうのだが、コースを天目山林道が横切っており、しかも稜線部分は広場になっていた。だが、その先登っていく雪の斜面に登山道らしきものは見当たらず、適当なところを登っていった。わずかに２ヶ所ほど変色した赤テープを見つけたが、結局頂上近くになる

で道はわからなかった。

七跳山からは、整備された水源の尾根道を行く。だが、無雪期は楽な巻道も、雪があるとなかなかスリリングで、桟道に雪が乗るとどこが板だかわからず、踏み抜きそうになる。ハナド岩で、今日初めての奥多摩方面の展望を楽しみ、やがて巻き道から別れて、天目山頂上に向かう道に入った。この道はかなりの急登で

【一杯水避難屋】

【蕎麦粒山　山頂】

岩もあり、また気温が上がって雪が腐り、足場が悪い。それでも何とかいわくつきで好展望を獲得した天目山に着いた。奥多摩から丹沢方面の展望を堪能した後、一杯水避難小屋に向かうが、頂上からの最初の下りとその上り返しがかなり急で、登った上に今日初めて他者のトレールを発見した。どうやらここで、積雪のため諦めて帰ったようだ。避難小屋に着くと、数名の登山者と行きあった。小屋の中で休憩していた人が、あの足跡の主であった。少し話をしたあと、まだ先は長いので出発した。一杯水はよく水が出ており、冷たい水で喉を潤し、蕎麦粒山へ向かう。巻き道を滑らぬように注意しながら急ぐ。このあたりはすでにトレールがあり、

【仙　元　峠】

一人の若者とすれ違った。やがて仙元峠も巻いていよいよ蕎麦粒山への急登だ。

蕎麦粒山からは、都心方面の展望が得られたが、スカイツリーは見えなかった。ゆっくりと休憩して下山に備える。だいぶ陽も傾いてきた。少し戻ってから、巻道を離れ仙元峠に登る。再び、トレールのない雪道になった。　長い仙元尾根をひたすらくだる。時折、木々の間から大平山や天目山が見える。登山道から雪が消えかかる頃、稜線を外れ、巻き気味の道になるが、路肩は崩れて歩きにくい。通る人が少なくなって、道の整備がなされず、古からの峠道がこうやって荒廃していくのかと、ちょっと寂しい気持ちになった。

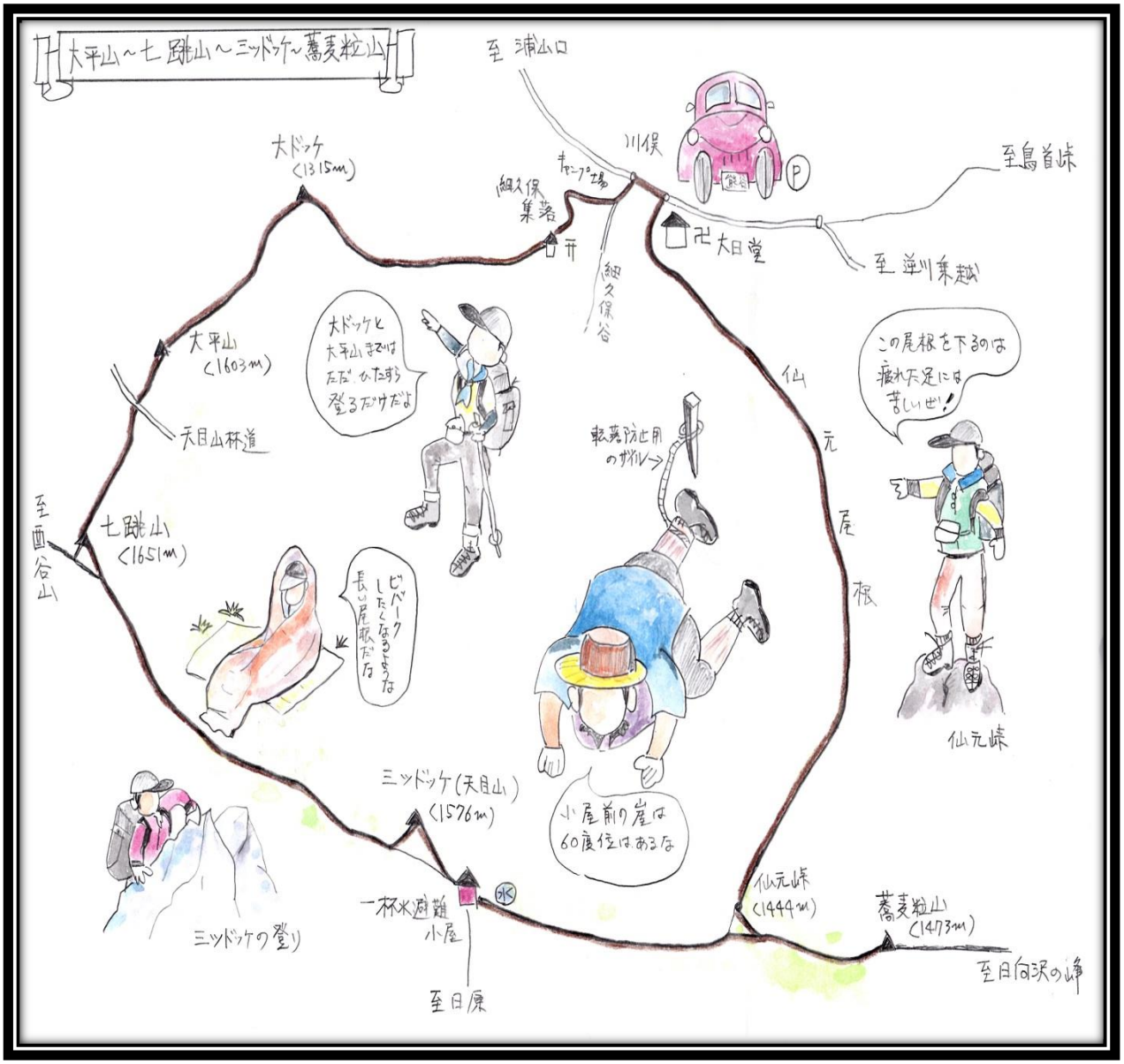
　送電線鉄塔で振り返ると、大平山から蕎麦粒山まで、今日歩いた稜線が一望できた。やがて大日堂の屋根が眼下に見えてきた。疲労感と達成感の入り混じったなんとも言えない満足感で、心をいっぱいにしながら、１１時間の山旅を終えた。

（大和田　良一　記）

参　加　者
◎大和田良一、井上武久、
小澤紀行
計３名

コースタイム
浦山大日堂駐車場－40 分―
―細久保集落神社－95 分―大ドッケー
―75 分―大平山―40 分―七跳山―40 分
――ハナド岩―30 分―天目山―20 分―
―一杯水避難小屋―70 分－蕎麦粒山―
―20 分―仙元峠―135 分―駐車場着

【天目山　山頂】



【踏み跡のない新雪を歩く・・】

No078

狩倉槍ケ岳（かりくらやりがたけ）

標高
1640m
N360110
E1384953

2014,04,19
～04,20
地　図
1/25,000
「両神山」

両神山から南に延びる梵天尾根を４００㍍ほど下ったところに大笹と呼ばれる地点がある。ここから西に向かって狩倉尾根が派生しており、狩倉槍ケ岳はこの尾根上の一峰で、見る角度によっては名の通りの鋭い穂先を天に向けている。残念ながら三角点は無いが、山頂は１６４０㍍の等高線で囲まれており、隣の狩倉岳（狩倉山の呼称もある）より僅かに高い。今回我々は小倉沢の廃屋状になった鉱山住宅の裏手から支尾根に取り付き、これを辿って標高１４３５㍍峰で狩倉尾根に合流し、狩倉岳を経て狩倉槍ケ岳に達する計画を立てた。帰路は往復とせず、さらに進んで大笹から両神山を越えて八丁峠まで行き、峠から林道の通る上落合橋に下山して出発地点に戻るという少々長丁場の計画である。

山行前夜は総勢７名が下吉田のキャンプ場に宿泊。愉しい夕餉の卓を囲んで大いに親交を深めた。明けて山行当日の朝は、まだ暗いうちにキャンプ場を出発し、１時間以上かけて登山口となる小倉沢に着く。早々に身支度を整え、６時過ぎに登山口を出発。廃屋の裏手から山に取り付く。ここの標高は約９４０㍍。支尾根のピークまではおよそ５００㍍の登りである。昨夜は山ではうっすらの降雪があり、足元も所々白くなっている。谷筋には２月の残雪も見られる。およそ１２５０㍍地点で行く手を阻む大岩が現れるが、ここは慎重に手掛かり足掛りを探して攀じ登る。喘ぎ着いた１４３５㍍峰には既に使用していないアンテナが立っている。ガスで視界もないので小休止後、次の目標の狩倉岳を目指す。アンテナピークから鞍部への下りでは、足元が悪いので安心安全のロープを使用した。

狩倉岳の山頂は樹林に囲まれ、三角点や山名板も無い実に地味なピークである。証拠の記念撮影をし、小腹を満たしてから本日の目的地である狩倉槍ケ岳に向けて再び歩き出す。一旦大きく下ってから岩交じりの道なき道を登り返すと、待望の狩倉槍ケ岳に到達した。本来はここからは周囲の山々が広く望めるのだが、今日は生憎雲が多く、大半は雲の中。山頂のアカヤシオやヒカゲツツジの蕾もまだ固い。記念撮影後は大休止とする。

この先には、狩倉尾根と梵天尾根が合流する大笹までの間に、横八丁と呼ばれる連続する岩場があり、この縦走コースの核心部となる。痩せた岩場を全員が慎重に通過すると、ホッとするのも束の間コース最大の難所に出くわす。

男性陣はなんとかフリーで登りきるが、女性陣には安全確保のためロープを使用した。ここを攀じて本日の難所はほぼ終

わりとなる。来し方を眺めれば、狩倉槍ヶ岳がその鋭鋒を空に向け、背後には狩倉岳がどっしりと控えている。これらを眺め、全員がここまでよく無事に越えてこられたものと感慨を覚える。ただ今回の予定コースはまだまだ先が長い。登山開始から既に７時間ほど経っている。余裕はない。大笹から梵天尾根に入り、両神山まではよく踏まれたハイキングコースだが、その先の八丁尾根は鎖場の連続する険路である。

日本百名山の両神山山頂は我々の貸し切りだが、今回はここは単なる一通過点にすぎない。長居は無用である。八丁尾根に足を踏み入れるとすぐコース上に残雪が現れるが、ここは慌てずに時間をかけてクリアする。

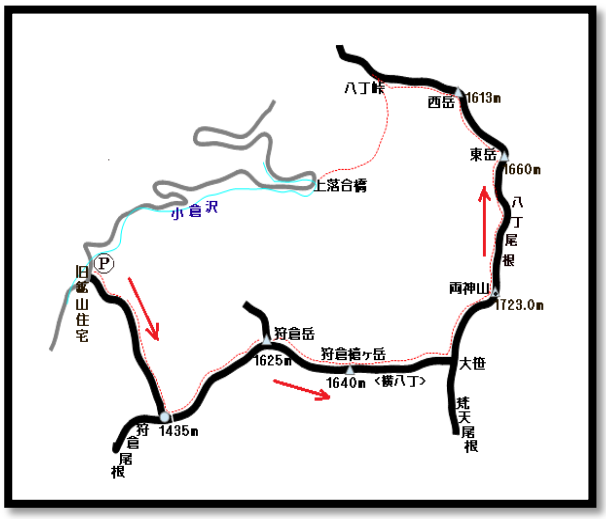
ここでメンバーで一番若く元気なＨ氏に一人先行してもらい、出来得れば林道の下山口となる上落合橋まで車を回していただくようお願いする。Ｈ氏は瞬く間に視界から消えてしまった。残された熟年組は、安全第一を念頭に次々に現れる鎖場を慎重にこなす。鎖場は原則一人ずつの通過で、複数の登山者だと結構な時間を要する。この八丁尾根は一般登山者も利用するコースとは言え、アップダウンも多く、疲れた足にはやはり厳しい。１８時近くになってやっと八丁峠を通過する。薄暗くなってきたが、何とかライトを点けずに上落合橋に着けるように皆黙々と歩く。かなり暗くなったところで眼下に我々を待つＨ氏の車の明かりが見えてホッとするが、最後に林道に下り立つ地点の残雪でコースが不明瞭になり、少々手こずった。

下山に予想を超えた時間を要し、大いに心配をかけたＨ氏の車に乗り込んで登山開始地点に戻った。１２時間を超える充実した山歩きであった。

（大瀧　正己　記）

参　加　者
◎大瀧正己　桶川和子、
小澤三枝子、杉原三千代、
森田憲子　塩﨑孝壽、樋口　哲
計７名

コースタイム
旧鉱山住宅―130 分―1435 ﾒｰﾄﾙ峰―
―70 分―狩倉岳―60 分―
―狩倉槍ヶ岳―125 分―大笹―
―20 分―両神山―225 分―
―八丁峠―40 分―上落合橋



No081

両神山（りょうかみさん）

標高
△1723.0m
N360124
E1385029
2013,09,28
～09,29
2011,10,20
日帰り
地　図
1/25,000
「両神山」

「両神山八丁尾根縦走」

一日目

西武秩父駅前に集合し、バスを乗り継いで日向大谷へ向かう。バスを降りるとちょうど昼食時。軽く腹を満たしてから歩き出す。真夏かと思うような強い日差しだが、登山道に入ると沢沿いの緑陰の道で快適に高度を上げていく。鎖場があったりの変化のある道で、１４時半頃には今宵の宿、**清滝小屋**に到着する。小屋はよく手入れの行き届いた快適な小屋で、トイレも清潔で素晴らしい。ただ、かつて焼失したことがあるせいか、小屋内は火気厳禁とのことで、外の小屋掛けで炊事をすることになるが、冬季は寒いだろう。小屋内の一角に火気使用スペースがあればいいのにと思う。ここで、めいめい持ち寄った食材で夕食にする。お酒も入って楽しいひと時であった。明日に備えて２０時ころには皆、シュラフに入った。

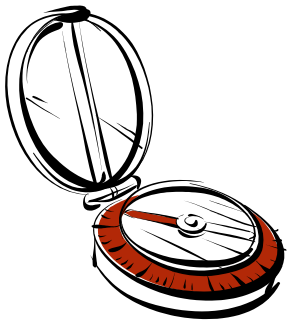
二日目

翌朝、小屋周囲は霧に巻かれていたが、晴天を信じて歩き始める。はじめから急登で、おかげで体が目覚めた。神社を過ぎて産泰尾根に登れば、そこは雲海の上。周囲の展望が開けてくる。富士山が奥秩父の山々の上に顔を出す。そして簡単な鎖場を乗り切るとそこが頂上であった。はるばる山形県から、そして静岡県からの参加者があったが、３６０度の大展望に、遠方からの参加も報われたと信じたい。浅間山と八ヶ岳の間に北アルプスが全山見えていた。

だが、ここからが今回の真骨頂だ。垂直に近いような鎖場を、寝具や炊事用具

【清　滝　小　屋】

といった無人小屋宿泊の装備を背負って次々と越えていく。しばらくすると八丁峠からと思しき若者たちのグループに次々と出会うが、彼らは皆ヘルメットにハーネス、金物をジャラジャラ言わせて歩いてくる。安全装備はわからないでもないが、このコースにそのいでたちは過剰だろう。彼らの親たちと同年代の我々が、彼らの日帰り装備よりもはるかに大きな荷物を背負って、軽々と鎖場をこなしていく姿に、ファッション優先登山の愚かしさを自覚してもらいたいものだと思う。さらに我々と同年代の男性は、ガイドと思しき人にザイルで結ばれ、コンティニュアスで歩いてきた。鎖場の歩き方などをあらかじめどこかで練習して、易から難へとステップを踏んでくれば、そんな事をしなくても登れるということを、我々を見て気づいて欲しいものだ。まぁ、それが面倒でガイドに高い対価を払って来ているのだろうが、おかしな傾向が現代の山登りに、はびこりつつあるようだ。鎖場を十分堪能して、やがて八丁峠に着く。ホッと安心するところだが、実はここから坂本への道は、最近通る人が少なく、それゆえ整備が不良で、あまり安心しすぎるのも禁物だ。はじめは急斜面をジグザグに降りていくが、八丁トンネルへの道を分けると、やがて沢沿いの下山路になる。途中、大岩と呼ばれる地点で道を失う。埼玉県の銘のある指導標は林道を指している。



だが、林道を降りたのでは遥かに遠回りになる。大岩の前で、沢を渡った橋の途中から、大岩を回りこむようにかかった橋とも言えないような木道を注意しながら下ると登山道にでた。罪な指導標を立てたものだ。

あとはところどころ、崩れかけたような道を慎重に下り、やがて小さな神社にでたところから、気楽な登山道になった。充実感に満たされながら、そしてなんとも微妙な時刻にバス停に降り立った。バスを待つにしても、周囲に自動販売機一つない。結局ここからタクシーを呼んで、早々に小鹿野の街に戻り、名物わらじカツを食べてビールで乾杯してこの山行を締めくくった。

（大和田　良一　記）

2013, 09, 28～29
参　加　者
◎大和田良一、清水　博、
井上武久、箕輪ゆり子、
萩原　昇　他本部会員 6 名
コースタイム
日向大谷－145 分－清滝小屋―
100 分―両神山剣ヶ峰―
―125 分―八丁峠―135 分―
―坂本バス停

「白井差新道から両神山剣ケ峰往復」

一時期閉鎖されていた白井差からの登山道が新しくなって解禁され、両神山剣ケ峰に登るだけなら、最も楽チンなコースが復活した。ただし土地所有者への事前の予約が不可欠で、コースは頂上往復に限られ、入山料が必要だ。

白井差の最奥にある地権者山中さんのお宅に車を置く。広場で中山さんからコース説明を受けて登り始める。間もなく昇竜の滝が出現。大きくはないが、すっきりした美しい滝だ。しばらく続く沢沿いの道から、やがて斜面を登る道になるが、手入れが行き届いて歩きやすく、背の低い笹がいい感じだ。登り切ると御嶽山へ続く梵天尾根に出て、さらに掴まる必要もない位の容易な鎖場を登れば頂上だった。ここからは八丁尾根は見えなかったが、その先の赤岩尾根が紅葉を身にまとい連なっていた。雲の広がる空であったが、西の空には武信国境の山々が浮

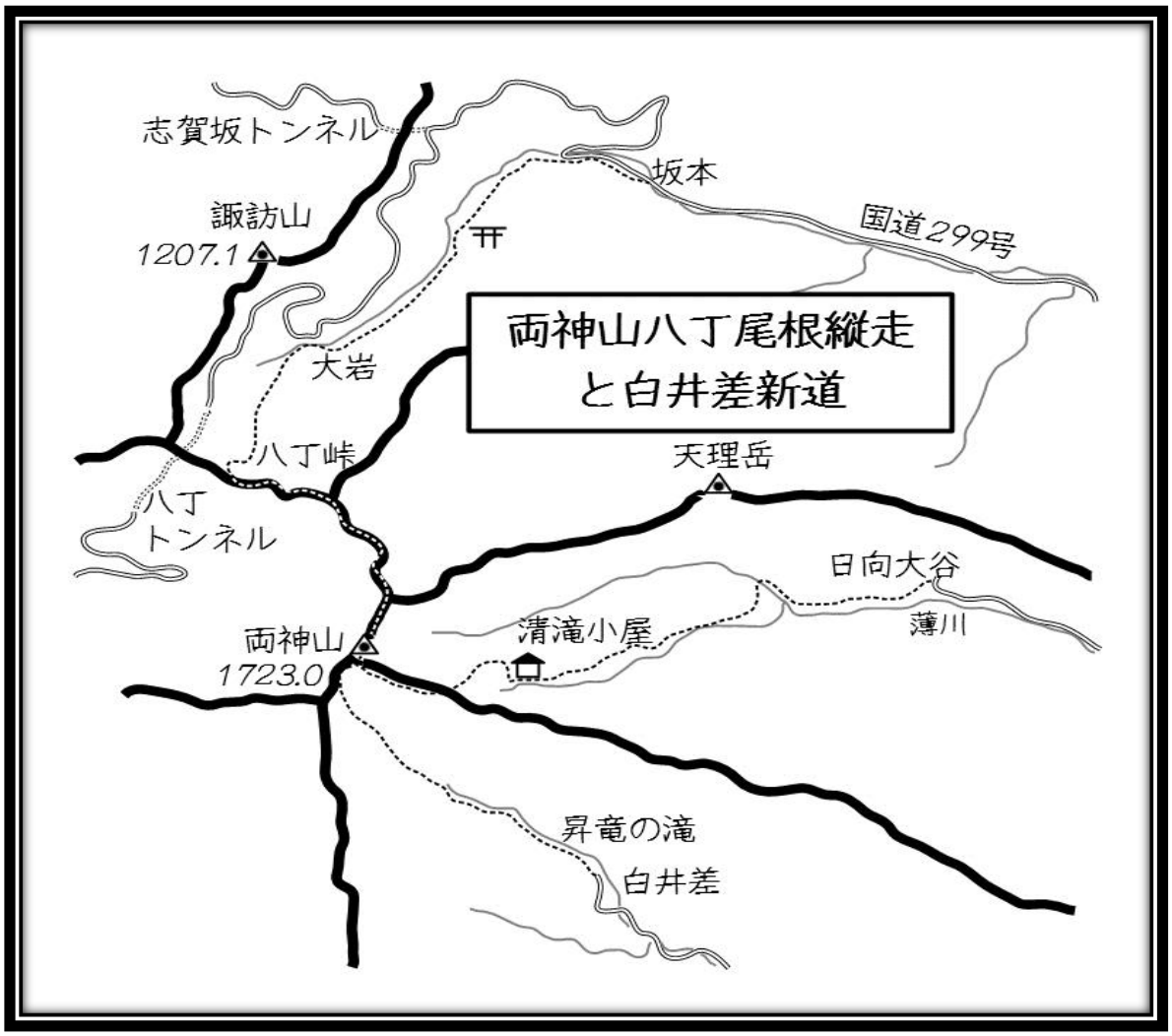
かび、御座山やはるかに八ヶ岳も見渡せた。南には雲取山などの奥多摩、奥秩父の山が聳え、高嶺の間に富士山が顔を覗かせていた。

名残惜しい山頂を辞し、もと来た道を登山口へと戻る。歩きやすい道で、快調に高度を下げていく。少し雨が降ったりもしたが、素晴らしい登山道を気持ちよく下山する事ができた。管理者の山中氏に心から感謝である。

（大和田　良一　記）

011, 10, 20
参　加　者
◎大和田良一、浅田良一、荻原章子、
互　茂子、倉重裕一、益田光男、
小澤紀行、井上武久、松田昭子、
武田建治、鹿野紀彦　計　11 名

コースタイム
白井差―130 分―
―両神山剣ヶ峰―90 分―
―白井差



No082

長沢山（ながさわやま）

（雲取山～長沢背稜）

標高
1738m
N355303
E1385837
2013,06,08
～09
雲取山荘泊
地　図
1/25,000
「雲取山」

1日目

２０００メートル代の山々が並ぶ奥秩父山域で、その最東端の２０００メートル峰として、この雲取山は位置づけることができます。その場所は埼玉と山梨に東京都が接している都最西端でもあって、海抜２０１７メートル は、都内の最高点としても知られています。

この山域は比較的自然のまま保たれていて、山頂の眺望の良いことも、それに加えることができ、東南直近の奥多摩の峰々、すぐ西の飛龍山から続く奥秩父の峰々、南に平たくでこぼこした三頭山とその先にある富士の姿、はるかに西の空の下には、南アルプスの峰々と、天気さえよければ見る対象は枚挙にいとまがないはずです。奥多摩駅からバスに乗り鴨沢で下車して歩き出します。二人静が出迎えてくれ穏やかな登りを快適に歩きます。サラサドウダンを見上げ、石尾根から（石尾根は奥多摩のメインストリートと言っても過言ではありませんよね
七ッ石山（1757.3m）ブナ坂を経てミヤマザクラが満開でした。雲に隠れていましたが飛竜山を確認。キバナノコナノツメの黄色い小さな花に癒されて段々勾配もきつくなりましたが頑張って歩きます。休憩したところが、小雲取山、見上げれば雲取山避難小屋が見えます。雲取山（2017.1m） 原三角点も確認し山荘に向かいます。頂上からは少し下り山荘に宿泊です。

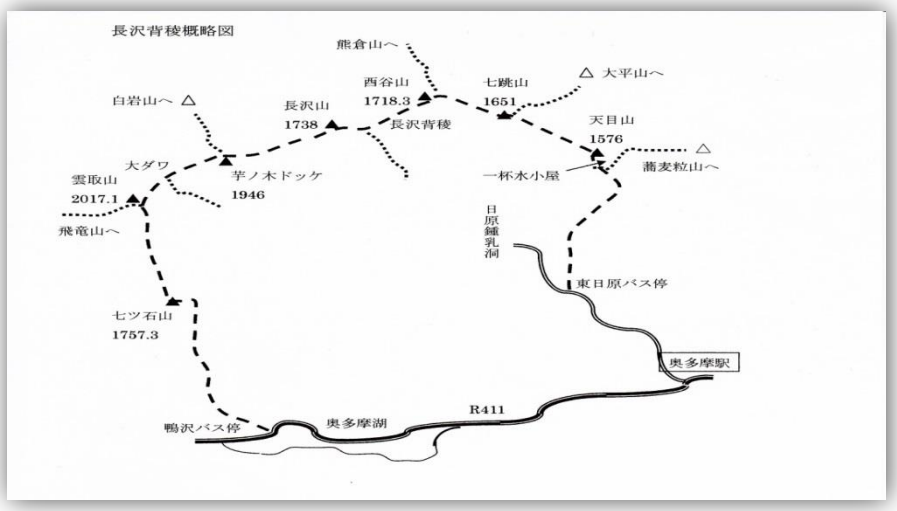
2日目

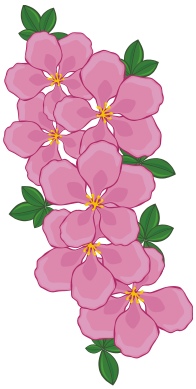
長沢背稜ルート

東京都と埼玉県の県境線がのっている長く続いた稜線を辿るルートが**長沢背稜ルート**です。長い距離を歩くので日の出前から、お弁当を持ち出発です。山荘からグングン下ります、途中では真っ赤な日の出を垣間見て今日は天気が良さそう、嬉しいなあ。大ダワ～芋ノ木ドッケへ朝日の中を歩くのは気分いい。山荘からは昨日の喧騒が嘘のように静かで人もまばらです。ふかふかの大地にまばゆいばかりの緑なんと素敵な山域だろう。
シャクナゲやイワカガミと花を愛でながら長沢山（1738m）。樹林に囲まれ展望はありません。そして更に進むと水松山（あららぎやま）（1699.2m）。集合写真を撮り、さらに進みます。クワガタソウの愛らしい花が咲き誇っていました。展望の良いところに出たら鷹ノ巣山、両神山、富士山もヤッター。岩肌を削られた天祖山も真近に見えます。酉谷山（1718.3m）・七跳山（1651m）。木の橋を渡り、だいぶ歩いたのでしょう、左手に七跳山、隣には大平山を眺め女性四人は天目山へ。未踏峰なので多数決？で決

まり登頂。天目山（三ツドッケ 1576m）からは　御前山、雲取山、有間山などが霞んではいますが遥か彼方の雲取山を見て、あそこから歩いてきたんだね！よく歩いてきたわネなんて、感心したりして。
　もうこれからはひたすら下山。一杯水避難小屋からは、景色も変化がなく、ひたすら下り東日原へ。バス停に着いたのは午後四時でした。皆でお疲れ様と労をねぎらいバスを待ちました。

（箕輪ゆり子　記）





参　加　者

◎森田憲子、大瀧正己、萩原　昇、小澤三枝子、田中比佐子、箕輪ゆり子　　計 6 名

コースタイム

8 日：鵜沢―320 分―雲取山―20 分―雲取山荘

9 日：雲取山荘-20 分―大ダワ―60 分―芋ノ木ドッケ―75 分―
―桂谷ノ頭―30 分―長沢山―35 分―水松山―90 分―
―酉谷山―65 分―七跳山―60 分―三ツドッケ―10 分―
～一杯水避難小屋―100 分―東日原＝奥多摩駅

No085
No091
No084
No083

三国山～十文字山～赤沢山～白泰山

（みくにやま～じゅうもんじやま～あかざわやま～はくたいさん）

2012,06,23～24
三国山
1834m
N355907
E1384247
十文字山
△2071.9m
N355643
E1384352
地図
1/25,000
「居倉」
赤沢山
△1818.9m
N355738
E1384628
白泰山
△1793.9m
N355725
E1384804
地図
1/25,000
「中津峡」

三国山は埼玉・群馬・長野の3県境にある標高１８３４㍍の山である。山頂から北東方向に延びる埼玉・群馬県境の尾根道は、帳付山で東に向きを変え、急峻な赤岩岳に至る。

また、西方に連なる群馬・長野県境の尾根は、途中で蟻ヶ峰や大蛇倉山、石仏、赤火岳といった顕著なピークを持ち上げ、静かなフィールドを好む少数の好事家に歩かれている。南に延びる埼玉・長野県境尾根は、十文字山から十文字峠を経て、甲武信ヶ岳で奥秩父の主稜線に合流するが、今回、我々は十文字峠で進路を東に変え、赤沢山、白泰山を経て、昔は関所があったという栃本集落に下山する計画を立てた。

三国山山頂の南には車道の通る新三国峠があり、ここからは標高差にして僅か１００㍍ほどの登りで山頂に達することができる。

６月後半の週末、支部の仲間とJR小海線の信濃川上駅から予約のジャンボタクシーでこの新三国峠に向かった。（平成24年）現在、峠の埼玉県側は災害による林道の一部崩壊のため、ゲートで侵入禁止となっている。峠に荷物をデポし、空身で**三国山に向かう。**25分で山頂着。眺めは、姿の整った小川山とその右手に連なる八ヶ岳が印象的であった。峠に戻ってザックを回収し、県境尾根を南下する十文字峠方面への登山道に入る。峠から７００㍍ほど先の梓山無線中継所までは登山道と車道が並走しているので、どちらを歩いても良いが、美しい緑に囲まれた登山道の方が快適である。無線中継所を過ぎると程なく悪石の三角点に着く。小休憩し、前進を続ける。コースは概ね広葉樹林の中であまり展望は利かないが、時折、眺めの開ける場所があり、顕著な岩峰の赤岩岳や大ナゲシ等が薄雲の間に垣間見える。さらに歩を進めると、大きな石灰岩の岩峰・梓白岩に至る。想像以上の大きさで、その見事さに圧倒される。続いてチャートの岩峰・弁慶岩が現れる

【三国山山頂】

が、緑に覆われていて、梓白岩の迫力には到底及ばない。両岩峰とも、ルートは信州側に付いている。時折、谷から吹き上げる涼風が汗ばんだ体に心地良い。

広い円頂を持つ十文字山に近づくと、鬱蒼とした樹林帯になり、俄然奥秩父らしくなる。最盛期はとうに過ぎているが、

【悪石三角点の道標】

まだ充分に観賞できるアズマシャクナゲの花も見られる。十文字山山頂は展望の無い、静かな森の中にあった。ここから一下りで、営業小屋の建つ十文字峠である。

十文字峠は、その名が示すように、今回辿ってきた三国峠方面と、バスの発着する梓山方面、また奥秩父の雄・甲武信ヶ岳方面と、これからの我々の進路である白泰山方面の、四方向への分岐点になる。十文字小屋の裏には、まだまだ美しい名残のアズマシャクナゲが、多数花をつけていた。実際の白泰山方面への分岐標識は、甲武信ヶ岳方面に向かってほんの僅か進んだ所にあり、白泰山方面へ20分ほど進むと、さらに分岐が現れるが、右は、柳避難小屋を経て、川又方面に至る道で、我々は左のコースを行く。

今宵の宿泊予定地の**【四里観音避難小屋】**は水場も近く、トイレもある快適な小屋である。十文字峠からは1時間前後で到達できる。その夜の宿泊は我々のパーティのみで、充実した愉しい一夜を過ごすことができた。

翌朝は小屋を6時に出発。栃本までは かなり長い行程を行くことになる。天気は昨日と同様に雲が多く、歩くには快適な気温である。

今回、山頂を踏む予定の赤沢山と白泰山はいずれも縦走路から少し外れた所に

【赤沢山頂】

位置しており、なかでもわざわざ赤沢山の山頂に立つ登山者は稀である。この赤沢山を巻いている縦走路の途中で、取り付き点の尾根の末端部を過ぎてしまったことに気づき、来た道を少し戻って、赤沢山頂に向かった。山頂直下まで来てみると、前日見た梓白岩のような大きな石灰岩の岩場に突き当たった。一瞬どこから取り付いて良いのか判断に迷ったが、なんとか正面左手から岩場の裏側に回り込むことができて、無事、山頂に到達することができた。三角点は樹林の中だが、山頂部外れの小岩峰からは大きな眺めが得られるようだ。残念ながら今日は周囲の山々は雲に閉ざされていて、期待の展望はお預けとなった。

この赤沢山周辺では、季節になるとハクロバイ等の稀少な植物が見られという。今回は完全な形ではないにせよ、その片鱗を窺い知ることができた。(この山行から、およそ一ヶ月後の7月後半に再訪してみると、見事に開花しているハクロバイに出会えた。)山頂からは方向を見定めて、薄い踏み跡のある尾根道を下る。少々の藪を分けて縦走路に降り立った地点には、目立たないが、青いビニールテープが付けられてあった。穏やかな樹林の中を小さなアップダウンを繰り返した後、僅かな急坂を登ると、二里観音のある白泰山避難小屋前に飛び出した。

小屋は頑丈な造りで、ストーブもあり、綺麗に清掃されているが、窓は閉じられていて中は真っ暗。水場やトイレもない。

小屋のすぐ前にある好展望の覗き岩で小腹を満たし、最後四つ目のピークである白泰山に向かう。縦走路から外れた山頂への分岐にはしっかりした道標がある。ここから20分ほどの山頂まで空身で往復する。この山も樹林で展望は望めず、静寂な頂であった。白泰山から栃本のバス停までは標高差で１０００㍍も下らねばならない。気を引き締め直して下山にかかる。分岐に戻った後は、幸いなこと

【キイロスッポンタケ】

にこれまでとは打って変わった緩傾斜で歩き易い道が続く。一里観音での小憩後、少し行くと、道は尾根を外れ、山腹を下るようになる。眼下には、舗装林道が見え、重くなってきた足には、バス停間近の期待が高まるが、コースはこの舗装路を横切って再び山道に入り、さらに下る。集落外れの車道に降り立ってからは、緊張感から開放された満たされた気分で

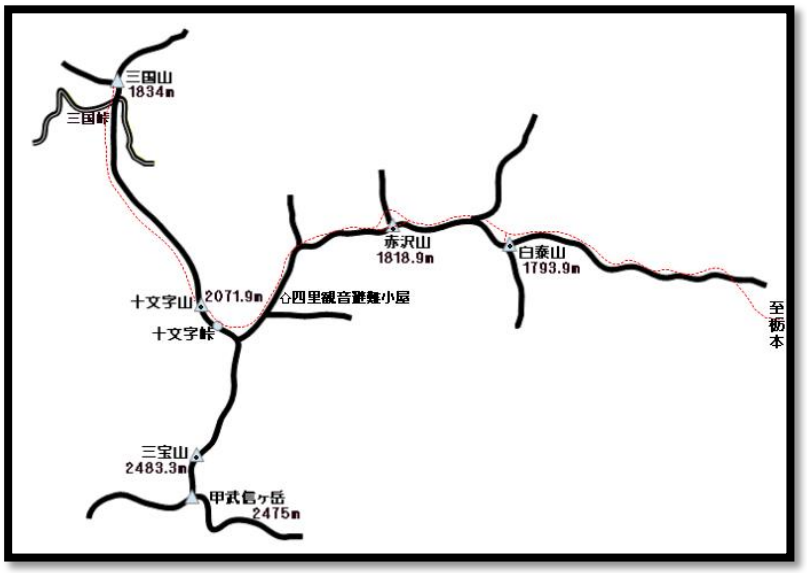
【白泰山山頂】

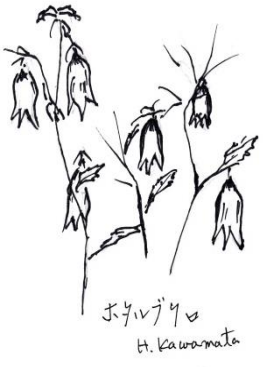
三々五々バス停を目指す。栃本関所前バ

ス停には、発車予定時刻の30分ほど前に到着することができた。
梅雨のさなか、両日とも天気に恵まれ、変化の多いロングコースを全員が無事、完歩できたことに感謝の山行であった。
（大瀧正己　記）

参　加　者
◎大瀧正己、広川ふじ子、清水順子、森田憲子、
石井正夫、鹿野紀彦、小沢紀行　　計　7名

コースタイム
1日目　信濃川上駅＝新三国峠―25分－三国山―20分－
―新三国－50分－悪石―70分－梓白岩―35分－
―弁慶岩―90分－十文字山―15分－十文字峠―
―80分―四里観音避難小屋(泊)
2日目　四里観音避難小屋―200分－赤沢山―90分－
―のぞき岩―45分－白泰山―3時間15分－
―栃本関所前バス停





【十文字山　山頂】

No073
No086
No089
No092

霧藻ケ峰～白岩山～～雲取山～飛龍山

（きりもがみね～しろいわやま～くもとりやま～ひりゅうさん）

2012,05,24
～05,27

霧藻ケ峰
△1523.1m
N355413
E1385721

白岩山
△1921.2m
N355244
E1385708

雲取山
△2017.1m
N355120
E1385638

飛龍山
△2069.1
N355024
E1385332

地図
1/25,000
「雲取山」

―霧藻ケ峰～和名倉山　その１―

やっと雲取山に登るチャンスが訪れた。日本百名山を目指している訳でないけど、埼玉の百名山には登りたいと思っていた。今回は雲取山だけでない。三峰ビジターセンターから霧藻ガ峰、白石山のルートで雲取山荘で一泊、二日目雲取山に登り、飛竜山経由で将監小屋まで、三日目は将監峠から和名倉山に登り秩父湖に下りる馬蹄形のコースである。三日目の和名倉山は他の人が紹介することになっているので、私は二日目までの山を書こう。

秩父鉄道三峰口からタクシー相乗りで三峰ビジターセンターに降り立ち、歩きだそうとした時雨がポツリポツリときた。予報より早い雨だ。雨具を装着して歩きだす。ポツリの雨がシトシト雨に変わる。慎重に高度をかせぐと「霧藻ガ峰」に着く。以前は「黒岩の頭」と云われていたが、昭和八年秩父宮様が登山された時、霧の中に揺れるサルオガセをご覧になってこの名前を思いつかれたという。

ここに休憩舎が建っているが、週末しか開いていない。今日は金曜日で閉まっている休憩舎の周りで雨宿りしながら一息入れた。視界は良くなく黙々歩くと白岩小屋に着く。小屋は今使われていないのだろう。埃がたまり荒れていた。

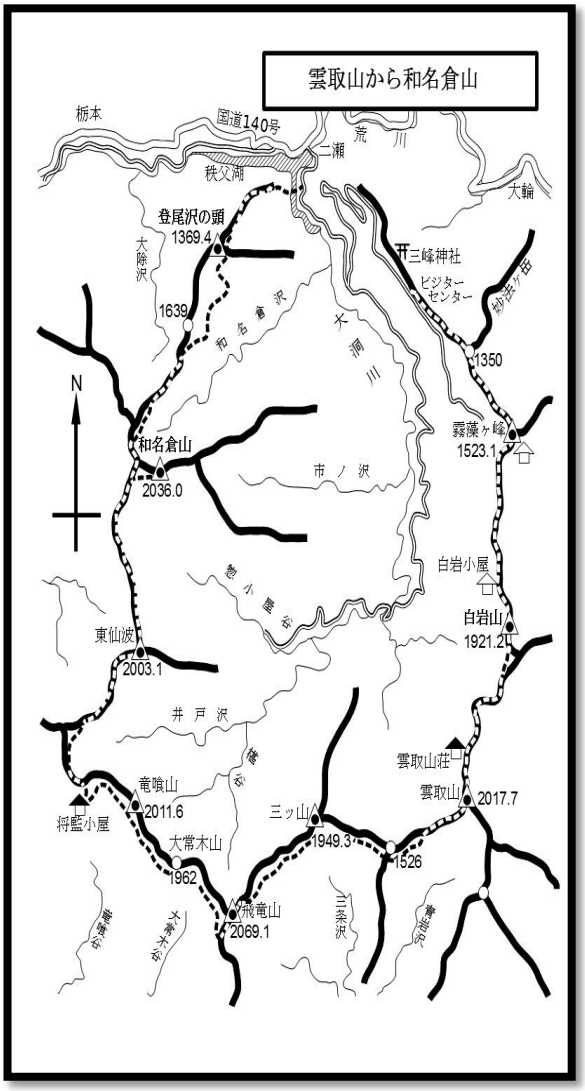
白岩山頂まではダケカンバ林の間の急峻な道を登る。今日一番きついところである。頂上は展望はなく雨のため通り過ぎる。暫く行くと長沢背稜分岐が出てくる。長沢山、酉谷山、天目山の方に行くルートである。ここまで来ると雲取山荘は近い。芋ノ木ドッケを巻いて最後の緩やかな登りを頑張ると雲取山荘に到着する。今日の泊りは７０人弱、雲取山荘は新ハイの会員証を見せると千円安くなる。当然持参、安くしてもらったお金はビール代になる。しかし明日の土曜日は予約客が３００人と聞いてビックリ！人気ある大きな山小屋なのだ。

二日目は快晴だった。５時半過ぎ雲取山山頂を目指してスタート、田部重治、富田治三郎(初代雲取山荘主人)のレリーフをみて、原生林の中の急坂を登ると、冠雪している富士山がくっきり目に入っ

【浅田良一　スケッチ】

て来た。歓声があがり、早速シャッター音が鳴り響く。富士山だけでなく、これから登る飛龍山、南アルプスの山々、甲斐駒，千丈ガ岳、北岳、間ノ岳、そして奥秩父の山々が見える。風が強いが素晴らしい山行日和だ。小休憩後、飛龍山をめざす。飛竜山へは東京都の水源林をトラバースしていく南面の道だが、結構登り降りもあり、また左側が切りたっていたり、危ない所に桟道が架かっていたりする。ラクダの瘤のような三ツ山を越え、巻き道の途中から飛龍山頂上に直接上がる道を選択する。山頂はなだらかで展望はほとんどない。ここで昼食後、飛龍権現までシャクナゲ林の中の道を下りると見晴らしの良いハゲ岩は直ぐだ。ハゲ岩からの展望は素晴らしい。あれが甲武信岳、そちらは明日登る和名倉山――話が尽きない。将監小屋への道はU字型で暫くは向い側にハゲ岩を見て歩く。将監小屋までは長いが、みんな健脚だ。１４時前に将監小屋に到着、夕食まで時間があり外のテーブルで宴会が始まり、たわいない話で盛り上がる。将監小屋にはアルコールの売り上げにかなり貢献したためか？大変素晴らしいもてなしをしてもらった。

（浅田良一　記）



参　加　者

◎森田憲子、大和田良一、益田光男、浅田良一、井上武久、鹿野紀彦、清水順子、吉野喜八郎、金子信一、小澤三枝子　　計　10 名

コースタイム

三峰ＢＣ-90 分-霧藻ヶ峰-90 分--白岩山-130 分-雲取山荘-30 分--雲取山-200 分-飛龍山-180 分--将監小屋

No088
No090

仙波山～和名倉山

（せんばやま～わなくらやま）

仙波山
△2003.1m
N355231
E1385223

和名倉山
△2036.0m
N355358
E1385241
2012,05,24
～05,27
地　図
1/25,000
「雲取山」

―霧藻ヶ峰～和名倉山　その２―

和名倉山は、他県と山頂を共有しないという条件をつければ埼玉県の最高峰である。だが、埼玉県の山ながら一般登山路は山梨側となっており、秩父湖に縦走したいと願いながらも三ノ瀬からの往復で山頂を踏んでいた。

思っていたよりしっかり踏まれた登山路、展望の素晴らしさ、美しい尾根にもう一度歩いてみたい！そして秩父湖に下ってみたい！という想いが強く残っていた。そして１年後、念願の再訪となった。

将監峠から仙波尾根へ

今日の行動時間は長い。将監小屋の小屋番さんのご好意で早めの朝食をすませ５時前には出発することができた。小屋を時々振り返りながら急登をこなすと将監峠である。左に進み牛王院平を過ぎると山の神土の分岐に出る。左へ唐松尾山、笠取山への縦走路を分け、和名倉山は右の笹原に踏み跡が続いている。ここから道は細くなるがルートはしっかりついている。トラバース道が終わるといつしか尾根通しの登りとなり、露岩にシャクナゲが目立つようになった。期待していたシャクナゲは、真っ赤な蕾が多いものの幾つか花を咲かせはじめている。美しさに足が止まりがちになりながら自然の庭園を進むと西仙波である。

注意しながら露岩を下り、開けた笹原を着いた。東から西に雲取山、飛竜、雁坂、甲武信、国師岳へと奥秩父の山並みが続いている。ここでゆっくり展望を愉しみ、小休止とする。

和名倉山へ

東仙波から直角に北に下り大きく横たわる和名倉山に向かう。明るい尾根道で焼小屋ノ頭、左側が崖になっている吹上からは西側の眺望が絶景である。今、あちら側をもう一つのグループが、甲武師小屋から雁坂峠に向かっている。元気に歩いている姿が目に浮かぶようだ。小さな登り下りを繰り返すと平坦地の八百平に着く。ここは直進しそうになるが、登山路は左端に続いている。この先の鞍部からは、いよいよ和名倉山への登りとなる。川又への標識を見送り二瀬分岐より右手に進路をとる。千代蔵ノ休場を突っ切り、伐採地を緩く登っていくと原生林に入って行く。苔むす倒木をまたぎ進んでいくと、そこだけぽっかり明るくなった空間に和名倉山の山頂があった。

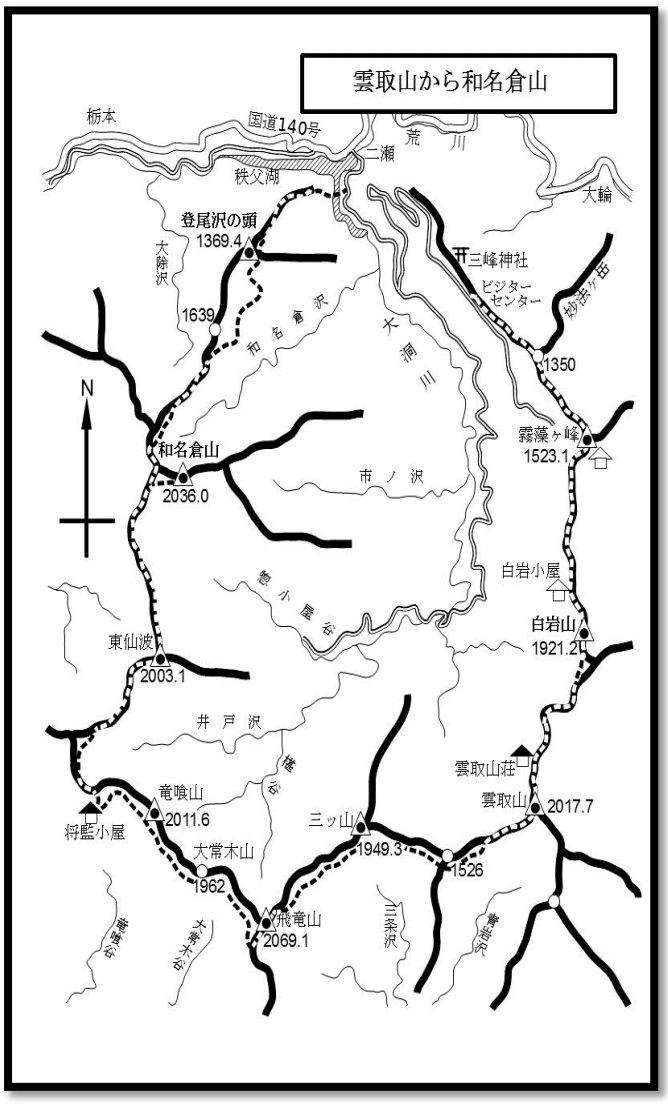
秩父湖へ

山頂の雰囲気をしばし味わい、二瀬分岐に戻り秩父湖に向けて歩き出した。やがてこれぞ奥秩父という景観の美しい原生林、ここが北ノタルなのだろう。気持ち安らぐ道を進むと明るい傾斜地に出た。ここで昼食とする。テント泊のＯさん手

造りのいなり寿司やSさんのミニトマトに元気をもらい再び歩き出す。稜線を巻く道を下っていると崩れかかった大きな岩があった。ちょっと迷っていると、後ろの方から上に道があるよと声がかかりホッとする。道迷いを心配したスズタケも見事に枯れており路型がはっきりとついている。笹薮が終わると稜線を外れ、滑りやすい急斜面だ。気をつけて下りきると湧き水があり小さな沢を渡る。その先に、戦後復興の木材の供給源として伐採が吹き荒れた頃の造林小屋跡があり、周りには生活用品の屑や一升瓶が散乱、線路やトロッコの残骸もあった。ここから森林軌道跡を行く。やがて水平道が尽きると登尾沢ノ頭の立て札がある小広い更地に着いた。小休止後、秩父湖に向かって下りつづけるが、皆さんの足は疲れを見せず快適である。吊橋に着いた時は、予定より1時間以上早い午後1時30分であった。

この雲取山～飛竜山～和名倉山の山行が決まり下山口を確認しに来た時から、無事に下山して吊橋を渡るのを待ち続けてきた。今、皆さんが元気に吊橋を渡っている。うれしさが全身から湧きあがってきた。後は、車道に出てバス停まで歩くだけである。

（森田憲子　記）



参　加　者

◎森田憲子、大和田良一、益田光男、浅田良一、井上武久、鹿野紀彦、清水順子, 吉野喜八郎、金子信一、小澤三枝子　　計　10 名

コースタイム

将監小屋―25 分－山ノ神土―90 分-東仙波―80 分－二瀬分岐-20 分－-和名倉山―15 分－二瀬分岐―-120 分－登尾沢ノ頭―70 分－-秩父湖吊橋―35 分―秩父湖バス停

【将監小屋をあとに】

No093
No087

唐松尾山～笠取山

（からまつおやま～かさとりやま）

唐松尾山
△2109.2m
N355204
E1385043
笠取山
1953m
N355156
E1384912
2012,10,13
～10,14
1泊2日
地図
1/25,000
「雁坂峠」

朝７時に車２台に分乗して北浦和を出発。奥多摩湖のふちを走り、１０時前に丹波に。道の駅で早めのお昼を摂る。木の香りのするレストラン。鹿どんぶりに鹿カレーと食指が動いたが、お弁当を持って来ているので残念。味噌汁のみ注文する。良心的な作りの味噌汁で、他の物もおいしいだろうにと思われた。山奥の小さな集落を見ながら一ノ瀬から三ノ瀬まで入って行く。雨戸の閉まった家も目に付き、胸が痛い。中島川橋に車を置き、三ノ瀬に戻って、登山口に入る。道はよく整備されていて、幅広く、緩やかに登って行く。１４時前に将監小屋に着いてしまった。すぐ脇に、きれいな水の流れ落ちる水場がある。その先にスロープのある草原があり、テントがひとつ見えた。小屋は大きな四角い部屋で、入口に薪ストーブがでんと据えられている。昔の素朴な山小屋の風情が残っている。夕飯までは時間があるし、というわけで、みなそれぞれおつまみや飲み物を持って集まり、Ｓさん差し入れの日本酒や男性陣の持参したお酒を楽しみ、大いにしゃべり、

気分は最高。夕食は、ここの定番カレー。野菜が沢山入って、お母さんの味という感じで、「おいしい」と好評。夜中に星空を見る。空が近く、星の数と明るさに驚く。Ｆｌｏｗｅｒｉｎｇ Ｓｔａｒｓという言葉を思い出す。本当にたくさんの星たちが花咲くようにきらめいている。

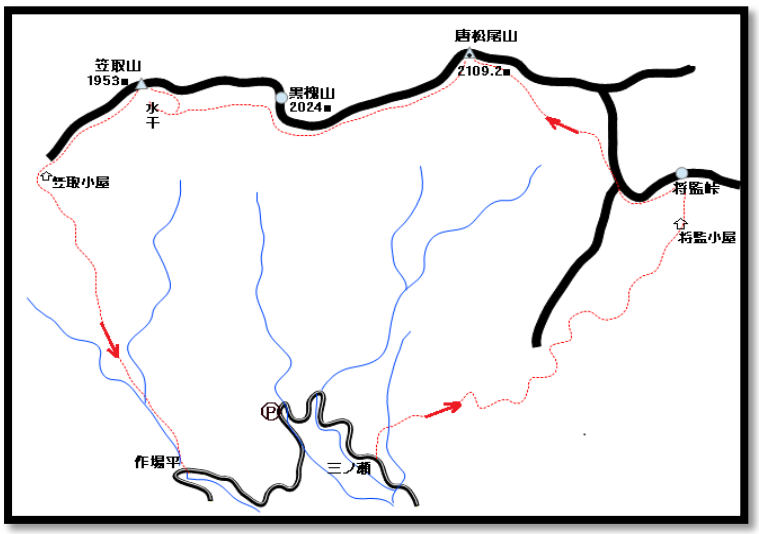
翌日も晴れ。将監峠からの尾根道は低いササの茂みとカラマツののんびりした感じであったが、和名倉山への登りを分ける山の神土を過ぎるあたりから、結構な登り上り下りがあり、木の根岩の根を踏む山道となる。「結構きつい」と思いながら、下を向いて歩いていると、先頭のリーダーが止り、「また小休止？」と思ったら、唐松尾山頂だ。あまり広くなく、まわりには木も生えていて、山頂の標識も小さな板が木にくっついているだけ。南側は開けて、途中何度か見た富士山と大菩薩嶺が雲海の向こうにシルエットになって浮かんでいる眺めがひろがる。林の中を急降下。シャクナゲの群落が。この尾根は本当にシャクナゲが多い。途中からササ原やカラマツの明るい道になる。黒槐山をすぐ右に見てなお進むと、水干（みずひ）に往復する道に出る。尾根道からはずれて、山腹を行くと、目立つ標識があり、岩肌に小さな洞穴が。海まで１３８㌔、多摩川の始まりとなる水源だ。穴を覗くが、水の滴りは感じられない。道を戻って登りを稼ぐと、笠取山の山頂に。わりに狭く、北側の展望はない。続いて次のピークに。東峰、そして西峰というわけだ。こちらの方がいかに

も山頂という感じで、大きく、堂々と広がっている。展望は３６０度。富士と大菩薩、乾徳、黒金、金峰、国師そして、南アルプスの山々も。空が大きい。秋の雲が軽やかに広がっている。目の下には、ところどころ紅葉した木々や、ゆるやかなササの原、カラマツ林など、これから下る笠取小屋方面が見渡せる。

ここから草原の中を一気に下って行く。スキー場の斜面さながら。下りきって振り返ると、大きなドームのようなその姿が圧倒的な存在感を持って迫ってくる。今までほとんど人に会わなかったが、次々と登ってくる人たちに出会う。道は遊歩道のように整備されて、ほどなく笠取小屋に出る。立派な、こぎれいな建物。下りは幅広く、よく手入れされた道で、とても歩きやすく、作場平まで楽々。

林道を歩いて、車のある中島川橋まで戻る。渋滞もなく、無事埼玉に帰り着き、狭山ＰＡで解散。奥秩父は、山の好きな両親に連れられて、高校生の時歩いた思い出の多い山。一度目は笠取から雲取へ。二度目は高校三年生の夏で、母と弟とで、大菩薩から入って、笠取を経て、甲武信へ歩いた。夏の花の咲く草原の中の、小さな小屋、やさしい小屋の主。母はその年の九月にくも膜下出血で急逝した。母と行った最後の山、笠取山と笠取小屋は、ずっと気になっていた。今回５０年余りたって再訪することが出来て、リーダーとドライバーのお二人には感謝でいっぱいです。山好きの母の分まで元気な私が登るんだという思いがいつもある。死者の意志が生きている者を動かしているということだと思う。

（松田昭子　記）



参　加　者

◎大瀧正己、佐藤　新、互　茂子、
広川ふじ子、荻原章子、森田憲子、
松田昭子　　計７名

コースタイム

１日目：道の駅たばやま＝50 分＝中島川橋
—145 分－将監小屋

２日目　将監小屋—90 分—唐松尾山－120 分
－水干-40 分－笠取山-90 分－
—笠取小屋－70 分－作場平-30 分—
—中島川橋

No094
No095

古礼山～水晶山

（これいさん～すいしょうやま）

古礼山
△2112.1m
N355232
E1384731
2010,06,05
～06,06
1泊2日

水晶山
2158m
N355256
E1384736

地図
1/25,000
「雁坂峠」

本山行は笠取山とセットにした1泊2日となったが笠取山分は別稿で作成されているので笠取小屋泊まりとして2日目からの記載とする。また実際は笠取小屋近くの避難小屋「雁峠山荘」に宿泊したが、現状は老朽化が進み廃屋状態で使用はお薦めできない。

奥秩父主脈縦走路の内、甲武信岳と雲取山との間にある笠取山・雁坂峠はともかく、古礼山（これいさん）や水晶山（すいしょうやま）は単なる通過ポイントしてしか認識されていないようで、訪れる人も多くなく、四季を通じて静かな雰囲気が味わえる山といえる。

翌朝4時30分、同宿した奥秩父縦走者は懇切丁寧な別れの言葉を残して早立ちする。私達は朝食と部屋の片付けを慌ただしくすませる。Wさんは近くの分水嶺で黙想ののち下山して「道の駅みとみ」で私達と合流することに。6時25分、3人で燕山（つばくろやま）の急坂を上り始める。途中で遙か彼方に富士山と南アルプスの山々が見える。

この山々は、この先雁坂峠まで、見え隠れしながらも私達の目をふんだんに楽しませてくれることに。

燕山から始まるシャクナゲの群落を期待したが咲き具合は昨日の笠取山付近と同様で不作。今年はどうも外れの年のようだ。縦走路(巻き道)を外れ、古礼山へ寄り道をする。山頂付近は案の定、富士山と南アルプスの絶好のビューポイント。

眺めを堪能したあと、下って再び縦走路に合流、今回のコースの最高峰水晶山までひと汗かく。山頂は残念ながら展望は皆無。しばしの休憩には好適地だが。

雁坂峠へは緩やかで快適な下りが続く。日本三大峠の一つ雁坂峠には甲武信ヶ岳

【水晶山山頂】

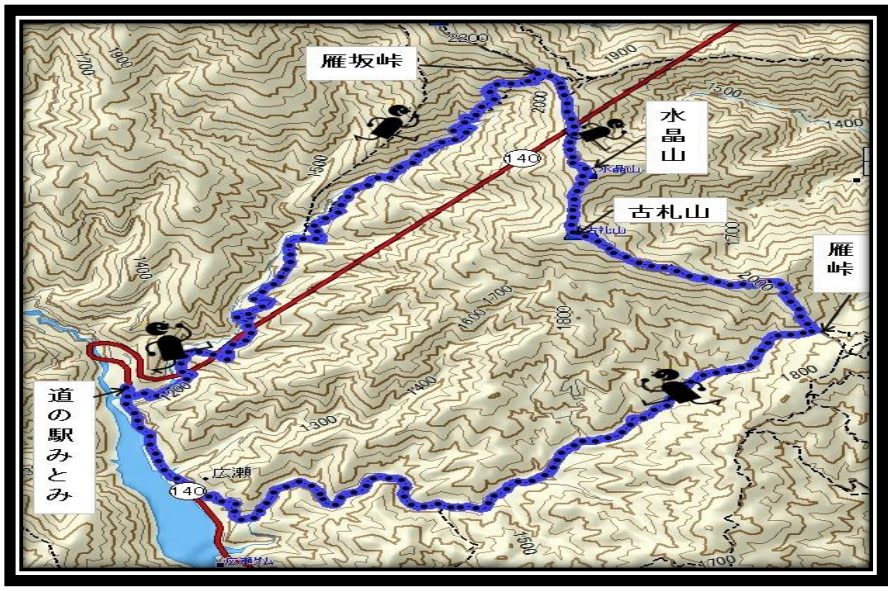
【日本三大峠・雁坂峠にて】

方面からの下山者１０名ほどが一休みしておりちょっとした賑わい。私達も約３０分休憩。峠からは急坂を一気に下る。道中はまさに「目に青葉一色。沢を下り左岸がスパッと切れた山道を経て亀田林業の林道終点沓切沢橋にたどり着く。

味気ない舗装道路を１時間ばかり歩いて「道の駅みとみ」にようやく到着。折良くＷさんと合流しそばと生ビールで昼食兼打ち上げに。Ｗさんが１４時３０分の塩山行きのバスがあることを調べてくれたのでこれに乗る。西沢渓谷方面からの行楽客・登山者で超満員。塩山から普通電車で立川・西国寺で乗り換え予定より早めに帰途につけた。

入梅前の新緑まっ盛りの爽やかないい山行でした。

（床次泰文　記）



参　加　者

小沢三枝子、◎床次泰文

（支部外２名）計４名

コースタイム

笠取小屋－20 分―雁峠－

―30 分－燕山－60 分－

―古礼山分岐－１０分－

―古礼山－40 分－水晶山――

40 分－雁坂峠－120 分－

―沓切沢橋（林道終点―

―60 分－道の駅みとみ

No098
No097
No096

木賊山～破風山～雁坂嶺

（とくさやま～はふさん～かりさかれい）

2012,05,26
～05,27

木賊山
△2468.6m
N355415
E1384402
地図
1/25,000
「金峰山」

破風山
△2317・7m
N355407
E1384532

雁坂嶺
△2289.2m
N355356
E1384653
地図
1/25,000
「雁坂峠」

1日目　西沢山荘手前の徳ちゃん新道登山口から、本日の宿泊地・甲武信小屋へ向け、歩を進める。なかなかの登り。体も順応していない故かシンドイ。休憩1回とり、１８６９㍍合流地点で一

息とる。この間、ミツバツツジのピンク色があでやかに新緑の緑色に似合う。この地点からがシャクナゲのトンネル。花の高さが人の目の高さ位なので、薄ピンクが艶やかである。天城の花に比較すると、樹木の高さ、花の大きさは小さく、花の形も小振りである。２０００㍍前後で開花していた。それ以上の高さでは蕾。赤みを帯びていないので、これからのお楽しみです。アズマシャクナゲのお蔭で疲れも忘れ、いつか雪道となり、木賊山に到着。こんもりした森の中に標識と三等三角点が設置されている。

【木　賊　山】

残雪の中を下山。甲武信小屋へと向かう。本日、団体客が予約され満員状況とか。その混雑が時間と共に過ごしにくい状況となり、不快感が消灯の頃にはピークとなった。それはそれとして、夕食前に甲武信ヶ岳へと歩を進める。雪道は結氷している所もあって、足元をよく確かめて歩行する。

山頂は、でっかいケルンと「日本百名山甲武信ヶ岳」と書かれたでっかい標識が設置されている。何年か前は、「甲武信ヶ岳」という標識１本だけであった。山頂部分も狭かった。とにかく、何もかにも変わっていた。記念写真を撮って、

【日本百名山　甲武信ヶ岳】

下山した。小屋に戻ると、小屋の前は客でいっぱい。食時まで、本日の反省と見聞した事の感想を相互に語り合い、楽しい一時を過ごす。

【混雑の甲武信小屋】

小屋の壁に、皇太子殿下・妃殿下の(宿泊)写真があった。トイレが洋式でした。夕食はカレーライスでしたが、非常に清潔さを感じました。味も良かった。

2日目　すし詰めの寝床から起きて、チョロチョロ流れている水で洗面を行う。とにかく、低い天井の上に、約１００人位寝ているのだから、暑い暑い。口はからからと、若い女２人が歯磨き粉を使っての歯磨きをしているので、水はどうするの？と聞いてみたが、水の貴重であることをわきまえていない。ホテル泊の感じ。そうこうしていると、小屋主の「日の出ダ～」という叫び声が聞こえた。

小屋の真正面にピンク色の小さい玉

【破風山避難小屋】

が見えた。玉は時間とともに上昇、大きな玉となった。パチリと記念撮影。やがて、朝食の長い列に加わる。

５時２５分頃、出発準備をして小屋前に全員集合。ミーティングの後出発。暫くは残雪が続く。トラバース道をゆっくり注意しながら歩く。天候もヨシ。

木賊山分岐あたりで残雪は消え笹平へと下って行く。笹平から破風山への南斜面と尾根筋の**倒木がひどい**。痛々しい立ち枯れの木々。原因は鹿の食害か酸性雨

なのか。やがてきれいに建て替えられた立派な破風山避難小屋前に到着。しばし休息をとる。なかなかの避難小屋で次回の山行で利用したいと感じる。

余り眺望のよくない**西破風山**そして岩稜の東破風山を越え雁坂嶺へと進む。雁坂嶺でちょうど居合わせた山ボーイにシャッターをお願いしやっと参加者全員の写真を撮ることができた。登り下りを

【雁　坂　嶺】

しながらやがて雁坂峠に到着。好展望の峠でしばし休息。この稜線上では、シャクナゲは開花前。峠から和名倉方面の展望がきく。

さあ、ここから高度差１０００㍍の秩父往還道を往時をしのびながら下る。同時山行中の森田パーティはどのあたりをすすんでいるのか。つづら折りの急斜面を下る。沢沿いに近づくと、トリカブト・バシリドコロがよく育っている。沓切沢橋まで途中二・三か所、登山道の

【雁　坂　峠】

修理が必要な箇所がある。峠沢、久渡沢の渓流沿いを新緑に染まりながら進む。沢の三本丸太橋や岩の上を飛び越える。小さな滝をトラバースして、「亀田林業所橋」に到着。ここからは、舗装された林道を歩く。皆の安堵と満足の顔がうれしい。昨日の朝、駐車した「道の駅みとみ」に到着。登山は、事故なく、天候にも恵まれ予定通り終了。この後は途中、温泉へ。お疲れさまでした。

（加藤憲司・内田克己　記）

参　加　者

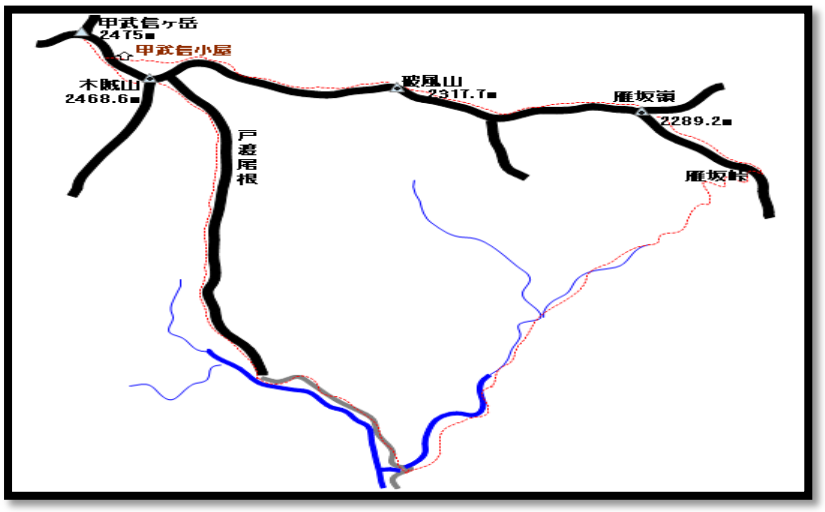
◎大瀧正己、互　茂子、広川ふじ子荻原章子、高木幸代、安才冨美子
加藤憲司、清水　博、内田克己　　計 9 名

コースタイム

前　日：彩甲斐賀街道「出合いの丘」仮眠

1 日目：　道の駅みとみ－40 分――登山口-160 分―ヌク沢分岐―
―180 分―木賊山―50 分-甲武信小屋――40 分―甲武信岳―
―甲武信小屋(泊)

2 日目：甲武信小屋―80 分―笹平――60 分―西破風山―120 分―
―雁坂嶺―40 分――雁坂峠―150 分―沓切沢橋―80 分―
―道の駅みとみ



No100
No099

三宝山～甲武信ケ岳

（さんぽうざん～こぶしがたけ）

2011,11,19
～11,20

三宝山
△2,483.3m
N355503
E1384340

甲武信岳
2,475m
N355432
E1384344

地図
1/25,000
「金峰山」

1日目

登山口の毛木平から雨具と傘を差しての登りとなる。ここは6月中旬だと、「ベニバナノイチヤクソウ」が一面に咲き、見事なところですが初冬の雨は静かで見るものはありませんでした。

登山口から少し行くと「三国峠への道は全面通行止め」の看板がありました。千曲川の流れの音が左からサラサラと聞こえて気持ちがいい。１０分歩くと、千曲川源流方面と分かれて分岐を左に行く。立派な木橋で千曲川を渡りました。道は広くカラマツの落ち葉でふわふわしていて歩きやすい。２本の丸太でできた橋で支流を左岸、右岸と3回ほど渡ると、今度は大石がゴロゴロした登りになり、まもなく水場に着きました。エンビのパイプから流れ落ちる水は小沢からの流れてくるようでした。

ここから急登になり、蒸し暑かったせいもあって登るにしたがい汗でびっしょりになりました。４回目の渡渉は涸れた沢で渡り、支流と支流の間を登ることとなりました。中間点には「十文字まで１時間」と案内がありここからつづら折りの急登になる。あたりは樹林帯で苔むしている。尾根に上がると直角に左折して十文字小屋に向かう。

十文字小屋は７名の宿泊者で、小屋で買った缶ビールや持ち寄ったボージョレ・ヌーヴォー、小屋の主人からの差しいれの焼酎を飲んでワイワイガヤガヤ、９時過ぎ就寝。

2日目

夜明け前の外は昨夜までの雨が上り、満天の星空で天の川がはっきり見え低木の向こうに奥秩父の集落の灯りが点々と確認することができ昨日とは違い、今日は晴天を確信した。

朝、７時、十文字小屋を出発する。武信白岩山までは木の根とゴロゴロした岩の急登の連続で、登山道の右側は秩父特有の苔で緑のじゅうたんを敷き詰めたようでした。小屋から３０分ほど行くとやや平坦になりました。大山から武信白岩山まではハシゴやクサリ３本があり慎重に登下降する。武信白岩山から三宝山までは白樺の混じった樹林の中、ピークを3～4回繰り返す。すると、急に樹林帯から明るいところに飛びだした。

【埼玉県の最高峰・三宝山　山頂】

埼玉県の最高峰の三宝山山頂である。

頂上は広く明るいが展望はない。広場の中心部に一等三角点がどっしりと収まっている。貫録のある三角点だと思った。広場の隅っこにある小岩の上からかろうじて甲武信ケ岳が見えた。

三宝山から一旦下って最後の急登で甲武信ヶ岳に到着。山頂はさすがに人気で１０人ほど登山者がいました。国師岳、大弛峠、朝日岳、金峰山、御座山、両神山など展望は抜群でしたが、風が強く寒かったので早々に下山開始。千曲川源流で昼食。源流の湧水で沸かしたリーダーのしるこは温かくおいしかった。

源流からは千曲川に沿ってできた千曲川遊歩道を左岸・右岸と下り、ナメ滝は水かさも増していてサラサラとなめらかに滑り落ちているのを見られた。

（益田光男　記）

《信濃川・千曲川源流のお話》

ご存じのように、信濃川は甲武信岳の源流から新潟市西港の先で日本海に流れ込みます。全長３６７㌔で、日本一長い川です。信濃川と呼ばれる部分が１５３㌔，千曲川と呼ばれる部分が２１４㌔です。

以前、単独行で同じコースを歩き、「千曲川・信濃川水源地標」の標柱の脇に座り休憩していると２組のパーティに合いました。１組は新潟市内から夜中に出発して車で毛木平の登山口に朝着いて登ってきたという若夫婦と中学生の女の子と小学生と思われる男の子の４人連れでした。奥様は山慣れしていて、旦那さんやお子供たちをリードし、甲武信岳に登り、下ってきたとのことでした。無事ここまで４人で来られた安堵と、新潟市内で見る大きな川がここから始まることにとても感動しておられました。

もう一組は単独で新潟市の西港から源流を見るために歩いて１０日間かけ辿り着いたとのこと。道路は信濃川より長く、一日４０㌔以上歩いたとのことでした。古希をすでに過ぎたというこの方の健康と健脚に感服いたしました。

ところで、信濃川の支流の犀川や奈良井川の源流の方が総延長では長い。千曲川の両岸は緩斜面が続き上田盆地・長野盆地と平坦な地域を流れてきます。犀川は急斜面の峡谷を流れてきて長野盆地で千曲川と合流する。このように平地を流れてきた千曲川に犀川は丘陵地帯から千曲川に流れ込むように見えるため千曲川が本流となったといわれております。また、犀川は上高地から流れてくる梓川が本川で源流は槍沢の上方天狗池あたりだそうです。犀川の支流である奈良井川は中央アルプス茶臼山（２６５２ｍ）北壁が源流です。

参　加　者
◎大和田良一、鹿野紀彦、
益田光男　計３名
コースタイム
１日目：毛木平―10 分―十文字峠分岐――
20 分―水場―40 分―中間点――
60 分―十文字小屋
２日目：十文字小屋―50 分―
―大山―70 分―尻岩――55 分―
三宝山―35 分―甲武信岳―135 分
―毛木平

〈紀行文その2〉

登山口の毛木場に車を止め、そばの四阿で、雨を避けながら昼食とした後、雨具を身につけ出発する。道は完全に整備され、この程度の雨降りなら何の問題もなく歩ける。2時間ほどで小屋に着き、燃え盛るストーブで、濡れたものを乾かし、明日に備える。

夜は、解禁されたばかりのボジョレヌーボを飲みながら同宿となった登山者たちと、一時の山談義。夜も更けてさぁそろそろ就寝という頃、空は満天の星空であった。

夜明け前通り雨があったが、朝食の後出発しようとすると、上空は雲だが、山の麓の方は日が当たり、好天の予感。大山への緩やかな登り道を辿るが、あたりは薄暗く、奥秩父らしい雰囲気に満ちている。掴まる必要はない程度の鎖場を数ヶ所越えて、大山の頂上に着くと、動き始めた雲の下に、両神山や御座山が見えていた。標高の高い八ヶ岳は残念ながら雲の中だ。

三宝山からは再び少し下って、甲武信岳へと向かう。関東平野から見る甲武信岳は、単純に三峰、つまり木賊山、甲武信岳、三宝山と見えるが、三宝山からは2度ほど登り下りを繰り返し、ようやく

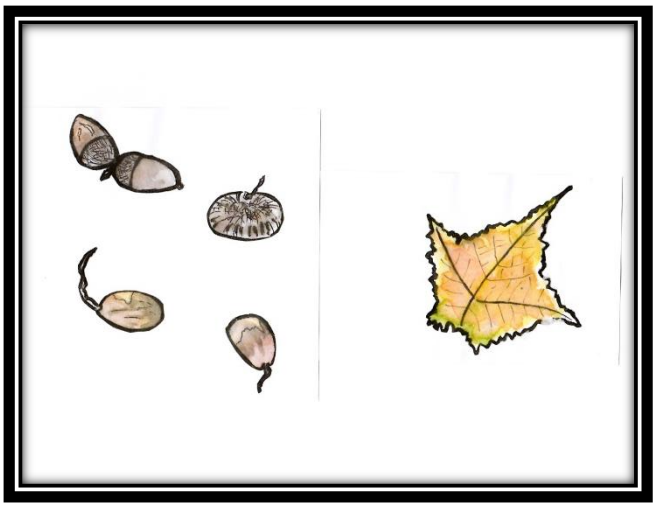
本当に最後の登りとなる。急な登りをひとしきり耐えると、強風の吹き抜ける甲武信岳についた。

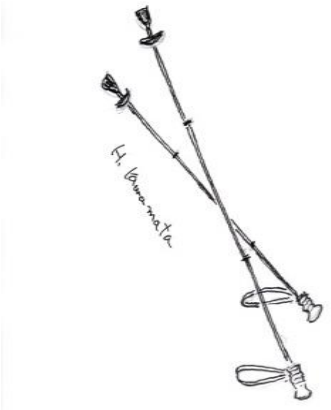
頭上は素晴らしい青空だ。やはり八ヶ岳は見えないが、奥秩父の主脈、国師ヶ岳から金峰山へと続く稜線が素晴らしい。いつか歩きたいと思わせる重厚な縦走路だ。頂上からは青空のもと両神山から西上州の山々、奇怪な形の五郎山、男山や天狗山、そして御座山がよく見えた。

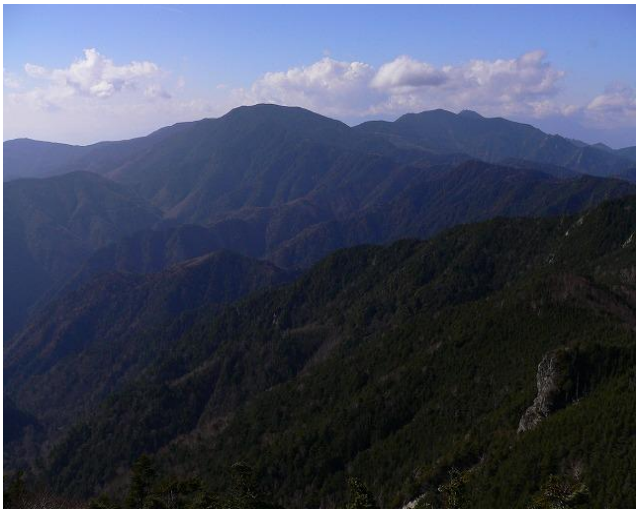
頂上で展望をおかずに昼食にするつもりだったが、風が強くて寒いので、写真を撮って小休止した後、千曲川水源へと向かう。縦走路をわずかで、水源への分岐に着き、展望ともお別れである。千曲川水源で昼食にする。

そして山行のフィナーレは、緩やかな沢沿いの道を毛木場へと歩いていく。最初はカップでやっと掬える水量だった千曲川が、歩くにつれてどんどんと水量を増し、奔流となる。葉の落ちつくした木々の間から、透明度の高い青空がのぞく。晩秋の奥秩父は、私たちの心を充実感でいっぱいに満たしてくれた。

（大和田良一　記）







【甲武信岳から見た　国師ヶ岳と金峰山】

浦和支部

創立２０周年に寄せて

新ハイキングクラブ
会長　鮫島員義

浦和支部のみなさま、支部創立２０周年かつ「埼玉１００山」の刊行、まことにおめでとうございます。

あー、すばらしいなー！　ですね。

いつも元気で前向きな浦和支部のみなさんが、今度はどんな企画をみなさんで取り組まれるのかと密かに期待しておりましたら、とても素晴らしい企画を完遂されたのですね。

今回完成された埼玉１００山は、今後埼玉の山を語るときに、必ず言及するべき資料になるのではないかと考えています。浦和支部の多士済々振りを発揮し、老・壮・青(?)男性・女性、いろいろなお仕事をなさってこられた個々人が、それぞれにお持ちになっているタレントをお互いに尊重し、発揮しあいながら完成されたことに感服です。

一山一山の紹介記事をじっくりと読ませていただきたいと、ワクワクしながら期待しています。私も埼玉県民の一人として、今後できるだけ多くの山を目指していきたいと大いに刺激を受けました。

また浦和支部の２０年間の元気な活動の中から、明るく頼りになる立派なリーダーを何人も輩出されておられることも大変に素晴らしいと感謝しております。

高齢化だ、少子化だと喧伝ばかりされ少々元気がない様に見える日本にとって「読んで、登って、仲間ができる」の新ハイキングの役割はますます大切で、元気な気持ちを持って取り組めば、思いもよらなかった大きなこともできるのだと、この「埼玉１００山」は示していただいたように思います。

今後とも、浦和支部が他の支部の一つのお手本にもなっていただくように、ますます元気闊達・活気に満ち、かつ和気藹々とした支部として一層活発に活躍するようにお願いいたします。

浦和支部が今後ますます発展し、３０周年・５０周年に向かって、今の『おもしろそうなことなら何でもやってみましょう！』という若い気持ちを持続して、みなさまが一緒に喜びを持って祝うことができますように、一層のご健康・ご活躍をお願いいたします。

【顔振峠　水野律子・スケッチ】

おめでとう！

創立 20 周年

編集後記

浦和支部創立二十周年記念誌『埼玉百山』を編集発行するにあたり、支部会員の皆様から素晴らしい山行紀行文、写真、挿絵、スケッチ、イラスト、ポンチ絵、ルート図を寄せていただき誠にありがとうございました。

この記念誌は、２０１０年６月から２０１４年４月まで約４年間かけて浦和支部の皆さんが、延べ９６５名で歩き、担当筆者の方からいただきました貴重な山行紀行文であります。

お読みいただける皆様には、ご自分と違った感想をお持ちになるかもしれませんが、「この山、歩いてみたいな～」と感じられましたら、ガイドブックと一味違ったルート案内の一つとして参考になされるのもよろしいかと思います。

支部会員のみなさん、これからも健全な山行を行い、会員相互の交流並びに親睦を深め、健康体力の保持増進を進めてまいりましょう。

ありがとうございました。

平成二十六年十一月吉日

―編　集　協　力　者―

編集責任者：倉重裕一
編集委員　：井上武久、池田信一、大瀧正己、大和田良一、荻原章子
　　佐藤　新、清水　博、互　茂子、益田光男、松崎忠央
　　森田憲子、力丸忠夫、和田厚子、
山行紀行文担当：Ｐ1～Ｐ3　参照
表紙(版画)　：浅田良一
百山位置図：大瀧正己、益田光男
挿　　絵　：浅田良一、川俣秀子、水野律子、互　茂子、益田光男
ポンチ絵　：小澤紀行
ルート図　：井上武久、池田信一、大瀧正己、大和田良一、佐藤　新
　　高田良一、床次泰文、益田光男、力丸忠夫、
ＨＰ担当　：大和田良一
会報担当　：倉重裕一、武田建治

【水野律子　スケッチ】

発行：新ハイキングクラブ　浦和支部
連絡先：益田光男
さいたま市緑区大間木
１７６４～１～６０９
☎０４８(８７５)２１６１